朝鮮史研究会会報
宮田節子さん　追悼特別企画号

発 行　朝鮮史研究会（会長　藤永 壮）
連絡先
（関東部会）東京都国立市中２－１
一橋大学 社会学部
加藤圭木研究室気付
（関西部会）京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学 ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞ研究科
太田修研究室気付
ホームページ　http://chosenshi.gr.jp/
編 集　関 東 部 会

特 別 企 画 号
２０２５年2月２８日発行

宮田節子さん　追悼特別企画号発行にあたって

一九五九年一月の朝鮮史研究会発会以来、永らく当会を牽引してきてくださった宮田節子さんが、二〇二三年九月二七日に逝去なさった。翌年六月一五日に、宮田さんと関係の深い学習院大学にて、主催・当会と共催・学習院大学東洋文化研究所の形で「宮田節子さん追悼特別企画　宮田節子さんと朝鮮史研究」を開催した。この会は、宮田さんを学術的に偲ぶ場として企画し、一六〇名を超える参加者を得た。

今回の朝鮮史研究会会報は、この「宮田節子さん追悼特別企画　宮田節子さんと朝鮮史研究」の様子を伝えるべく、特別企画号として発行するものである。当日参加が叶わなかった方々にもお読みいただき、宮田さんを偲んでいただければと思う。

目　次

◆追悼のことば
吉田　光男　氏
宮田節子先生を想う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二
李　成市　氏
追悼　宮田節子先生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・九
李　熒娘　氏
お姉さん！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一五
◆個別報告
河　かおる　氏
朝鮮史料研究会と宮田節子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一六
板垣　竜太　氏
草創期の朝鮮史研究会・日本朝鮮研究所と宮田節子・・・・・・・・三〇
庵逧　由香　氏
宮田節子の朝鮮近代史研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四七
◆寄せられた思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五七

宮田節子先生を想う

吉田　光男

【写真１】宮田節子先生遺影

二〇二三年九月二七日、宮田節子先生が逝去された。享年八七歳。逝去されたことも、またそんなご高齢であったことも信じられない、いや信じたくないとしか言いようがない。深い喪失感に襲われている。

はじめてお会いした時から変わることのない、小柄で、かちっとしたパンツスーツ姿がきまり、「凜」という言葉そのままのお姿はいつまでも私の中で生きている。私だけではなく、日本で韓国朝鮮史の研究をしてきた同世代あるいは後輩たちにとって、宮田先生は「母」であり「姉」であった。多くの方々が宮田先生について強い思いをもっており、それぞれの人にとってそれぞれの宮田先生がいる。私もその一人として、私にとっての宮田先生の姿を文字にとどめておきたい。

宮田先生は、第二次大戦後の日本における朝鮮史研究の世界で傑出した存在であった。創氏改名や皇民化政策をはじめとする植民地時代史研究で学界に多大の影響を与えた。朝鮮近代史研究を牽引されてきた一方で、教育や学会活動を通じて後進の育成に務め、朝鮮史研究の基盤拡大に大きな貢献をされてきた。

宮田先生の大きさはもう一つ、その人間性である。私がそれを最初に経験したのは、はじめてお会いした半世紀ちかく前にさかのぼる。一九七六年四月の朝鮮史研究会月例会の席であった。紆余曲折の末、三〇歳を目前にして辛うじて大学院修士課程に入学した直後のことである。これからは真面目に研究せねばならぬと、それまで敷居が高くて敬遠していた朝鮮史研究会の月例会に意を決して出席した。すでに朝鮮近代史研究者の中心的存在として高い評価のあった宮田節子先生をお見かけして、勇気をふるって「吉田と申します」という挨拶を始めるや、「あら、あなたが吉田さんなのね。武田さんから話は聞いているわよ。いろいろと苦労したようね。でも、朝鮮史を研究したいのなら私がいつでも味方になるからね」とここまで一気である。「武田さん」とは、私の指導教授武田幸男先生のことで、お二人が無二の親友であることは後に知ることになるのだが、その親友から話を聞いているというだけで私のことを信用して下さった。その言葉どおり、それから四〇年以上にわたって常に私の心強いことこの上ない「味方」として、研究以外のことまで誠心誠意、力を貸して下さった。大学という組織の中でもがいていた時、研究の行き詰まりに悩んでいた時、学界の中で苦しい立場におかれていた時、いつも「私はあなたの味方よ」と言って、的確なアドバイスをして下さるだけでなく、信頼関係を基礎として築き上げた豊富な人脈を動かして問題解決に尽力して下さった。そのご恩の有り難さは言葉で言い尽くすことはできない。

しかし、私だけが特別な扱いを受けたというわけではない。朝鮮史を研究する若手たちは、多かれ少なかれ、宮田先生の恩義を蒙ってきた。私と同じかそれ以上に、先生を恩人として尊敬し慕っている人は多い。朝鮮史を研究する後進の多くにとって、宮田先生はいつも力強い「味方」

であった。「朝鮮史研究をする若手は日本の歴史学界でもっとも良質な人たち」であり、「日本の宝」だというのが先生の口癖であった。「こんなご時世に何の得にもならない朝鮮史を研究する」のだから「見上げたものだ」というのがその理由であった。私など、ただ韓国朝鮮が好きだからというので朝鮮史研究を始めただけであり、せいぜいが「物好きな御仁」だとしか言いようがないのだが、それでも「宝」だそうである。かつて旗田巍先生が「朝鮮史研究は後継者のいない学問」だと嘆いておられたが、宮田先生はそれをご自分の力で解決されようと尽力されていたのである。後進を高く評価して励まされたのは、朝鮮史研究の灯を消してはいけないという切実な思いからである。

宮田先生は実に「情」の深い方である。「人情」「友情」「情熱」そのすべてが先生のものであり、我々に対する時それが「優しさ」となり「温かさ」になってほとばしり出てくる。恵まれない立場にある朝鮮史研究にわざわざ身を投じようというのは、「見上げたもの」であり、ご自分と道を共にする同志なのだからと、厚い「友情」で接して下さった。

超一級の研究者でありながら、ご自分の意志で象牙の塔から身を遠ざけておられた。これは、大学などの教育機関や研究機関を忌避したという意味ではない。宮田先生が遠ざけたのは、象牙の塔に禄を食むことであった。「わざわざ宮仕えして自由を捨てることはない」からであって、そういうものは自分ではなく、後進たちに譲るべきものだという強い信念からである。誇り高い「市井」の「生活人」研究者として終始された。

実際に宮田先生は、教育と研究で象牙の塔と積極的に関わりをもち、全力で取り組まれた。早稲田大学や日本女子大学など東京地区の大学をはじめ、大阪外国語大学、九州大学など、依頼をされれば忙しい中を縫って、全国各地の大学で講義を受け持たれた。学習院大学東洋文化研究所では、若手の研究チームを率いて朝鮮総督府関係者の聞き取り記録の整理出版という大事業をなしとげられた。象牙の塔を忌避したどころか、そこを舞台にして、凡庸な教育者や研究者では及びもつかない活躍をされ、後世に大きな遺産を残された。もはや死語に属するような言葉だが、「在野」の人で終始しながら、その裏では、後進たちが研究者の道を歩むことができるように教育・研究機関への就職には人一倍心を砕いておられた。

母校早稲田大学文学部で長年勤められた非常勤講師を定年退職される際、先生を「師」と仰ぐ教え子たちによる感謝の集まりが開かれた。それだけ先生を慕い、深い影響を受けた学生が多かったということである。光栄なことに、いちども先生の講義に参加したことのない私までもその末席を汚すことが許されたが、大学や授業などという制度的な枠を越えて、朝鮮史研究という共通点でつながり、「情」でつながっていれば十分であった。宮田先生を慕う方たちの「情」と宮田先生の「情」が醸し出す暖かな雰囲気が満ちあふれた素敵な集まりであった

市井の生活人研究者である宮田節子先生は、誰よりも早く原稿を提出することで知られていた。むろんそれまでの膨大な蓄積があり、そもそも文章を書く力があってこそのことであるが、締め切り超過という研究者の悪弊は許せなかったのである。家業の経営に勤しみ、「市井の生活人」ということを強く意識されている先生には、「商売をやっている人間にとっては納期に遅れることがどれだけ信用を失わせるひどいことか」というのが「世の中の常識」だという強い思いがあった。市民生活を送っているこちらとしても、おっしゃることは重々、納得しているが、悪癖を克服することができない「非常識」な人間のままである。宮田先生の意志の強さには感心するばかりである。

自らの強い意志で「在野」の研究者を貫かれた宮田先生が何よりも大事にされたのは、「市井の生活人」としての感覚である。先生は早寝早起きで知られていた。ご家族や家業を第一にする以上、早朝を活用することで研究時間を捻出されていたようである。毎日、買い物の値段に頭を

悩ませる生活人こそが歴史の主体であるという先生のお考えは、観念的や抽象的なものではなく、具体的な日々の生活の中から紡ぎ出されてきたものである。

そんな先生が研究を生み出してきた書斎は、見事に磨き上げられた木の床に余計なものが何一つ置かれず、書棚にぎっちりと並ぶ研究文献と並んで、整理整頓されて棚を埋める史料の束が印象的である。先生の人柄にふさわしい「凜」とした空気があふれていた。寺内文庫や斎藤実文庫をはじめ、各所をかけずり回って集めた複写資料が見る者を圧倒する。多忙を極める日常生活の中から時間を捻出して国立国会図書館などに通いつめ、吟味して収集した資料たちである。「在野」だから、「文献だって資料だって自分で集めるしかないのよ」というのが、生活人研究者宮田節子先生の言葉だった。市井の生活人だから「アマチュアの研究者」と自称されていたが、先生の研究は、史料を博捜し、緻密に読み込み、史実を確定し、あくまでも実証的に展開される。まさに研究の王道を行くプロ中のプロの仕事であった。

この書斎から、「創氏改名」、「皇民化政策」、「流言蜚語」など、植民地支配政策やその時代の朝鮮社会の実相に鋭く切り込む研究が生み出され、それまでの常識を打ち破って朝鮮近代史に新たな地平を切り開いてこられた。近代史の門外漢である私がその研究の価値を云々することなどできようもないが、エリートや支配者側が発する「大きな声」ではなく、生活人たちの「小さな声」に耳を傾けてきた宮田先生ならではの研究だと思う。「先入観なく史料を読んだだけよ」とおっしゃるが、日本による植民地状態が日常そのものであった朝鮮で、普通の人々がどのように考え、生活をしてきたのかに思いをはせる感性は、生活人に徹すればこそ出てきたものであろう。朝鮮の人々を、支配政策の被害者というだけではなく、日本の植民地下という条件の中で、家族を守り、より良き「生」を求めて一日一日をしぶとく生きる「生活人」だという視点からとらえるところから出された研究は、近世をフィールドとする私にも大きな示唆を与えてくれる「学恩」そのものである。

宮田先生が韓国朝鮮の近代史研究を志すきっかけとなったのが、在日の友人たちとの出会いだそうである。「こんな良い人たちを苦しめる」という不条理を許すことができないという気持ちから、朝鮮近代史とりわけ植民地時代の研究を志すことになったという説明をうかがったことがある。その思いは、在日朝鮮人の研究仲間に対する深い「情」として現れ、姜徳相、朴慶植、朴宗根などをはじめとする諸先生方から絶大な信頼を受けていた。私がある時、姜徳相先生から、「植民地を肯定するような右翼・保守派である」との誤解を受けて弱っていた時には、「そんならいちど会って話してみなさいよ」と仲を取り持って下さった。頑固な姜徳相先生だが、「宮田さんが言うなら」と軟化して二人で話し合いをもつことができた。おかげで、すっかり誤解が解けたばかりではなく、長時間の話し合いが終わって別れるときには、「君たちのような若者がいる限り、朝鮮史研究会は何の心配もいらないよ」との言葉とともに力強い握手までしていただいた。誤解が解けてからの姜徳相先生も私の強力な「味方」になって下さった。まさに宮田先生のおかげである。

姜万吉、安秉直、李佑成など、韓国からいらっしゃって長期滞在される先生方のお世話も宮田先生のお仕事であった。とりわけ李佑成先生は、宮田先生のご自宅近くに居を構え、ヒマさえあれば訪問して美味しいコーヒーを飲みながらおしゃべりに興じていた。李佑成先生と言えば、慶尚南道密陽で南人名門士族の家に生まれ、幼少のころからソンビとしての教育を受け、若くして韓国学研究の大家となられたという、韓国伝統文化そのもののような存在である。どこまでも居住まい正しく、謹厳実直を絵に描いたような方であった。軍事政権に反抗したということで勤め先の成均館大学から出されて、一時期、東京駒込の東洋文庫に研究員として在籍されていた。私などには雲の上の人で、とうてい近寄りがた

い厳かな雰囲気をもっておられたが、宮田先生にかかっては、単なる韓国のおじさんになってしまい、何だかんだとからかわれていた。それを喜んで受け入れている李佑成先生のお姿は韓国の方たちには想像もできなかったであろう。宮田先生と李佑成先生の「情」が感応しあったからであろう。

研究を牽引し、多くの人たちから信頼されていた先生だが、「長」と名のつくようなものは、「私のような肩書きもない者にはつとまるわけがないわ」とおっしゃって拒絶されていた。本音のところでは「権威なんか嫌だし、自由がなくなるなんてまっぴらごめん」であった。その宮田先生が、若い幹事たちの要請にほとんど二つ返事で引き受けたのが朝鮮史研究会会長の職である。それだけ、朝鮮史研究会と朝鮮史研究に愛情があったからである。ただし、ご自分で「任期は三年一期限りで再任なし」というシンプルな条件をつけられた。これには宮田先生の、朝鮮史研究会の運営を正常化したいという強い思いがあった。かつて旗田巍先生が諸種の事情から一七年にわたって会長の席にあったため、朝鮮史研究会の中にはあまりよろしくない空気が漂っていた時期があった。会長任期は本来一年であったが、再任や重任に対する制限規定がなかったため、「余人を持って代えがたし」ということで、旗田先生が再任を繰り返すことが当然のようになっていった。その結果が一七年の長さになったのである。すったもんだがあったものの、旗田先生が退かれた後、会長任期は三年で任期の延長や重任はなしという申し合わせをすることになったのだが、幹事の一部から異論が出て、事情によっては柔軟な対応ができるようにと、「三年をめどにして交代する」というあいまいな表現に改められ、三年を越えることができることになってしまった。宮田先生は、これをはなはだ好ましくないものとして、条件をつけられたのである。そして就任から三年後、すっぱりと辞任されてしまった。それ以後、歴代の会長は必ず三年で交代することが当然になって現在に至っている。会長職を「権威」化してはならないという、宮田先生の強い意志によって会の運営が正常化された。

宮田先生には何度も救われた。朝鮮史研究会幹事長をしていた時の話である。会長の旗田巍先生から、「朝鮮半島南北の学術交流会を開こう」という話が提起されたことがある。時は一九九〇年代のことである。旗田先生は、行き詰まっている南北統一の実現に少しでも貢献をしたいという強い思いから提案をされたのであった。幹事長が実務責任者ということで動き出したが、資金、企画などいずれも私の手に余る上に、そもそも北朝鮮から研究者を呼ぶにはどのようにすれば良いのか皆目見当がつかなかった。しかし、そんなことも言ってはおれないので、まずは資金を確保すべく、学術振興会の科学研究費や学術関係の財団法人の助成を受けようと考えたが、自分個人の研究費でさえもまともに確保できないほどの私には夢のまた夢の話であった。ない智恵をしぼって、新聞社とタイアップして経費を負担してもらうというプランを立ててみた。ところが現実は甘いものではなく、密かに新聞社に探りを入れてみると、テーマや規模の大筋ができてからからはじめて相談に応じるという至極もっともな話であった。

私よりはるかに経験も豊富で力もお持ちのはずの幹事の中からは「やるべきだ」という声は出たものの、具体的に動くわけではなく、まさに手詰まり状態であった。焦る私に手を差し伸べてくれたのが宮田先生である。金も力もない学会にとってこんな大きな企画がいか難しいかは誰よりもよくご存知でいながら、とにかく道を切り開くためには情報を集めるのが一番だと、在日本朝鮮人総連合会（総連）の学術関係部処と朝鮮大学校からしかるべき方数人を招いて意見交換会を準備して下さった。まさに地獄に仏である。総連側の方々も、他ならぬ宮田先生の要望だということで出張ってこられたのである。

韓国側への働きかけは簡単である。こちらが立てたテーマに応じてし

かるべき研究者に声掛けすればすむだけの話である。費用の点でも、貧乏学会であることをよくご存知なので、無理なことなぞおっしゃるはずがない。ところが、総連側の話を聞いてみると、交流は歓迎するが、費用の点などでさまざまな条件があり、しかも、テーマも研究発表者も参加者数も北朝鮮本国側で決め、日本や韓国が提案したり異論を挟むことはできないというのである。およそ朝鮮史研究会のように若い幹事たちが運営の中心となっている小さな学術団体には実現不可能な話であった。結局、この話はしばらくして立ち消えとなってしまった。先生に助けていただいたことに深く感謝すると同時に、先生が北朝鮮側（朝鮮総連側）にも深く信頼されていることを感じ取った一幕であった。

宮田先生が日本、韓国、北朝鮮を問わず、多くの人や組織から信頼されていたのは、先生が、人と人、組織と組織などあらゆるものを融和させ、より良きものとすることに献身されていたからである。その信頼を基礎として、朝鮮史研究会と朝鮮学会、東日本の研究者と西日本の研究者、戦前からの研究者と戦後世代の研究者などが相互に理解し合い協力しあうことができるよう、宮田先生の「つなぐ力」が発揮された。

私が入会したころの朝鮮史研究会関東部会には、朝鮮学会とあたかも対立しているかのような空気があり、京城帝国大学や朝鮮史編修會などの帝国主義、植民地主義と関係のある研究者が集っているのが朝鮮学会だという批判の声がちらちらと聞こえてきていた。しかし、朝鮮学会の中心メンバーである四方博先生が朝鮮史研究会創立会員であり、同じく井上秀雄先生が朝鮮史研究会関西部会設立の中心であったことを見れば、それが虚構にちかいものであることは実証されるが、そのような意識は薄まりながらも、二〇世紀の終わりころまで残っていたように思う。その両学会をつなぐ役割を果たしたのが、「だって両方とも大事なものよ」とおっしゃる宮田先生であった。

そもそも、朝鮮学会が発足した一九五〇年一〇月は、第二次世界大戦終了からわずか五年、朝鮮戦争開戦から四か月後で、朝鮮半島が悲惨な状況にあった時期である。そんな時、朝鮮から引き揚げてきた研究者や日本で活動していた研究者たちが、何とか研究の基盤を作りたいということで集まって結成したのが朝鮮学会であり、当時、唯一の朝鮮学研究者の集まりであった。その九年後の一九五九年、それまで歴史学研究会朝鮮部会として活動していた若い朝鮮史研究者たちが朝鮮史研究会を立ち上げたのである。これで東西に朝鮮研究の二つの拠点がそろったのである。両学会は日本の朝鮮学研究を支える両輪のようなものである。関東と関西という地域的なものもさることながら、朝鮮史研究会が歴史学研究者を主たる会員としているのに対して、朝鮮学会は歴史学・文学・言語学・文化人類学など、朝鮮研究全体にわたる多様な研究者が構成員となっている。対立するどころか、協力し手を携えるべきものであろう。宮田節子先生は、末松保和先生、武田幸男先生などとともに、朝鮮学会に設立当初から参加して中心的な役割を果たし、さらに朝鮮史研究会設立でも中心的な役割を果たして会運営の中心を担っていった。宮田先生は、はじめて朝鮮学会常任幹事として朝鮮史研究会会長になられた。さらに濱中昇先生がそれに続き、当然のこととして私も同じ道を歩んだが、もうそのころには両学会を対立的にとらえるような人にはとんとお目にかかれなくなっていた。

朝鮮史研究会は、当初、日本人と在日朝鮮人が対等の立場で作り上げるものだとして、会運営の中心になる幹事会は日本人と在日朝鮮人が同数で構成された。五〇人ほどで発足した小さな学会であったため、幹事は村山正雄、徐台洙の二人体制で出発したが、一九六一年からは、徐台洙・朴宗根の在日朝鮮人二人と並んで、宮田節子・武田幸男という日本人二人が幹事となる四人体制になった。この四人で、毎月増えてくる会員への連絡や、月例研究発表会の開催、会報の編集など、朝鮮史研究会の運営全般を支えられた。宮田先生は二〇代の若さでこの重責を担った

【写真２】朝鮮史研究会会長として朝鮮学会第 48 回大会で公開講演をされた宮田先生（1997 年 10 月）

のである。この時に苦労をともにした武田幸男先生と宮田節子先生は、深い信頼関係に結ばれ、生涯変わることなき無二の親友となられた。

宮田先生は常々、「朝鮮史研究会の月例会は病欠以外は皆出席よ」とおっしゃっておられた。その言葉には、日本の朝鮮史研究をささえるのだという責任感と、自分たちで作り上げてきた会なのだという愛情が光っている。宣言どおりに三年で会長職を辞された後も、月例会にはほぼ皆出席で、会長職を退いた方がともすると月例会から足が遠のくという好ましくない状況を鋭く批判されていた。まさに身をもって範を垂れたのである。おかげで私も会長職を辞してから、よほどのことがない限り月例会をサボるようなことがなく、さまざまな研究にふれることができて大いに刺激となった。宮田先生の戒めが、怠惰な私にとっては優しくも厳しい鞭になったのであった。

私がようやく朝鮮史研究会月例会に慣れてきたころ、月例会で朝鮮史編修會が編纂した『朝鮮史』に対する批判の発表があった。とにかく御用学者が編纂した怪しからんものであり、偏見に満ちているから利用するなどもっての外だというような論調だったかと思う。『朝鮮王朝実録』をはじめとする史料を読み取り、的確に整理して綱文としてまとめた同書は、漢文読解さえ怪しく、近世史研究を志しながら、近世という時代の基礎的な知識も覚束ない者にとっては有り難く光輝くものにみえた。それを利用するなと言われては立つ瀬がない。宮田先生にご意見をうかがったところ、「戦前の研究を乗り越えてから言うべきよね」と一刀両断で終わりであった。四方博、中村栄孝、末松保和、田川孝三などの先生方のお名前をあげて、京城国大学や朝鮮史編修會で活躍した歴史研究者たちが、いかに深い教養と知識を基礎にして優れた研究成果を出されたのか、それが戦後の朝鮮史研究に受け継がれなければならないのに、実状は必ずしもそうではないことが問題だと教えていただいた。宮田先生はそれら戦前の研究者の方々と場を共にしてその奥深さをよくご存知であり、緻密かつ論理性に優れた実証的研究の質の高さに研究者として尊敬の念をいだいておられた。私は幸いにして田川孝三先生から個人的に教えを受ける機会を得ることができたし、河野六郎先生から東洋文庫の研究室で親しくお話しをしていただいたが、それ以外の戦前の研究者の方々の人となりや息吹までも教えて下さったのは宮田先生である。宮田先生は、世代を越えて戦前と戦後をつなぐ朝鮮史研究の「語り部」である。

友邦協会の朝鮮総督府関係者の聞き取り調査記録と、その文字化という大事業は、世代間をつなぐ「語り部」宮田先生の後世に対する大きな贈り物である。学習院大学東洋文化研究所の研究年報に掲載された記録は二〇二三年までで合わせて一九編を数え、第一級の史料となっている。宮田先生は若き日、穂積真六郎先生などを動かし、まだ元気だった朝鮮総督府の元官僚たちに植民地支配の実態を話してもらい、録音記録として保存するという近代史研究の言わば一次資料を作り出すという大事業をなしとげられた。宮田先生のご尽力のおかげで、公式記録からはうか

がい知ることのできない、総督府官僚の考えや支配の実態などが見事に記録として残されることになった。もしこの事業がなかったら、これらの証言で語られた事実は記録に残らないまま闇の中に消え去ってしまっていただろう。しかも、それらの録音記録を文字化し、若手研究者の手による詳細な註を付して公開するという、学界全体に対する大きな贈り物に仕上げていただいた。宮田先生はこの事業を畢生のものと位置づけられて全力を傾注されていたが、記録としての重要性の故もさることながら、録音を聞いただけでは発言者が誰であるかは分からないことが多く、それを解決できるのは、聞き取り調査のすべての場に立ち会った宮田先生しかいらっしゃらなかった。こうしてすべての発言者が同定され、証言は記録として完成して植民地時代研究の最重要史料の一つとなったのである。

かつて朝鮮史研究に携わる者にとって、研究と共に社会運動は車の両輪のようなものだと言われていた時期があった。日本朝鮮研究所をはじめ、多くの社会運動の場で活動し、研究と運動を「つなぐ」代表者だと目されていたのが宮田先生である。しかし、宮田先生はそのような評価を即座に否定された。先生によれば、「研究も運動も一人の人間の手には余るように大きくて深いものだから、二つともになどできるはずなどない」のである。それどころか、ろくに研究をしていない者に限って、運動の場では研究者然としてふるまい、反対に研究の場では運動家然としてふるまう、ヌエのような存在で信用などできない、とのことであった。人一倍研究にも運動にも熱情を込められた宮田先生の言葉だけに、その言葉は限りなく重い。最近ではそのような御仁はほとんど姿を見かけなくなったが、宮田先生のお言葉のおかげであろうか。

最後になるが、人間宮田節子先生はおしゃべりの大好きな明るい方である。本質的に「陽」の人なのである。先生の回りは常に「笑い」に満ち、「明るさ」が絶えることはなかった。後進たちはそんな宮田先生に励まされて成長してきた。ところが先生は若かりし日、「あなたは立派な研究者だが、笑いすぎるのが欠点だ」との批判を受けたとのことである。そもそも、植民地支配や朝鮮人差別のことを思えば、笑うことなどできないはずなのだからだそうである。「まったく嫌になっちゃうわよね」と笑い飛ばされたとのことにホッとした。

宮田節子先生の「笑い」と「明るさ」の根底にあるのは、「人間が好きだ」という一言に尽きると思う。それが優しさとなり温かさとなって私たち後進を助けて下さった。市井に生き、人間を愛した生活人研究者、それが宮田節子先生である。先生ともういちどゆっくりとおしゃべりをしたい、それが偽らざる現在の私の心情である。

宮田先生、有り難うございました。どうぞ安らかにお眠り下さい。

合掌

（『朝鮮学報』第二六三輯より転載）

追悼　宮田節子先生

李　成市

宮田節子先生が二〇二三年九月二七日に永眠された。学部時代より五〇年近くにわたってご指導を賜った者として、心から哀悼の意を表したい。学部生・大学院生時代の頃には、しばしば松戸のご自宅に招かれ、朝鮮学会や朝鮮史研究会創立の頃の写真を見せて頂きながら、往時の研究者の逸話や、当時に至るまでの多難な研究状況を何度もご説明くださったことが今なお、昨日のように思い出される。これまでの懇切なご指導を思い浮かべつつ、絶筆となった論文「朝鮮植民地支配を再び問う」（『世界』二〇一五年七月）の末尾における下記のような文章を再読して、格別に熱心なご指導の所以に思いを馳せざるを得ない。

今年八〇歳を迎える私が、いまなお総督府関係者の証言録をまとめる作業に従事しているのは、決して未来に絶望していないからである。まだ生まれてもいない世代から、優れた研究者が出てくる可能性を信じているからこそ、力の続く限り、資料の編纂に尽力していきたいと考えている。

宮田先生の同級生であった指導教授の紹介状をもって、初めてお会いした際に、先生は私に何を学びたいのかを問われ、朝鮮古代史であることをお応えすると、「武田幸男さんをあなたに紹介するけれども、私に恥をかかせないでね。武田さんは学問に厳しい方だから」とお話しをされた。それ以来、様々な先生方を紹介して頂いた。また、その際には、それらの先生方と宮田先生が出会った当時の印象や、研究者相互の間柄なども詳細に話してくださった。「あなたは在日だから、こういう研究者がいらしたことも知っていたほうがよいわよ」と言われ、北に帰国された金鍾国さんとの思い出話をされながら、親しくお付き合いのあった研究仲間の皆さんと一緒に新潟に出向いて、お別れした時の夥しい数の写真を見せて下さったこともある。

戦後日本における朝鮮史研究の多難な時代にあって、宮田先生は朝鮮史研究をもり立てていかなければならないという使命感は人一倍強く、「決して未来に絶望せず」「研究者が出てくる可能性を信じて」色々とお力添えくださったことを、改めて感謝を込めて読まずにはいられない。

宮田先生は、ご自身がしばしば話されていたことであるが、とても恵まれた家庭で何不自由なく育ち、良妻賢母となるべく、ご両親の薫陶をえられたとのことである。私がご指導を受けた頃には、ご尊父は他界されていたが、晩年には宮田先生が付き添われて、ヨーロッパの主要な観光地を全て巡り歩いたとのことであった。ご母堂は、お訪ねするたびに一介の学生に細やかなお気づかいをして下さった。いつも和服姿の凛とした端正な居住まいで、ご一緒するときは背筋を伸ばして正座を崩さず押し黙って、その場のお話しに耳を傾けていらした。

そのような宮田先生が朝鮮史研究とりわけ植民地期の研究を志した契機については、ご著書など、いくつかの文章を残されているが、お二人の在日朝鮮人との出会いであったという。お一人は、大学在学中に中国研究会で活動していた折に、日本人以上に日本的に思えた親しい先輩が、ある日突然に朝鮮人であることを告白し、以後、朝鮮名を名乗り、中国近代史でなく朝鮮近代史をしたいという宣言を、衝撃をもって聞いたとのことである。

また、もうお一人は、敗色濃くなった太平洋戦争末期に「陸軍少年飛行兵」を志願し、喚呼の声に送られ、親・兄弟と別れ一人「特攻隊の卵」として日本にやってきて、そのまま日本で生活してきた研究者との出会いであったという。

そのようなお二人との出会いが契機となり、彼らの心のひだにまで入って、その苦悩を理解したいという切なる思いが宮田先生の植民地時代の研究、とりわけ皇民化の問題へと進ませたことを述懐されている。

このとき宮田先生が受けた衝撃の大きさは、植民地支配が人間性を破壊したことへの哀れみというよりは、ご自身の体験が前提にあったようである。というのも、小学校四年生で敗戦を迎えた時の思い出として、宮田先生は次のように書かれている。

その日は私が生まれて初めて異国というものを実感した日でもあつた。家の前を朝鮮人の一団が醜悪な塊となつて、異国の匂いをまき散らし、かん高い金属の響を持つた異国語をどなりながら、通り過ぎて行つた。彼等異国人の先頭には、日の丸の上に不遜にも黒々とおたまじゃくしの影を落とした太極旗が誇らしげにひらめいていた。母は私の肩に手を置いていたまま「まあ日の丸が半分ぬられちゃつて……」ともう涙ぐんでいた。どこかの人は「朝鮮は日本を半分占領するつもりなんだ。だから日の丸も半分を黒くぬりやがつて……畜生！」と歯ぎしりした。そばにいた私には、大人の憎悪がそのまま私のものとなつた。自分の祖国が侮辱された怒りと、侮辱した朝鮮人に対する怒りが、一種ケイレンとなつて全身をつきぬけた。それは、アメリカに敗けたりするよりずつと嫌なこととして、私の心に残つた。」（『朝鮮近代史料研究集成』第三号、一九六〇年五月）。

この文章は、それが掲載される二年前に、早稲田大学東洋史学科における卒業論文「三・一運動について」に付された「はじめに――なぜ朝鮮史を学びたいのか」における一節である。さらに続けて、

太極旗を日本侵略の象徴としか理解出来なかつたその無智は、一体どこから来たのだ。アメリカ人にふみつけられるより、朝鮮人にふみつけられる方が痛いと感ずる心は、朝鮮人蔑視の感情なのだ。そう気づいた時から、私はこの感情を末梢神経の先まで洗い出してみようと思い立つた。

と述べている。また『植民地を持つた事によつて、日本は、日本人は、いかに変質して行つたのか』私にとつては――変質の残滓を浴びていると思われる日本人として――その事が重要であり、おそらくは一生の課題なのです」と、朝鮮近代史を志した機縁を綴っている。

宮田先生が卒業論文に三・一運動を選ばれたのは、当時、朝鮮史については三・一運動しか思い浮かばなかったと振り返っている。もっとも当時は「三・一運動」という言葉すら一般化しておらず、卒論指導の担当の教授に題目を告げると、「ああ万歳騒擾事件か」と応答したとのことである。

そうした時代に、資料の所在について途方に暮れていると、東洋史学科の教授であった清水泰次氏に、植民地官僚経験者が帰国後に集っていた友邦協会を訪ねてみてはどうかと言われ、そこで近藤剱一氏と出会うことになる。友邦協会では阪谷文書はじめ貴重な資料が所蔵されており、それらの資料にもとづいて卒論を書き進めたという。そのような過程で、友邦協会の理事長であった穂積真六郎氏と出会って、世代、思想信条を越えて親交を深めていくことになり、さらに穂積氏の紹介により植民地官僚経験者たちに直接、統治の実態についてのインタビューを主導された。

穂積氏の全面的な助力もあって、学部・大学院時代の同窓生であった姜徳相氏、権寧旭氏、東大の院生であった梶村秀樹氏らと協会の関係者で一九五八年に朝鮮近代史料研究会を立ち上げた。研究会において精力的に聞き取り調査を行い、当時テープに収められたインタビューは、のべ五〇〇回に及ぶ（リールテープ四一八本、八〇〇時間）。その内容は、後年「未公開資料　朝鮮総督府関係者録音記録」として、宮田先生の責任編集によって注釈が付され、二〇〇〇年に『東洋文化研究』（学習院大学東洋文化研究所刊、一九号・二〇一七年まで責任編集）に掲載され、現在も断続的に連載が続いている。件の絶筆の論文にも記されているとおり、八〇歳をこえてまで続けられた宮田先生のライフワークであった。

宮田先生は、五八年に学部を卒業されると、早稲田大学には朝鮮史研究を指導する教員が不在のため、青山公亮教授が在職されていた明治大学大学院に進学された。学部卒業翌年には、朝鮮史研究会の創立に旗田巍氏、武田幸男氏、朴宗根氏らと共に中心的な役割を果たされた。青山氏の研究室が学会の事務局であり、初代会長は青山氏であることにも窺えるように、この時二〇代初めであった宮田先生は、すでに朝鮮史研究会の誕生に大きな役割を果たしていたのである。

ご結婚を経てご子息が小学校に入学され家庭が落ち着かれた後、一九七六年より二〇〇六年まで三〇年にわたって早稲田大学第一文学部で朝鮮近代史（講義名は東洋史特論）を講義された。宮田先生を講師としてお招きしたのは、卒論の指導を担当されたで栗原朋信氏であったが、「宮田君も安心できる年頃になったがゆえ」と両先生から依頼された経緯を食い違うことなく伺ったことがある。早稲田大学では当時、文学部のキャンパスで最も多くの学生を収容できる教室で、多いときは二百名を越す人気の授業であった。この間に朝鮮史研究会の会長を務められ、日本の朝鮮史研究をリードされてきた。

先生は、日本の植民地期の統治政策を独自の視点から実証的に掘り下げた研究で国際的にも斯界に大きな影響を与えてきた。主著である『朝鮮民衆と「皇民化」政策』（未来社、一九八五年）は韓国でも翻訳刊行された。とりわけ、代表論文である「創氏改名について　上・下」（『歴史評論』四八六、七号、一九九〇年）は、日本による朝鮮植民地支配の本質のように言われながらも、政策の立案の経緯やその目的が未解明であった研究状況にあって、その後の研究を大きく進展させる画期的な基礎研究となった。この論文を書かれた当時、頻繁に国会図書館に通われて、ご自宅の書斎に複写した資料が山積みになっていたが、それらを指し示しながら、政策立案者の意図がどこにあったのかを解明することが如何に困難であるかについてお伺いしたことがある。

宮田先生の研究史上の業績として特筆すべきは、先述のように、近代日本の朝鮮における植民地政策の実態の解明であり、その開拓者であった。とりわけ、主著で扱われた植民地政策の核心となる志願兵制度、「内鮮一体」論に焦点が当てられているが、それは日中戦争以降、朝鮮統治の最大の目標の一つが徴兵制の施行にあったことによる。先生は、志願兵制度実施のために「完全なる皇国臣民」化をめざした「内鮮一体」の理念が、皮肉にも同化の進展に伴い、朝鮮人を差別する根拠の喪失へ連なっていくことによって生じた日本人の不安と不満が昂じて、日本人の朝鮮人に対する理由なき反感、反発、不信を増幅させる心理的な構造を見事に摘出している。こうした主著で扱われた問題の出発点は、先に言及したとおり、お二人の在日朝鮮人研究者との出会いと親密不可分の関係があり、彼らの心理的な葛藤を自らの問題として取り組んだ成果でもあったと強調されている。

長年のご研究は、韓国日本学会より「瑞松韓日学術賞」が授与されたり、アメリカを代表する朝鮮史研究者であるカーター・エッカート氏の招請により、ハーバード大学で講演されたりと、国際的に高い評価を得ている。

早稲田大学の講師をされていた当時、東京圏はもちろんのこと各地の大学で講師を務められていたが、その後、複数の大学から専任教員として乞われながらも、一主婦の視点から研究生活を送りたいと拒絶された。その言葉のもっている重みは、日頃の先生との会話から感じとらざるをえなかった。「毎日の生活を支えている者こそが尊いのであって、研究しか知らない研究者は気楽なものね、私は毎日、家族の三度の食事を考えなければならないのよ」と言われ、月例会の終了後に惣菜の買い物をされるお姿を目にしたことがある。

そのような先生の信念には、在日一世の研究者たちへの思いがあった

ように推測する。当時、多くの在日の先生方には定職はなく、日々の生活の糧をえるために研究以外の仕事に追われていたことや、研究生活を支えていたお連れ合いの方々のご苦労があることを強調されていた。そうした研究者と常に共にあろうとする宮田先生の心情に接することがしばしばあった。

表向きは、「私は生活には困っていないので、自由な立場から研究を続けたい」ということを口にされていたものの、先生は知己のご夫婦をご自宅に招いたり、日頃は容易に行けないような場所を選んで会食に招いたりされていた。在日の研究者に限らず、宮田先生のお宅でご相伴に与った研究者は少なくない。私も朝鮮史研究会の方々と共に、ふんだんなお持てなしを受けたことは数限りなくある。当時、朝鮮史研究は必ずしも日の当たる場所ではなく、研究を続けていくこと自体が困難とみなされていたこともあって、研究者の夫妻、家族を招かれたことなどは、宮田先生の他者の苦悩を察知する人一倍の感性によるものと理解している。

そのような宮田先生の気概に甘えて、研究者や団体の中には国籍を問わず、年末の困窮した時に、宮田先生のお宅を訪れては年越しの工面を求めた者も少なくなかったという。宮田先生ご自身が負えないような依頼には、ご尊父にお願いすることもあったようで、ご尊父は「穂積先生は立派な方だから」と仰って、信じがたい支援をされたこともあったという。それらが、穂積真六郎氏と全く関係のない依頼であったことは言うまでもない。

先生は家庭では「良妻賢母」として振る舞われる一方、豪放磊落な性格で知られ、その毒舌は多くの研究者に恐れられた。「できれば、宮田さんよりも一日でも長く生きたい。死後に自分のことをどのように言われるのか怖い」という言葉もよく耳にした。学界の大家であれ、年齢、地位に関係なく宮田先生から繰り出される言葉を遮ることはできなかったようである。

宮田先生ご自身から伺った逸話であるが、朝鮮学会大会では盛大な懇親会が開催され、その席には朝鮮学会を支援して下さった中山正善真柱が会場にこられたある時、司会をされていた宮田先生が「真柱はなかなかの美男子ね」と言われたため、周囲の関係者がどぎまぎしたことがあったとのことである。

【写真１】第 13 回朝鮮学会大会会場にて（1962 年 10 月）
右から梶村秀樹、姜徳相、武田幸男、末松保和、宮田節子、宮原兎一、有井智徳（敬称略）

【写真２】新宿の居酒屋にて（1987 年 2 月）
右から宮田節子、姜徳相、梶村秀樹、朴宗根、朴慶植、安秉直、宮嶋博史
（敬称略）

交友関係も広く、上原淳道、山辺健太郎、周藤吉之、末松保和、大村益夫、韓国学界の大御所・李佑成、ソウル大学経済学部で長く教鞭をとった安秉直、金大中大統領のプレーンであった高麗大学教授・姜万吉といった方々とも長い親交があった。韓国の著名な研究者が来日すると、松戸のお宅に挨拶に行くことが慣行となっており、宮田家に招かれたか否かは日本の学界における彼らの認知度のバロメーターとされるほどであった。

学生時代は、中国研究会に属し、東洋史学科の先輩であった姜徳相氏や政経学部の大村益夫氏、また後にお連れ合いになる大西喬氏などと活動されていたが、その当時には、姜徳相氏を通じて、金鍾国、権寧旭、朴慶植、朴宗根、李進熙、姜在彦、金達寿といった在日朝鮮人の歴史研究者、作家諸氏とも知己となり、それらの方々と長きにわたって濃密な交流が続いた。宮田先生は、そうした方々と家族ぐるみの交流を通じて、最も信頼を勝ちえた数少ない研究者であった。そのような意味で、戦後の朝鮮史研究の発展、国際的な学術交流に果たした先生の役割は計り知れないものがある。

私は幸運なことに宮田先生から、人間として、研究者としてあるべき生き方について学部生以来、多くの教えを受けてきた。学問的にも大変に厳しく、研究者は論文が命であり、立派な論文を書かなければ一人前とは認められない、と学生時代の頃から教え諭された。「埋め草みたいな論文を書いてはだめよ」、「論文というのは誤魔化しがきかないものよ、多くの人は誤魔化せても、必ず絶対に誤魔化せない誰かが見ているのよ」、「長く残り続ける論文を書くのよ」、「結局、残るのは研究だけ、地位なんかでないわよ」、「あなたには悪いけど、日本の大学では古代史なんかより、朝鮮近代史がなくてはならないのよ」。

このようなことから、なぜ古代史なのかを深く自問自答せざるを得なかった。私が史学史に特段の関心をもったのも宮田先生の問いに応えようとしたことに由来があるかも知れないと思っている。

研究上の厳しい指導の一方で、宮田先生はアカデミズムしか知らない人間を、どこか危ういものと見ているところがあった。私に対しては教育上の意味があるかも知れないが、その持論は、大家にも容赦なく向けられたことがあった。李佑成氏が東洋文庫の招きで一九八三年に日本に

滞在されたとき、ご夫妻は宮田先生のご自宅の近接したお宅で一年間を過ごされていた。家族ぐるみの交流を重ねられたある日に、私が同席している場で、李佑成氏に対して「奥様がいらっしゃらなければ、先生の研究生活などありえないでしょうね」と遠慮なく言われていた。実際に、宮田先生は李佑成氏よりも多くの時間を費やして奥様の聞きとりをなさり、そのテープ五巻が私の手元に届けられている。

私は宮田先生と同じ早稲田大学東洋史学科で学んだ後輩に当たるが、ある時、「早稲田大学なんて明日なくなったって、日本社会にとって不都合なことなんか何もないわよ」、「たいした業績もないのに大きな顔をしている教授が多いわね」とも言われていた。

戦後の朝鮮史研究は、ある時代的な制約のために、今では想像できないほどに、他の外国史研究とは異なる困難な問題をさまざまに抱えていた。初期の朝鮮史研究会においては、大会を控えた前日に突然、「我々の立場（組織）から、大会の報告はできないということになったので、キャンセルしたい」と言われたことや、「朝鮮史研究会は日本人の学会であるから、朝鮮人は幹事会から引き上げたい」ということもあったとのことである。そのような時に、仲裁に入れるのは、宮田先生だけであった。そうした時代から、晩年に至るまで朝鮮史研究会を誰よりも愛し続け、第一回月例会から出席を続けているただ一人の会員であることを自負されていた。晩年は、歩行も困難になられ、帰宅されると転んで傷を負っていることもあって、ご家族は月例会への出席に困惑したと伺っている。「朝鮮史研究会の例会に出席しない者は朝鮮史研究者にあらず」ということをしばしば口にされていた。私は研究会の席上で「あなた最近、研究会で顔を見ないわね、何しているの。月例会に来られないような大事な仕事でもしているの」と叱咤されることもあった。

宮田先生は先に引用したように、最初に書かれた論文冒頭で、「植民地を持つたことによつて、日本は、日本人は、いかに変質してい行つたのか」を問うている。正確な箇所を忘れてしまったが、後年、おおよそ次のような指摘をされていたことが思い出される。「植民地支配は、人間の尊厳を踏みにじっても何も感じない人間性の欠損をもたらし、そうした人間性の欠損に恥じ入ることのない感性になってしまう。植民地支配は人間性をも破壊する」。

宮田先生のように歴史研究を通して、「自尊の侮辱、承認の毀損を惹き起す文化的暴力」について掘り下げた研究者は多くないのではなかろうか。他者の生がどのような境遇にあるかに対して深い関心を寄せ、他者の苦痛を察知する感性をもちえた数少ない研究者であった。

戦後日本の朝鮮史研究を、身をもって体現された宮田節子先生と同じ時代に研究に従事できたことを心から感謝したい。先生の長年の学恩に感謝すると共に、ご冥福をお祈り致します。

（『朝鮮学報』第二六三輯より転載）

お姉さん！

李　熒娘

私が宮田節子先生の存在をはじめて知ったのは、来日した一九八一年の晩秋、民放の深夜番組 11pm を通じてであった。当時日本語の勉強のためにテレビをつけっぱなしの生活であったが、先生は司会者の大橋巨泉の隣にゲストとして丁度出演したのである。外国人研究生制度がある東大社会学研究科の外国人研究生の身分をもって、大学院受験を考える時期であった。当時日本で朝鮮近代史の科目が設けられている大学は少なかったが、先生が一橋大学でも朝鮮近代史を教えていることを知って、日本近代史と共に勉強することができると思って一橋大学を志願した。幸い入学できて宮田先生の講義を聴くことになった。一九八二年春、本格的な留学生の生活をスタートした。いま振りかえってみると、スタート時点での宮田先生との出会いは、私の留学生活を含め人生に大きな影響を受けるようになった出来事であった。

初授業の終わりにご挨拶した日から、毎週国立の大学通りにある西洋料理店、「Villa」で美味しい昼食を御馳走になりながら先生の授業はつづいた。

歴史に関心はあったが、社会学専攻だったので歴史の勉強は友人何人かと一緒に自主的に勉強したくらいで全く素人だった。なにしろ一年生の一九七二年十月一七日、憲法改正のために戒厳令が宣布され、大学休校令、その後も緊急措置などがだされて、大学生活はまともにできなかった。歴史の勉強は日本でスタートしたので、先生は私にとって歴史学の特別課外・個人指導の教授だった。

その時宮田先生は四七歳、私が二八歳、情熱あふれる先生と、韓国という井戸から出てきて、なにもかも新鮮に感じて新しい世界への好奇心あふれた学生との師弟関係は続いた。その年の終わりごろ、先生は私に自分の朝鮮語の先生になって、とおっしゃった。そうして朝鮮語の先生という名目の下で、一九八二年冬から松戸の先生のご自宅を自由に出入りし、先生からの教えはさらにひろがった。松戸のご自宅に通うことで、日常生活の中の先生を知り、さまざまな新鮮な刺激を受けた。

先生のご家族、友人とも通じて、先生の「徳＝愛情」の大きさを感じた。旦那さまの事は忘れられない。二人で勉強していると、職場から家に戻って作業服の姿のままで、旦那様が紅茶を書斎に持ってきてくれたりしたことはいまもその風景が鮮明に浮かぶ。

一番大きい勉強になったのは、「朝、みそ汁を必ず作る。ぬか漬け作り、大きな家の掃除。掃除しながら研究のことを考える…」という日常生活の中の先生の姿であった。

研究者に欠けやすい先生の生活感覚にふれられて、その時、私はキムチを自分でつけることで生活感覚を磨こうと心に決め、今も続けている。

先生は朝鮮史研究者だけではなく、それ以外の研究者、いろんな方たちとの交流をなさっていたが、韓国から来られた方との交流を大事にした。たくさんの方が、松戸の先生の素敵なご自宅を訪れたのである。

韓国での恩師である李効再先生が解職され、ICU の研究員として日本に滞在されたが、丁度出産で動けなかった私の代わりに京都などの旅行に宮田先生に案内していただいた。今、考えるとなんという配慮だったのか。いつのまにか、先生は私を妹だよ、と言われるようになった。歳の差でいうと　娘に近いのだが。

先生の著書を韓国で出版することになった。先生は「あなたの名前を一緒に並べたい」と言われ、私が翻訳をすることになった（『朝鮮民衆과「皇民化」政策』、一潮閣、一九九七年）。私が日本の中央大学に就職し、二〇〇五年にサバティカルでアメリカのハーバード大学に滞在していた際には、宮田先生がハーバード大学の招待でいらっしゃる幸運にめぐまれ、一週間を共に過ごすことができたのはとても大事な時間だった。

先生から学んだことは私の人生の中に深くしみこみ、先生は私の心の中に常に生きているような気がする。

◆朝鮮史料研究会と宮田節子

河かおる（滋賀県立大学・朝鮮史研究会関西部会幹事）

はじめに

筆者は、一九九〇年四月～一九九五年三月まで一橋大学社会学部に在学し、宮田節子（一九三五～二〇二三年）が早大学生の時から親交の深かった姜徳相（一九三二～二〇二一年）の元で学んだ。大学院に入学した一九九五年度から朝鮮史研究会（関東部会）に入会して幹事となったが、当時の会長が宮田節子だった。一九九九年七月に学習院大学東洋文化研究所の助手に採用され、宮田節子の監修のもとで「未公開資料朝鮮総督府関係者録音記録」シリーズのスタートを切る仕事をさせてもらった。二〇〇二年三月退職後は、解説や編集協力で数年間関わっただけで、それ以後は遠ざかっていたが、二〇二〇年二月に「アーカイブズプロジェクト「朝鮮総督府関係者録音記録」セクション　ミニ・シンポジウム朝鮮総督府関係者録音記録の史料的価値とその活用」（学習院大学東洋文化研究所主催、二〇二〇年二月二九日開催）で「録音記録の経緯と意義」を報告する機会があり、慌てて記憶を巻き戻した。

本報告では、宮田節子の回想録や聞き書き（表1参照）を参考にしつつ、可能な限り当時の音声や文章を紹介しながら、朝鮮に向かいあい始めた頃の二〇歳代の宮田節子と出逢う時間としたい。なお、二〇二〇年の拙報告は未公刊のため、一部を補論として末尾に掲載した。以下の1～4については、主に表1に示した各文献を参考に記述したが、煩雑を避けるため典拠の明示は直接引用する場合などに留めた。

1　八・一五の記憶―「朝鮮人と最初のみじめな出逢い」

宮田は一九三五年に千葉県松戸で生まれ育ち、一九四五年の敗戦時は国民学校四年生だった。宮田は、この八・一五の「朝鮮人と最初のみじめな出逢い」の記憶、「あの日の衝撃が、やがては朝鮮にたどりつく私の人生を決定したようにおもえる」としている[1]。

表 1　宮田節子の回想録／インタビュー等一覧

文献名など	聞き取り年月日	聞き手等
宮田節子,1979,「朝鮮史研究会の二十年と私」『季刊三千里』20	1979年11月	書き下ろし
宮田節子,1990,「梶さんと出逢ったころ」『梶村秀樹著作集・別巻　回想と遺文』明石書店	1990年5月	書き下ろし
朴慶植・宮田節子,2004,「近・現代朝鮮史の渦中で」朴鉄民編『在日を生きる思想：『セヌリ』対談集』東方出版（『セヌリ』15号、1993年3月掲載）	1993年？	朴鉄民
宮田節子,2000,「穂積真六郎先生と『録音記録』」『東洋文化研究』2号	2000年3月	書き下ろし
宮田節子,2002,「한 일본인 연구자의 조선사 공부길- 조선을 향해 걸어온 50년 열정」『역사비평』58	2002年2月	書き下ろし
宮田節子「朝鮮問題への取り組み・研究をふりかえって」（朝鮮―日本　絡まり合った歴史と現在を考える集い）【未公刊】	2004年6月12日	講演録
宮田節子,2011a,「朝鮮総督府関係者の録音記録とその文章化」『台湾口述歴史研究』6	2006年10月28日	所澤潤ほか
정지영, 류미나「조선 식민지배 연구의 개척자 미야타 세츠코」『역사와 문화』13: 197-223.	2007年1月17日	정지영, 류미나
インタビュー記録【未公刊】	2009年9月13日	庵逧由香 宮本正明
宮田節子,2011b,「後継者のいない学問をいかに始めたか ― 朝鮮総督府の人と史料に出会って」『岩波講座　東アジア近現代通史　別巻』岩波書店	2010年5月12日	趙景達
「시대가 연구자보다는 활동가를 원했다　宮田節子」김효순『역사가에게 묻다』서해문집	2011年？	김효순
宮田節子,2015,「私が朝鮮に向かいはじめたころ」『東洋文化研究』17号	2014年11月11日	講演録
「韓国併合の歴史研究に半生をささげて：朝鮮史研究者 宮田節子さんに聞く」『女性のひろば』441	2015年	編集部

※早稲田大学時代や朝鮮史料研究会発足の頃に言及しているもの

宮田は一九六〇年五月刊行の『朝鮮近代史料研究集成』第三号に自身の卒業論文「三・一運動について」を掲載するにあたり、序文「はじめに―なぜ朝鮮史を学びたいのか」を書いた。この三年後の一九六三年一月発行の『朝陽』一号には「なぜ朝鮮史を学ぶか」、四年後の一九六四年八月発行の『朝鮮研究』三二号には「八・一五と朝鮮とわたし」を寄稿し、この八・一五の「朝鮮人と最初のみじめな出逢い」という原点を綴っている。その後の回想やインタビューでも繰り返し語られているが、この『朝鮮近代史料研究資料集成』三号（一九六〇年五月）掲載が最初だと思われるので、全文を引用する。二四歳の宮田の文章である（傍線は引用者による）。

朝鮮は遠い国である。玄界灘は太平洋より広大な距離と、どす黒い不気味さをもつて日本と朝鮮の間をへだてている。この奇妙な地図が正常なものとして、日本中を横行している。

私はこの事実にいら立ち、この事実に挑戦したいのだ。

朝鮮人は臭い。事大思想に富み、付和雷同性がある。何といつても朝鮮人などと違つて日本人は……と暗黙にうなずき合うあの優越者のおおらかな笑い。

私はこの伝説にいら立ち、この伝説に挑戦したいのだ。しかもこの事実とこの伝説を二つながらに併せ持つている日本人。それは他ならぬ私なのである。だから私はまず自分に対していら立ち、自分に対して挑戦しなければならない宿命を負つている。

私は朝鮮について全く無智だった。無智より更に悪いことは、朝鮮のことなど私の意識にのぼつたことすらなかつた。唯一つの思い出を除いては―。唯一つの思い出。それは敗戦の時のことだつた。当時小学校四年生だつた私は、敗戦という一切の価値観念の否定の中で、あわてふためき、色を失つた大人達を、半ばあきれた白々しい目で眺めながら、どうにもやり切れない重苦しい日を送つていた。その沈滞した雰囲気をつき破る強烈な怒りの思い出が、今も心に残つている。それは残暑きびしい、けだるい日だつた。その日は私が生まれてはじめて異国というものを実感した日でもあつた。家の前を朝鮮人の一団が醜悪な塊となつて、異国の匂いをまき散らし、かん高い金属の響を持つた異国語をどなりながら、通り過ぎて行つた。彼等異国人の先頭には、日の丸の上に不遜にも黒々とおたまじやくしの影を落とした太極旗が誇らしげにひらめいていた。母は私の肩に手を置いたまま「まあ日の丸が半分ぬられちやつて……」ともう涙ぐんでいた。どこかの人は「朝鮮は日本を半分占領するつもりなんだ。だから日の丸を半分も黒くぬりやがつて……畜生！」と歯ぎしりした。そばにいた私には、大人の憎悪がそのまま私のものとなつた。自分の祖国が侮辱された怒りと、侮辱した朝鮮人に対する怒りが、一種ケイレンとなつて全身をつきぬけた。それは、アメリカに敗けたよりずつと嫌なこととして、私の心に残つた。この幼かつた日の純な感情は、はつとする程重大な問題を含んでいる事に、今の私は気づいたのだ。

太極旗を日本の侵略の象徴としか理解出来なかつたその無智は、一体どこから来たのだ。アメリカ人にふみつけられるより、朝鮮人にふみつけられる方が痛いと感ずる心は、朝鮮人侮視の感情なのだ。そう気づいた時から、私はこの感情を末梢神経の先まで洗い出してみようと思い立つた。こゝをつつけば何かがある。今の日本人がやらねばならない何かがある。そう直感した。

したがつてこの研究会で「日本がどのように朝鮮を侵略し、朝鮮自体はいかに変質して行つたか」ということに大方の議論が集中し、その議論に火花を散らす。しかし私はそんな時、たしか隣にいた友達が急に消失せてしまつた様な、変にさびしい孤立を感

じながら、まるで逆な事を考えている。「植民地を持つた事によつて、日本は、日本人は、いかに変質して行つたか」私にとつては―変質の残滓を浴びていると思われる日本人として―その事がより重要であり、おそらくは一生の課題なのです。

この様にあきれる程無智で、その故にこそ猛烈に勇敢な私が三・一運動を選んだ理由は、朝鮮史を学ぼうと思つた時、たつた一つ知つていた名称 ― それが三・一運動だつたからにすぎません。

長い間朝鮮史を学び、朝鮮を体で知つていらつしやる方々は、余りに盲目の大胆に驚きあきれられるかも知れません。その時は是非私を呼びつけて、お教え下さい。

私は自分が未熟であることを、少しも恥じる者ではありません。なぜならそれは、私がこれから学ぶべき分野の多いことを、示してくれる事に他なりませんから。

2　早大・中国研究会での在日朝鮮人との出会い

宮田は、大学進学を親に反対されながらも一九五四年に早稲田大学文学部史学科に入学し、一九四九年の中華人民共和国の成立で中国近代史に関心をもって東洋史専攻に入ると同時に中国研究会（中研）にも入会して活動した。史学科および中研の先輩に、当時「神農智」を名乗っていた姜徳相がいた（一九五〇年入学だが、レットパージで大学を追われた期間があり一九五五年三月卒業）。またクラスメートには同じく「権田信雄」を名乗っていた権寧旭がいた（宮田は「権（ごん）ちゃん」と呼んでいた）。宮田は彼等を日本人だと全く疑わずに親交を深めて行った。宮田は中研で早稲田祭で餃子を売った「最初の提案者」が自分だと述べているが[2]、その餃子の作り方を教えたのも姜徳相だったという[3]。

一九五五年頃（大学一年か二年、二〇歳頃）、中研に都立朝鮮学校の関係の署名が回ってきて集めていた時、「進歩的」と目され、日本の中国侵略を糾弾していた中国研究の教授たちが誰も見向いてくれず、「朝鮮人には気をつけたほうがいい」などと言われ、「左翼大国主義」に嫌気が差し「あんな人間には絶対になるまい」と思ったという。都立朝鮮学校の廃止は一九五五年三月なので、一九五四年一〇月の廃止決定通告を受けての署名活動だろうか。この時、教授が署名してくれなかったことを話すと姜徳相が「エセ進歩主義め！」などと口を極めて怒っていたし、「今から思えば、そういった署名もその人〔姜徳相や権寧旭のこと―引用者〕から来たと思う」けれども[4]、それでも彼らが朝鮮人だとは、その時は全く思いもしなかったという。

その中研の先輩「神農智」が朝鮮人だと始めて知り、「自分は植民地を持った日本人である」ことを痛みを持って自覚させられたときの衝撃もまた、八・一五の記憶とともに宮田の原点となっている。次は一九六四年八月発行の『朝鮮研究』三二号に掲載された「八・一五と朝鮮とわたし」の後半である。

（略）大学に入って、日本人だとばかり思って親しくしていた友人が、ある日研究会の席上で、だしぬけに、自分が朝鮮人である事を、つっかえつっかえ、しかし思いつめたように語り出した。彼は自分が朝鮮人でありながら日本人としてつき合って来た事を、自分の弱さとしてわびながらも、なぜそうならざるを得なかったかを、そしてこれからは朝鮮人として生き抜く決意であることを語った。

私は彼の話を聞きながら、民族というものの不可解な巨大さに圧倒されてしまった。尊敬もし、信頼もしていたあの友人が、朝鮮人であったとは……。その事のために彼はどんなに苦しんだ事か……。その苦しみにふれない友情などというものが一体何であったのだろうか…。

私は彼が朝鮮人だと宣言した時、生まれてはじめて、自分が日本人だということを、ある痛みをもって自覚させられた。その痛みは、あの八・一五直後の、ほんの一瞬だったが、はげしく私をとらえた朝鮮人への憎悪につらなっているように思える。

私はその友人への、友情のあかしとして、というような感傷からではなく、彼の話を聞いた時に私が実感した日本人としての自覚と、その痛みをつきとめるためにどうしても朝鮮の問題ととり組まねばならないと決意した。そう思った時、私の頭の中に、あの最初のそして不幸な朝鮮人との出逢いの思い出が急にあざやかによみがえって来た。その思い出を徹底的に検討することから、私は朝鮮への第一歩をふみ出した。太極旗を日本侵略の象徴として受けとった隣国朝鮮に対する無智は、どこから来たのか。アメリカ人にふみつけられるより朝鮮人にふみつけられた方が痛いと感じたのは、一体なぜなのか。それらは朝鮮史をはじめた時も、今も変わらない私のテーマである。（所員・明治大学大学院）

宮田は朴慶植との一九九三年の対談でこのことに触れ、「姜さんが朝鮮人になっていく過程が、私には逆に日本人になっていく過程と重なっている」とも述べている[5]。宮田は姜徳相の朝鮮人宣言を「一九五六年頃」と回想しているが、姜徳相は中研の機関誌に「中国史とおさらばする」という趣旨の文章を「神農智」の名で寄稿する直前に、宮田等、中研のメンバーの前で朝鮮人宣言をしたと述べており、その機関誌の発行年が一九五五年だという[6]。ただし、「大学院二年のとき」とも述べているので、だとすると一九五六年四月以後となり宮田の回想と一致する。また、場所は高田馬場の喫茶店「大都会」だったと記憶している[7]。

宮田は、一九六四年七月二六日の朝鮮史料研究会三〇〇回記念の懇親会[8]の、姜徳相や権寧旭も同席する場でこの時のことを次のように話している。この録音記録は活字化されておらず、以下の文字起こしは筆者による（以下同様）。

この研究会に関して、近藤〔劒一〕先生や穂積〔真六郎〕先生と知り合ってから満七年、姜〔徳相〕さんとは実に一〇年半以上のお付き合いなわけなんです。で、私が朝鮮をやるようになった直接的な動機はやはり姜さんと権〔寧旭〕さんにあったと思うんです。その頃、私が知っていた頃、姜さんのほうは神農さんとおっしゃって、権さんは権田さんというふうにおっしゃってたんです。私は日本人だとばかり思って付き合っていた友達が、ある日突然に朝鮮人になったわけなんです。その時から、私の朝鮮に関する関心はほとんど徹底的なものになった。おそらくこの二人がいなかったら、私が朝鮮に対する関心…とか朝鮮史をやるというふうなことはなかったんじゃないかという気がするほど、このお二人との出会いは私の生涯、感謝している。感謝するけど、うらんでいる。それについては感謝したい面もあり、一方ではうだつが上がらず、お金が入らないという点では恨んでいる面もあり、だからラーメンぐらいただでごちそうになるのは当然ではないかと思っているような次第なんですが、心の底から感謝しているわけです。特に権さんは鼻と目がいいんでしょうか、史料なんかかぎつけるのが得意で、この研究会を紹介してくださったわけです。

私がこの研究会に来るようになったのは、もちろんたくさん史料があるからですけれども、特にこの研究会に集まっていらっしゃる、中心メンバーである穂積先生がなかなかチャーミングな男性であられて、もう少し若かったら……そういうふうに言うと茶化すようになりますけれども、姜さんもおっしゃったように、穂積先生の人柄というものが、その、気に入ったわけなんです。何も私はアプレゲールでありますから、昔…なんていうのは何とも思わないわけなんです。現在の穂積先生のお持ちになっている

若々しい感受性というものを非常にうらやましく思っています。私なんかが穂積先生ぐらいの歳になって、果たして私達みたいな若い年代と一緒に研究会を開いて、およそ穂積先生からみれば幼稚なような、たどたどしいような意見を言っているのを、真剣に聴けるかどうかというと、非常に疑問なような気がするんです。○○先生も、「何しろ真ちゃんはえらいよ、君達と一緒になって真面目に話してるんだから、その点だけでも立派なもんだよ」なんて…それは本当に穂積先生の素晴らしい点だと思います。どうか先生頑張って下さい。

宮田は、姜徳相の朝鮮人宣言の衝撃から、「どうして朝鮮人が日本名を名乗っているのか」という最初の素朴な疑問を懐き、「結局あとから考えると創氏改名とか、皇民化政策という一生の研究テーマになっていった」という[9]。このような生身の在日朝鮮人との出会いから、宮田は「朝鮮と向かいはじめ」た[10]。

この朝鮮人宣言をした後、姜徳相は中研の中で朝鮮史研究を始めようと呼びかけ、宮田節子、権寧旭、大村益夫（一九三三～二〇二三年）などがそれに賛同し勉強会が始まった[11]。

宮田が四年生になった一九五七年、卒業論文のテーマを三・一運動にするとして提出したが、東洋史専攻には朝鮮史のわかる教員はおらず「三・一運動って何だい？」などと言われる始末だったという。テーマを決めたはいいが史料のアテがなく途方に暮れていたところ、一九五七年の夏休みに入る前に、東洋史の清水泰次教授から、「もし朝鮮のことをやるんだったら、丸の内に元朝鮮総督府の高官たちが集まっている友邦協会[12]というのがある。そこに行けば何か君の役に立つかもしれない」と教示されて、翌日にはすぐに「丸の内」「友邦協会」だけを頼りに東京駅に降り立った。無事に探し当てて三・一運動について資料が無いかと尋ねると、「探してご覧」と言われて見つけたのが阪谷芳郎文書だったという[13]。宮田はそれから友邦協会に日参して史料を書き写し、卒業論文を書き上げた。

3　穂積真六郎との出会いと朝鮮史料研究会[14]の発足

宮田が卒業論文を書き上げたお礼の挨拶に友邦協会を訪れると、いつも奥の方に座っていた理事長の穂積真六郎[15]（当時七〇歳）から次のような提案があったという。

この友邦協会に朝鮮のことを勉強したいと訪ねてきたのは、貴女がはじめてだ。このままで終わらせてしまうには、余りに惜しいご縁だから、どうです。ひとつ研究会でも作って、一緒に勉強しませんか。／私は日本の朝鮮統治が、いかように批判されても、聞く耳をもっているつもりですが、しかし、やりもしないことをやったといわれたり、事実にもとづかない批判を受けることは、絶対に承服できない。そこで、残された余生を朝鮮統治に関する史料を集めることに捧げたいと思っています。どうです。一緒にやりませんか。[16]

宮田は、当時、中研の朝鮮史研究グループの仲間である姜徳相、権寧旭、そして少し遅れて仲間になっていた梶村秀樹（一九三五～一九八九年、当時東大の学部生）に相談した。すると、「研究の基礎は史料だ。論文はいつでも書けるけど、史料を集めるには、今が絶好のチャンスだ。総督府の関係者が健在な今のうちに、できるだけの史料を集めておこう」と衆議一決したという[17]。

以上は、宮田や姜徳相の回想で繰り返し述べられているストーリーなのだが、会の発足から九ヶ月後の一九五九年に朝鮮史料研究会が刊行した『朝鮮近代史料研究集成』第一号[18]所収の「朝鮮史料研究会の生い立ち」には、発足の経緯が次のように書かれており、研究会の提案は学生側からあったことになっている（引用に際し、適宜改行を加えた）。

（前略）

・・研究会設立の動機・・　たまたま昭和三二年五月、早稲田大学文学部東洋史学科の主任教授清水泰次氏が穂積理事長を訪ねられ、同科学生権寧旭、宮田節子両君に対する研究資料の供与を懇請された。又同じ頃、中央大学史学科講師（東洋大学教授）鳥山喜一氏[19]が穂積理事長と林〔茂樹〕理事を訪問、清水教授と同様、同科の学生杉本徳則君を紹介せられた。右三君は、何れも四年生で、卒業論文草稿のための資料調査で、権君は「駅屯土関係」、宮田嬢は「民族運動関係」、杉本君は「李朝公田制下の並作」等を課題としていた。そして三君はそれらの研究の中、当協会が保管する多くの資料を見て、その利用が普及されていないことを惜しみ、これを多くの学究に有為に役立たせることを考えるとともに、穂積理事長の提唱する資料収集の趣旨が、彼等の学究上の必要と全く一致することをみとめて、同学の姜徳相（早大大学院）、依田憙家（早大社研副手）等を誘つて当協会の資料収集に協力するとともに、それらの資料を総合研究するため、同攻学生による研究会の結成を進言してきた。

・・朝鮮研究熱の上昇と穂積氏・・　これより先、昭和二八年頃から、当協会の事業は漸く関係各方面に知られ、資料利用者の数も非常に増してきた。そして従来は官庁方面の調査利用が多かったのが、その頃からは、東大その他各大学、大学院の学生、高校の歴史科担任教師、研究所員といつたように、その利用層も、学究的なものが多くなつてきていた。このように、朝鮮研究熱が、特に学究の間に上昇してきた傾向に鑑み、穂積理事長は、その助長をはかるため、これらの若い学究達と協会関係者との会同懇談の機会をもつ計画を意図していた。早大の諸君が進言してきたのは丁度その時であり、穂積理事長は喜こんでこれを許諾した。直ちに、協会内に研究会を付設することを決意し、各理事にはかるとともに中央日韓協会に協力を求めた。（中略）

・・会員諸君の熱意・・　朝鮮研究の不振を嘆いていたわれわれは、正直なところ、この研究会に多くを期待していなかつた。しかし、事実は全く驚異であつた。権勢史的な朝鮮史観から発生史学的な新史観へと、その傾向と体容が変つたとは言え、たしかに、古い権威と経験を越した新しい学究の姿である。学生達の熱心さは、恐らくこの九ヶ月の間に、数百点の文献、資料を渉猟させたであろう。それは、各大学のいかなる社会科部門の研究室にも見られない精彩だつたと思う。（終り）

会員名簿

×梶村秀樹（東大史学科四年）　姜徳相（早大大学院）
×横矢脩（東大史学科三年）　依田憙家（早大大学院）
金己大（東大大学院）　朴進山（法大大学院）
李玉乃（東大教養学部）　奥村浩一（早大政経学部二年）
許承妃（東大教養学部）　裵秉斗（明大大学院）
×権寧旭（早大大学院）　姜景彦（早大史学科二年）
×宮田節子（早大大学院[20]）　宮坂弘（早大大学院）
（順不同、×印は朝鮮語受講者）

一九六四年七月二六日の朝鮮史料研究会三〇〇回記念の懇親会で、穂積は同様のことを述べている。

穂積　（略）とにかく一つ本当の真相を知ってその上でご批判を願いたいと、こうつくづく思っていたんです。ところが、八年前ですかね。卒業するんで史料をみせてやってくれと。こりゃしめたと思ったんです。そうしたらちょうど権さんと宮田さんと神農さんが来られて、研究会が開きたいと言うんで。それならお手伝いしましょうと。私の下心は、この間に本当に日本の朝鮮統治と

いうものの真相を皆さんで研究していただきたいと。その上で悪口を言うなら言う、褒めるなら褒めてもらいたいと思ったのが、この研究会にご協力する始めだったんです。とにかくそういうふうになりますには、ずいぶん時間がかかる。（略）いつだか、権さんに私は言ったことがあると思うんですが、一〇〇回や二〇〇回ではこの研究会は何もならないんだ、せめて六〇〇回以上はしなきゃならないと言ったことがある。六〇〇回というと一二年になりますから。今でも半分になります。六年間これをやるというのはずいぶん皆さんご努力の盛んなことでしたが。その結果が、私の思ったように、少しは日本人のやった仕事でいいところを見つけてくださったかどうかはわかりませんが、一つの基準は探せたと思うんです。（略）今の学者さんの悪口をいうわけじゃないけど、基本、僕に言わせると、少し曲学阿世、どうも気に入らない（一同笑）。日本のしたことを悪く言ってくだすっても仕方がない、運命でありそれだけの悪いところがあったんでしょうが、とにかく事実を事実としてちゃんと知った上で批判をしていただきたいというのが私の年来の念願で、今日までやってきたわけであります。（略）

すると同じ懇親会で、しばらく後に発言の順番が来た姜徳相（当時三二歳）が、研究会の発祥の経緯について穂積の話に「誤りがある」として次の様に述べている。

姜徳相　（略）この研究会の発祥の経緯についてちょっと誤りがあるんで、ちょっと話をしますと、宮田さん、権さん、僕という三人が来たんじゃなくて、最初は権さんが清水先生から紹介状をもらって、そして確か一人で穂積先生をお訪ねしたんだと思うんです。そして、えらい史料がたくさんあると、すごいぞということで、宮田さんを誘って僕のところへ連絡してくれたと。その前に私達三人、自分達なりの研究会を持っていたんで、それぞれそういう連絡はあったわけなんですけど。ちょうど私その時に、今考えるとおかしいんですけれども、青春の、いろいろな、ま、悩みもあったもんで、みんなからサインを送ってきたというのもあったと思うんです。そういうときに宮田さんが来いと言って、二回か三回誘ってくれたと思うんです。でもどうせつまんないとこだろうと、行かなかったんです。その頃僕は学校からは怒られるし、いろいろ自分の身辺では悩み事はあるし、すっかりしょげてた時なんですけど、それを宮田さん、権さんがとにかくもう一度勉強せいと。たぶん三回目か四回目に僕は協会を訪ねたと思うんです。

そしたら、例の、原田大六先生に怒鳴られまして。「お前、何しにきたんだ」と。何しに来たも…、近藤〔劔一〕先生が中へ入れって言うから僕は入ったんですけれども、入って行ったら…こういうことを言われて、こりゃいったいどういう所なんだろうと、すごくこう、もじもじしてたんですが、そしたら…「お前帰れ」と言われたから僕は出ていったんです。また、近藤先生が…入って行ったら、「まだ帰らないのか」と。

宮田　事実の誤りがあるわ。後で指摘する。

姜徳相　多少誤りがあるかもわかりませんけど、とにかくそういう経緯がありまして、何か、えらいとこに来たもんだという気がしたんです。それから、ま、とにかくいろいろ自分が見たこともないような資料がたくさんあったり、それから、自分の国のいろいろな貴重な文献というものをここで見るようになって、とにかく自分でこういうものを、たとえ一部でも消化して自分の頭の中にたたき込んでおかにゃいかんと、そういうような気持ちになったんです。それまで僕は自分の頭は研究者に向かないという劣等

感がありまして、商売をやろうか、何をやろうかということでいろいろ悩んでいたわけなんです。いまでもそういうあれはあるわけなんですが、それを、宮田さん、権さん、それから近藤先生、穂積先生が引っ張って行ってくれたんだろうと私は思っているわけです。

で、その間、いろいろ考えてみると、いろんなことがあったと思うんです。宮田さんとは、僕が結婚すると言ったら、ある友達が、「お前、何で宮田さんと結婚しないんだと」。友達は、どうも宮田さんと僕が、毎週三回か四回は必ず顔と付き合わせて、いろいろしゃべっているもんですから、大西君よりは親密だと勘違いしたようで。そういうように、なんつうか、いろいろ考えてみると懐かしい思い出がいろいろあるわけです。（略）

結局、研究会の結成を最初に提案したのが穂積なのか、学生側なのか、一九五八年の何月頃なのか等、真相は不明だが、確かなのは一九五八年五月七日に朝鮮史料研究会開設準備総会が開催され、その翌週から毎週水曜日に五〇〇回開催された。おそらくこの開設準備総会の前にも何回も会合があって、そこに誘われたが最初は行かなかった、というのが上記の姜徳相の述懐だと思われる。姜徳相の回想では、一九五八年の春先に、新宿の明月館という焼肉屋の二階に、友邦協会を代表して穂積真六郎と近藤劔一[21]、渋谷礼治[22]の三人、早稲田から清水泰次、姜徳相、宮田節子、権寧旭ともう一人、集まったという[23]。上記の「出ていけ」のエピソードは、この明月館会合の後の話だろうか。

梶村秀樹が研究会に合流したタイミングも宮田と姜の記憶が少し食い違っているが、梶村との最初の出会いに関する記憶は一致している。安藤彦太郎（当時、早稲田の教授で東大でも教えていた）から、「東大で卒論のテーマを中国史にするか、朝鮮史にするか、迷っている学生がいるから一度逢ってくれ」というハガキが届き、宮田が似顔絵入りのハガキを出して、上野松坂屋裏の音楽喫茶「しま」で姜、宮田、権の三人で会ったのが最初で、梶村は黒いジャンパーを着ていた[24]。これを姜徳相は「（朝鮮史料研究会が）始まって一回か二回目のとき」と記憶しているが、宮田は開設準備総会には梶村も参加したと記憶している。いずれにしても、梶村は第三回、一九五八年五月二八日に「日韓協約締結における日本外交の態度」を報告しているので、発足の前かどうかはわからないものの、発足直後から関わっていたことは間違いない。

なお、友邦文庫録音記録の中には、会発足前の一九五八年四月二日に行われた国分三亥[25]宅での穂積真六郎との対談「日本司法制度の韓国扶植について」（請求記号TI）があり、宮田が参加している[26]。

4　一一年五〇〇回続いた朝鮮史料研究会

こうして一九五八年五月七日にはじまった朝鮮史料研究会は、主に穂積真六郎の人脈により、朝鮮総督府の諸政策の決定・実行過程に直接携わった人を講師に招き、在日朝鮮人を含む若手研究者の質問に答えるという形で一九六九年九月二四日までの一一年間、毎週水曜日、第五〇〇回まで続いた。友邦協会側は理事長の穂積のほか、理事の近藤劔一、同じく理事の渋谷礼治、岸謙、学生側は姜徳相、権寧旭、宮田節子、梶村秀樹の八名が主要メンバーだった。録音テープの参加者記録を見ると、一九六六年前後からは、宮田を含む当初の学生メンバーは少しずつ足が遠のいているようだ。姜徳相は、次第に「世代交代」して後半はほとんど行っておらず、五〇〇回を迎えて終わった頃は記憶に残っていないと言っていた。

姜徳相はこの研究会を「穂積ゼミ」と呼び、「朝鮮統治の実態とその功罪を後世に残すために可能な限り史資料を収集したい友邦協会と、まだ日本のどの大学にも朝鮮近代史講座がなかった時期に、この研究会を課

外朝鮮史ゼミと見なしていた学生たちとの同床異夢。そうでありながらも、どこか同志的なあたたかい雰囲気がある研究会」と評している[27]。また宮田の活躍について次のように述べている。

宮田は人をうまくまとめる天才ですね。年寄りのご機嫌を取って気分を良くさせる。そして一を言えば三くらい答える人ですから、いつもリーダーシップを握っていたと思います。その頃は梶村とは週に一回必ず話し込んでいたし、宮田とは週に一〇回会っていました。

本当にね、いろんな仕事があるんですよ。私、宮田、梶村の三人でいろんな先輩、昔の官吏たちと連絡をとったり、それから今度は誰にするかということを穂積と協議して決めたり、そういうことをやったと思います。研究会の度ごとに出席した人間の名前とテーマと概要、それを宮田と私が記録するんですよ。ガリ版切ったり刷ったり、自費出版をしていたのでたいへん忙しかったんです。でもこれは結局無駄ではありませんでした。私は大学の教員からは何も教わっていないけれど、大学の研究会やグループが外から呼んだ先生、それから友邦協会という私たちの自主ゼミから学んだことが非常に多いです。[28]

研究会発足から九ヶ月後の一九五九年三月、『朝鮮近代史料研究集成』第一号を発行し、友邦協会が収集した資料の目録とともに研究会の録音記録が活字化掲載された。同号掲載の「『朝鮮近代資料研究集成』発刊に寄せて」で穂積真六郎は次のように述べている。

私共は多年朝鮮にあつて仕事をした為に、朝鮮のことに関しては責任を感じる。朝鮮統治の過去に対して非難の声を聞くのは誠に辛い。然し、私共自身在（ママ）鮮時代にさえ為政者並びに自己の行動に就いて遺憾に思つた点も少なくない。終戦後静かに反省して見ると尚更である。特に学生諸君と研究会を初めてから、毎回過去に対して啓発される点が極めて多い。

こんな次第だから、徒に自己の立場を主張して是が否でも統治の弁護をする意思はないけれども、只、研究も足りずして決断を下したり、他に目的あつて事実を歪曲したりする世相に対しては、黙して世に阿（おもね）つて行く気にはなり得ないのである。

これが友邦協会の設立の動機であつて、第一に戦禍を免れた資料の所在を探究して系統的な目録を作製し、又蒐集し得た資料を項目別に編纂して後人の研究の一助とすること。第二に実際朝鮮関係に接触された方々の談話を、筆記又はテープレコードによつて録音保存すること等を計画着手した。

これは朝鮮の過去に対する事実を出来得るだけ忠実に集め、後人をして事実に基ずいて研究判断をして貰いたい念願から出発した仕事である。

（略）絶えず研究に専念して居る近藤氏の周囲には多くの若い学徒が自然に集つてくる。昔から朝鮮研究に没頭する人は極めて少ないのに、卒業論文の課題に朝鮮を選び、又は大学院に入つて尚研究を続ける。これ等の若人達こそ私共にとつては珠玉の様な存在である。只私共にとつてのみならず、将来日本と韓国が隣邦として共栄して行く為に、最も貴重な萌芽である。

（略）この若人達によって始められたのが「朝鮮史料研究会」である。（略）

若い人々の向学心は驚くべきもので、私共がうつかり「まさかそんなことは無いだろう」と反論すると「それでも明治二十何年の何という本に」などと実証的にやり込められることも度々である。自分の好むと否とに拘らず、広く智識を求めてその上に基礎

を置いてこそ真の研究が出来、公正な学説が成り立つのであろう。

筆者は、宮田から朝鮮史料研究会は毎週水曜日に欠かさず行っていたと聞かされていたが、文字通り「毎週」かどうかは半信半疑だった。ところが二〇二〇年に五〇〇回の研究会の記録をすべてエクセルに入れて一覧を作成してみて、本当に毎週だったので驚いた。表2は、そのうち宮田が講述者として発表した回の一覧である。

宮田自身がよく記憶に残っていると述べている[29]田中武雄[30]を講述者とした回の音声を部分的に紹介する（会場で音声の一部を再生）。

「小磯総督時代の概観」一九五九年九月九日（水）収録（T30）
第六七回　朝鮮史料研究会　約一二八分
講述者：田中武雄
参加者：（協会側）穂積真六郎、渋谷礼治、近藤劒一、多久安貞、岸謙、（学生側）宮田節子（司会）、権寧旭、姜徳相、李玉乃、梶村秀樹、青木香代子、金圭南、朴菖熙、申国柱、武田幸男、金己大、矢沢康祐、奥村晧一　（以上一九人）
活字化：『朝鮮近代史料研究集成』三（一九六〇年五月）、『東洋文化研究』二（二〇〇〇年三月）

会が発足して一年四ヶ月が経った頃で、田中武雄を講師に迎えるのは二度目ということもあってか、かなり打ち解けた雰囲気がうかがえる。実はこの記録は最後が録音中断で終わっているのだが、今回、テープ番号T0に続きが約五〇分間収録されていることがわかった。この続きの分は活字化されていない（会場で音声の一部を再生）。

おわりに

これまで、朝鮮史料研究会の記録の史料的価値は、「未公開資料朝鮮総督府録音記録」とのタイトルのとおり、朝鮮植民地支配者の口述の側面

表 2　朝鮮史料研究会での宮田節子の発表記録

回	年月日	曜日	研究会タイトル	テープ
4	1958年6月4日	水	東学党について	
10	1958年7月16日	水	金玉均の行動と人物	
17	1958年9月3日	水	朝鮮の教育について	
36	1959年2月4日	水	間島問題　※李玉乃と合同	
46	1959年4月15日	水	伊藤博文について	
51	1959年5月20日	水	日韓併合について	
55	1959年6月17日	水	三・一運動について	
71	1959年10月7日	水	寺内総督就任の前後	
	1959年12月25日	金	故川崎繁太郎氏所蔵の文献調査を行う　※近藤劒一と合同	
90	1960年3月9日	水	三・一運動に対する日本の考え方	
100	1960年5月18日	水	東学党に対する問題について	
166	1961年9月13日	水	朝鮮警察機構について　※姜徳相と合同	
181	1962年1月17日	水	猪谷博士の朝鮮経済史について　※楠原利治と合同	
206	1962年7月18日	水	朝鮮の農村振興運動について	T114
207	1962年7月25日	水	朝鮮の農村振興運動について　第2講	
217	1962年10月3日	水	朝鮮における農村振興運動について（第3講）	
243	1963年4月10日	水	朝鮮小作令制定前後における地主の反対について	
304	1964年9月16日	水	昭和5・6年頃の地主、小作関係	T177
310	1964年11月4日	水	1930年代日本のアジア政策における朝鮮の位置	T181

典拠：「財団法人友邦協会史　その事業と事蹟」（未定稿、1984年）（友邦文庫NY326）、『友邦文庫目録』。
備考：録音記録の目録書誌情報と「友邦協会史」掲載情報の齟齬（研究会の題目など）がある場合は、「友邦協会史」を優先した。「テープ」欄の番号があるものは録音記録が残っていることを示す。

だけが注目されがちだった。しかし日韓会談を背景に植民地支配とどう向き合うのかという課題が研究や運動で大きく問われた時期に、植民地支配の「治績」を後世に伝えたいとする支配者側、「失ったものを取り返す、歴史で取り返そう」[31]としている在日朝鮮人（姜徳相）、植民地朝鮮で幼少期を過ごしてから渡日した朝鮮人留学生、宮田、梶村ら日本人研究者が直接どう切り結んだのかがわかる、一九五〇年代末～一九六〇年代という時代の記録としての価値ももっと照明されるべきだろう。

先に紹介した、一九六四年七月の朝鮮史料研究会第三〇〇回記念会の場で、姜徳相は研究会発足前の時期に「青春の…いろいろな悩み事」を抱えていたと述べている。姜徳相は一九五五年に早稲田を卒業後、貿易会社に就職が決まったが、失恋で就職する理由もなくなり大学院に進学し、中国関係の出版社でアルバイトをしていた。朝鮮人宣言をし、「朝鮮のほうに背中を押」されて歩み出したものの、二歳から日本にいて日本の中で教育を受けて育った人間として、民族団体や関連団体の活発な活動には入りきれなかったという（朴慶植や姜在彦との違い）。それを「育っているときに、苗木のまま針金でまっすぐ伸びるのを曲げられた『盆栽』のような「ひねくれた青春」を送っていたと表現している[32]。姜徳相は早稲田の修士課程に五年間在籍し、一九六〇年三月に終了した。

この「盆栽」の喩えを借りるならば、朝鮮史料研究会は、植民地支配権力側の当事者、その支配政策により「盆栽」のように曲げられた朝鮮人、自らがその「盆栽」を曲げた権力の一部であるということの痛みを知った日本人が、お互い「生身の人間」として、毎週、一同に会して行われた空前絶後の研究会だろう。そしておそらく宮田節子（と穂積真六郎）の存在なくしては始まりもせず、始まっても一一年も続かなかったと思われる。この間に獲得した、支配しているのも、支配されているのも「生身の人間」だという実感を土台に、絶えずそこに立ち戻りつつ、その後の宮田の研究は展開されていったのだろう。

（補論）「未公開資料朝鮮総督府関係者録音記録」シリーズ

録音記録は一九九四年に学習院大学東洋文化研究所に寄託されたが、オープン・リールテープであるために、実質上聴取が困難で、研究に用いることは困難だった。そこへ一九九六年より昭和史研究所（代表・中村粲）により、オープン・リールテープ二四〇巻の音声をデジタル化してＣＤにする事業が行われた。筆者は、この録音記録のＣＤが東洋文化研究所に搬入される直前、一九九九年七月一日に助手として採用された。

おりしも、東洋文化研究所では、一九九九年三月に年報『東洋文化研究』第一号を創刊したところであり、この録音記録を活用した企画を目玉として連載できないかという案が当然ながら持ち上がった。当時、所長であった藤竹暁はこの企画に非常に積極的で、朝鮮近代史を専攻する筆者は、採用されたばかりの助手としても、研究者としてもその期待に応える必要に迫られた。しかし二〇〇〇年三月刊行予定の二号に掲載するには、かなり急がなければならない。筆者のパソコンの中には、着任直後から、この録音記録を『東洋文化研究』に掲載するために行った協議のために作成した資料やメモ、手紙やファックスの書面がたくさん残っている。

まず、八月のお盆明けに宮田に来所してもらい、所長と共に録音記録の活用について話しあい、是非ご協力をいただきたいとお願いした。先述のとおり、録音記録の大半は朝鮮史料研究会の記録であり、その研究会の主要メンバーとして記録を利用する権利を持つとも言える宮田の立場からは、四〇年近くもの間、手を付けられない状態であったことに忸怩たる思いでいたこと、この機会に是非とも活字化することに全面的に協力したいと意欲を見せた。これに力を得て、公表の優先順位や形式などの青写真についても話し合った。「これでもかというぐらい丁寧な注釈を付けてほしい」という藤竹所長の編集方針が示されたのもこの時であったと記憶している。それを実現してくれる若手の研究者（岡本真希子、田中隆一、宮本正明）の名前も宮田から上がった。

最大の懸案は著作権問題であった。これがクリアできなければ『東洋文化研究』への掲載はもちろん、せっかく聴取できるようになった録音記録を学術研究利用に提供することすら難しくなってしまう。そこで所長が学習院大学法学部教授に著作権問題に明るい弁護士を紹介してもらい、相談に行くことになった。至急、録音記録の形成や学習院への寄託の経緯をレジュメにまとめ、寄託契約書ほか協会側と交わした文書等、関連資料一八点を付けて弁護士に送付し、所長と共に弁護士に相談に向かったのが九月半ばだった。相談の結果、文庫資料全体の所有権が中央日韓協会にあるとしても、録音経緯に鑑みて、中央日韓協会が排他的に録音記録の利用に関する権利を有しているとは言えず、録音記録を含む文庫資料の東洋文化研究所への寄託の趣旨は学術研究利用の拡大であること、そもそもの経緯が後世に史実を伝えたいという目的のもとに録音されていることなどから、東洋文化研究所が中央日韓協会と協議の上で録音記録の内容を活字化し、学術研究利用目的で公開することは可能であると判断するに至った。何よりも中央日韓協会側が録音記録を活字化して『東洋文化研究』に掲載することについて理解があったことに助けられて、活字化に向けて本格的にスタートを切った。

弁護士への相談前から、テープリライターに委託してテープ起こしをする準備をしていたが、相談後に正式に発注した。九月下旬、最初にあがってきたのは「参政権施行の経緯を語る ― 田中武雄小磯内閣書記官長ほか」（一九五八年八月二六日録音）だった。これは定例の水曜日開催の朝鮮史料研究会とは別に行われたようで、過去に『朝鮮近代史料研究集成』でも活字化されていなかった記録であり、四〇年をこえて公になると思うと感慨深かった。

続けて第一回目の掲載候補となるものから順に発注し、一〇月半ばには掲載する録音記録が決まり、一〇月下旬には注釈や関連資料作成などの編集協力をしてくださることになった岡本真希子、田中隆一、宮本正明にも送付した。一一月半ばに注釈や関連資料の執筆分担をし、その後も何度も打合せや調整をして、翌年一月半ばの入稿に間に合わせた。今思い返してみても、よくこのようなタイトなスケジュールで引き受けてくださったと思う。改めて感謝申し上げたい。

こうして、「未公開資料朝鮮総督府関係者録音記録」シリーズの第一回目が、二〇〇〇年三月刊行の年報『東洋文化研究』二号に掲載された[33]。史料的価値の高さもさることながら、解説や詳細な注釈によって非常に高く評価された。反響は学界だけではなかった。二〇〇〇年八月には『朝日新聞』がこの録音記録を用いた特集記事を出し[34]、韓国の『東亜日報』にも紹介された[35]。また鄭在貞が韓国での翻訳出版を申し出て、二〇〇二年八月『식민통치의 허상과 실상― 조선총독부 고위관리의 육성증언』(혜안)が刊行された。これには姜徳相による「조선사료연구회의 호즈미 세미나에 참석하기까지」も掲載された。

同シリーズは二〇〇〇年三月刊の（一）から二〇一七年三月刊の（一八）まで一八年間、宮田の監修で『東洋文化研究』に連載された。筆者はそのうち（三）までを助手として担当し、退職後に（四）の解説を執筆、（五）までは編集協力で関わったが、（六）以後は関わっていない。『「未公開資料朝鮮総督府関係者録音記録」総索引』が学習院大学東洋文化研究所『調査研究報告』として磯崎典世監修、宮本正明他編により刊行された（人名編は二〇一八年三月刊、No.六二、地名・事項編は二〇一九年三月刊、No.六八）。また『東洋文化研究』二二号（二〇二二年三月刊）に林雄介監修でシリーズの（一九）が掲載された。

1 宮田節子「한 일본인 연구자의 조선사 공부길—조선을 향해 걸어온 50년 열정」『역사비평』五八、二〇〇二年、二〇〇～二〇一頁。
2 宮田節子「私が朝鮮に向かいはじめたころ」『東洋文化研究』一七号、二〇一五年、三六〇～三六一年。
3 姜徳相聞き書き刊行委員会編『時務の研究者　姜徳相　在日として日本の植民地史を考える』三一書房、二〇二一年、八三頁。
4 宮田節子「朝鮮総督府関係者の録音記録とその文章化」『台湾口述歴史研究』六号、二〇一一年、四〇頁。
5 朴慶植・宮田節子「近・現代朝鮮史の渦中で」朴鉄民編『在日を生きる思想：『セヌリ』対談集』東方出版、二〇〇四年、一三頁（初出『セヌリ』一五号、一九九三年三月）。
6 姜徳相聞き書き刊行委員会、前掲書、九八～九九頁。
7 小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』集英社新書、二〇〇八年、六五六頁（取材は二〇〇四年、二〇〇六年）。
8 請求記号 T172。
9 宮田節子、二〇一一年、前掲論文、四〇頁。
10 宮田節子、二〇一五年、前掲論文。
11 姜徳相聞き書き刊行委員会編、前掲書、九六～一〇〇頁。
12 友邦協会については補論一参照。なお、補論一執筆時、下記文献は未見であったため触れられなかった。
李炯植「戦後朝鮮統治関係者による朝鮮統治史編纂—友邦協会を中心に」松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』思文閣出版、二〇一九年
13 宮田節子、二〇一五年、前掲論文、三六六頁。
14 宮田節子や姜徳相の回想を含め「朝鮮近代史料研究会」となっている場合が多いが、発足時の正式名称は朝鮮史料研究会であり、『朝鮮近代史料研究集成』の発行者名も朝鮮史料研究会であることから、本稿では朝鮮史料研究会とした。
15 穂積真六郎（一八八九～一九七〇）。一八八九年六月生。東京府出身。一九一三年七月に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し、同年九月大学院に進学。一九一四年一一月文官高等試験に合格し、朝鮮総督府試補・度支部理財課勤務となる。一九一五年一二月朝鮮総督府道事務官・黄海道第一部地方係勤務、一九一七年三月平安南道第一部地方係長兼審査係長、一九一八年一月朝鮮総督府事務官・鉄道局監理課勤務、一九二一年六月京畿道財務部長、一九二三年三月釜山税関長、一九二四年一二月新義州税関長、一九二六年五月朝鮮総督官房会計課長、一九二八年八月朝鮮総督府財務局税務課長、一九二九年一一月朝鮮総督官房外事課長を歴任し、一九三二年九月より朝鮮総督府殖産局長に就任。一九四一年一一月に依願免本官となり、一九四二年一〇月京城商工会議所会頭、同年一一月より朝鮮商工会議所会頭兼任となり、同年一二月より京城電気会社社長、一九四四年四月より朝鮮興業会社社長を務めた。日本敗戦後、一九四六年七月から朝鮮引揚同胞世話会会長となる。帰国後は一九四七年五月から一九五〇年五月まで参議院議員を務めた。一九五二年、社団法人中央日韓協会副会長、財団法人友邦協会理事長。一九七〇年に八〇歳で死去。『わが生涯を朝鮮に』（友邦協会、一九七四年）。一九七〇年五月没。東京帝国大学教授の穂積陳重は父。同じく東京帝国大学教授の穂積重遠は兄。（アジ歴グロッサリー参照）
16 宮田節子「穂積真六郎先生と『録音記録』」『東洋文化研究』二号、二〇〇〇年、五頁。
17 同前、五頁。
18 『朝鮮近代史料研究集成』第一号、朝鮮史料研究会、一九五九年。
19 鳥山喜一（一八八七～一九五九）東洋史学者。東京に生まれる。一九一一年（明治四四）東京帝国大学史学科卒業。一九年（大正八）新潟高校教授。その後、京城帝国大学教授、第四高等学校長、金沢大学文学部長、富山大学長を経て、東洋大学教授在任中に没。満鮮史研究、とくに渤海史研究の第一人者で、『渤海史考』（一九一五）、『満鮮文化史観』（一九三五）などの著書がある。文章に優れ、また画筆にも優れていた。『黄河の水』（一九二六）はいまでも平易な中国史概説書として親しまれている。（小学館「日本大百科全書」）
20 当時、宮田は早稲田大学文学部を卒業し、大学院へは進学していな

かったと思われる。一九六一年四月に明治大学大学院に進学。

21 近藤剛一（?～二〇〇三）。元京城日報論説委員。敗戦後まもなく朝鮮研究所を主宰し『朝鮮研究所報』（のち『朝鮮研究』に解題、昭和二三～二四年）を発行。友邦協会設立に参加して理事に就任、単著『新朝鮮読本（総編）』（友邦協会、昭和二八年）をまとめたのをはじめ、「友邦協会シリーズ」中の多くの資料集編纂に従事。

22 渋谷礼二（一八七七～一九六一）北海道出身。早稲田大学卒。一九〇七年に目賀田種太郎の勧めで財務顧問付として渡韓。咸鏡北道理財課長などを務める。一九一六年に朝鮮銀行に入り一三年間調査課長の職にあった。一九三八年に退職した後は東亜貿易株式会社常務取締役や朝鮮貿易協会副会長などを歴任。宮田節子監修「未公開資料朝鮮総督府関係者録音記録（二）」（『東洋文化研究』三、二〇〇一年三月）の宮本正明執筆分参照。

23 姜徳相聞き書き刊行委員会、前掲書、一〇五頁。

24 宮田節子「梶さんと出逢ったころ」『梶村秀樹著作集・別巻　回想と遺文』明石書店、一九九〇年、一〇九頁。姜徳相聞き書き刊行委員会、前掲書、一〇七頁。

25 国分三亥（一八八四～一九六二）。司法省法学校卒。韓国統監府高等法院検事長、朝鮮総督府高等法院検事長（～一九二〇年）。

26 『朝鮮近代史料　青筵』創刊号（一九六二年、友邦文庫所蔵）に文字起こしが所収されているが未確認。

27 姜徳相「조선사료연구회의 호즈미 세미나에 참석하기까지」宮田節子解説・監修（鄭在貞訳）『식민통치의 허상과 실상―조선총독부 고위관리의 육성증언』혜안、二〇〇二年、三三八頁。

28 姜徳相聞き書き刊行委員会編、前掲書、一一〇・一一一頁。

29 宮田節子、二〇一一年、四四頁。

30 田中武雄（一八九一～一九六六）三重出身。明治大学法科卒（一九一二年七月）。文官普通試験合格（一九一二年五月）、長野県警部補（一九一四年一月）、文官高等試験合格（一九一五年一一月）、長野県工場監督官補・警察部工場課（一九一六年四月）、兼長野県警部（一九一六年七月）、朝鮮総督府事務官・警務局高等警察課（一九一九年九月）、咸鏡北道警察部長（一九二二年六月）、警務局事務官（一九二三年六月）、警務局高等警察課長（一九二四年一二月）、警務局保安課長（一九二六年四月）、京畿道警察部長（一九二八年三月）、警務局保安課長（一九二九年一二月）、官房外事課長（一九三二年七月）、朝鮮総督府警務局長（一九三六年四月）、依願免本官（一九三六年九月）、中華民国新民会監察部次長（一九三八年六月）、拓務次官（一九三九年四月）、依願免本官（一九四〇年一〇月）、興亜錬成所長（一九四一年五月）、朝鮮総督府政務総監（一九四二年五月）、依願免本官（一九四四年七月）、小磯内閣にて内閣書記官長（一九四四年七月～一九四五年二月）、依願免本官（一九四五年二月）、貴族院勅選議員（一九四五年二月～一九四六年二月）。一九六六年四月没。（アジ歴グロッサリーより）

31 姜徳相聞き書き刊行委員会、前掲書、九六頁。

32 同前、八七頁。

33 宮田節子・姜徳相監修『友邦文庫目録』勁草書房、二〇一一年の「友邦文庫について」において、「同録音記録資料の文章化は唯一回で終わる予定であったが、研究者・メディアのあまりの反響によって学習院大学が全資料を購入し、その後も文章化を続けることになった」（v）とあるが、当初より連載する計画であり、「未公開資料朝鮮総督府関係者録音記録（一）」と番号も振って出した。

34 『朝日新聞』二〇〇〇年八月八日付。「植民地支配、１２０人の肉声　朝鮮総督府高官ら、戦後録音」（一面）、「警戒・強制…支配の実態、細部まで記録　朝鮮総督府関係者録音史料」（特設面）

35 『東亜日報』二〇〇〇年八月八日付。「아사히신문 韓-日관계 재조명 기획시리즈 조선총독부 日간부 육성기록 주요내용 “조선인은 도저히 억압할수 없는 민족”」（国際面）

◆草創期の朝鮮史研究会・日本朝鮮研究所と宮田節子

板垣竜太（同志社大学・朝鮮史研究会関西部会幹事）

※以下は、二〇二四年六月一五日に学習院大学で開催された追悼集会「宮田節子さんと朝鮮史研究」で報告した内容を、録音、レジュメ、スライドをもとに再構成したものである。

はじめに

本日の登壇者のなかで、おそらく私が宮田節子さん（冒頭だけ「さん」付けとする）との接点が一番ない人ではないかと思う。大学の授業に出席したこともないし、一緒に何かの共同研究などをやったことがあるわけでもない。二〇年ほど前に京都に来る前には朝鮮史研究会の関東部会に所属していたものの、当時は幹事でもなく、例会もほとんど出席していなかったので、宮田さんとのお付き合いはあまり多くなかった。

ただ、私が東京にいるころに、宮田さんをお呼びした講演会に主催者側で関わったことが二度あった。一度目は「東京大学コリア・コロキュアム」で、創氏改名について講演していただいた[1]。二〇〇三年、麻生太郎が創氏改名について問題発言をしたことで物議を醸したことを受けて、創氏改名論を講演いただいたものである。

もう一度が、本日の私の報告の骨格となった宮田さんの講演である。これは「朝鮮-日本絡まり合った歴史と現在を考える集い」という集まりで企画した連続公開学習会の一環としてお話しいただいたものである。この集まりは、二〇〇二年九月におこなわれた日朝首脳会談を契機として、朝鮮半島に関して非常に殺伐とした状況が日本のなかで生じたことを受け、戦後補償や在日朝鮮人の人権問題などに関わってきたような人たちが、どうしたらいいかと相談会を開くなかでできた。私はたまたまそこに関わることになったが、近い世代の研究者で言えば宮本正明さん、年配の方で言えば田中宏さんとか内海愛子さん、また一九八〇年代の指紋押捺拒否運動の担い手だった方々や「慰安婦」問題で活動してこられた方などが参加していた。そこで公開学習会を開くことになった。第一期は戦前編、第二期は戦後編で、この第二期公開学習会「戦後／解放後の問題」の第二回で宮田さんをお呼びした。こちらからお話ししていただきたいとお願いしたのは、まず日本朝鮮研究所についてだった。同研究所はその後、現代コリア研究所と名前を変えたが、私が同時代的に知る現代コリア研究所というのは、佐藤勝巳さんが真ん中にいて、朝鮮民主主義人民共和国に対する敵対的な言論の中心になっていた。しかし、かつては在日朝鮮人の権利擁護の問題に関わるような団体だったし、佐藤さん自身もかつてはそのような活動をおこなっていた。二〇〇二年の日朝首脳会談以降の状況で、かつて日本朝鮮研究所とはどのようなもので、それがどのように変質していったのかということは、朝鮮問題に関わる者には切実な課題だった。

そこで、一九六〇年代に日本朝鮮研究所に関わっていた宮田さんをお招きして、同研究所と朝鮮史研究会の話をまとめてお話しいただいた。宮田さんは「朝鮮問題への取り組み・研究をふりかえって」という演題で、二時間ほどかけて、とうとうと、しかしまだ話し足りないといった様子でお話しされた（コメンテーターは内海愛子さんだった）。

その二〇〇四年六月一二日の講演の記録をもとに、本日の私の報告を構成した。宮田さんが当日語ったことを軸に据えて、そこに私が多少の資料を付け加えて報告する。講演では、宮田さんが自ら作成した「宮田節子・朝鮮関係年表」（資料番号を①とし、今後この資料を参照する場合は「①」と表記する）、「日本・朝鮮研究所のあゆみ」（②）という二種類の年表を配った。前者は一九五四年から一九七〇年、後者は一九六一年から一九七〇年となっており、重複事項もある。そのほか、ソウルの『歴史批評』（五八号、二〇〇二年）のために書き下ろした「朝鮮に向かって

あゆみはじめたころ」という文章（日本語版）も配布した（③）。そして、当日の講演録音記録もある（④）。これ以外に、下記の宮田さんの回想も随時参照した。

⑤宮田節子「朝鮮史研究会の二十年と私」『季刊三千里』二〇、七九年。

⑥宮田節子「朝鮮史研究会のあゆみ：朝鮮史研究会の創設から一九七〇年まで」『朝鮮史研究会論文集』四八、二〇一〇年。

⑦宮田節子「後継者のいない学問をいかに始めたか」『岩波講座東アジア近現代通史 別巻 アジア研究の来歴と展望』岩波書店、二〇一一年（聞き手：趙景達）。

朝鮮史研究会は一九五九年に発足した。日本朝鮮研究所（正確には「日本」という文字だけ縦横を九〇度傾けて表記される）は一九六一年に結成された（「朝研」とも略される）。宮田さんはその両者に発足のころから関わり、一九七〇年に、ちょうど長男が誕生されたこともあり、朝研を離れるとともに、朝鮮史料研究会の活動も終わりを迎えた。宮田さん作成の年表がいずれも一九七〇年までとなっているのは、そうしたことが関わっている。これは、宮田さんの朝鮮史研究のスタンスが形成され鍛え上げられていく時期とも言うことができる。

本論に入る前にもう一言だけ述べておきたい。私は、宮田さんや、宮田さんの言い方で言えば「戦後朝鮮史研究の第一世代」とよばれる方々[2]の朝鮮および朝鮮史に向き合うスタンス、特に植民地支配責任に向かうスタンスには、深く影響を受けてきた。植民地支配責任を追及しながら朝鮮史に向き合うことが差別の克服になるのだという、そうした宮田さんの姿勢――宮田さんだけではないと思うが――その姿勢は、深く受け止め、私自身がこれまでの自身の研究の構えをつくっていくうえで、重要な糧となってきた。そうした思いがあるからこそ、接点は薄いながらも、本日の報告を引き受けた次第である。

1　朝鮮史研究会

まず朝鮮史研究会から述べていきたい。以下、宮田節子が朝鮮史を志し、朝鮮史研究会が発足するまでを1・1、その後の活動を1・2としてまとめた。

1・1　「朝鮮への初恋の季節」

宮田節子は、しばしば一九四五年八月一五日の経験を反省的に語っている[3]。その語りは両義的である。一方において、それは大人への不信感として表れた。このあいだまで「鬼畜米英」と言っていたのに「アメリカさん」と敬意を表するようになり、「万世一系の神国日本」がいつの間にか「民主国日本」となる。「《主体の変革を通さずに》ずるずるべったり不潔な転換をとげた大人達」を、宮田は訝しく見ていた。他方において、宮田にはその大人たちの偏見を受け継いでしまってもいた。日本の敗戦後、朝鮮人の一団が、日の丸を半分黒く塗った太極旗を掲げて通り過ぎるのを目にした。それを見た大人たちは歯ぎしりし、涙を流す者もいた。宮田自身も同じように怒りを抱いていた。朝鮮人への「大人達の憎悪」を受けつぎ、「太極旗を日本侵略の象徴としてしか理解出来ない無智な私」がそこにいた。

これは、のちに宮田が、朝鮮史研究によって日本人の朝鮮人観の歪みを克服しようとしてきた自身の初発の動機を語るたびに想起されるエピソードとなった。少し長くなるが、宮田の朝鮮史へのコミットメントのあり方を理解するうえで重要なので、引用しておこう[4]。

太極旗を日本侵略の象徴としか理解出来なかつたその無智は、一体どこから来たのだ。アメリカ人にふみつけられるより、朝鮮人にふみつけられる方が痛いと感ずる心は、朝鮮人侮視の感情なのだ。そう気づいた時から、私はこの感情を末梢神経の先まで洗い出してみようと思い立つた。こゝをつつつけば何かある。今の日本人がやら

ねばならない何かがある。そう直感した。〔中略〕「植民地を持った事によって、日本は、日本人は、いかに変質して行ったか」私にとっては ―変質の残滓を浴びていると思われる日本人として― その事がより重要であり、おそらくは一生の課題なのです。〔改行〕この様にあきれる程無智で、その故にこそ猛烈に勇敢な私が三・一運動を選んだ理由は、朝鮮史を学ぼうと思った時、たった一つ知っていた名称 ―それが三・一運動だったからにすぎません。

これは一九五四年に早稲田大学史学科に入学し、東洋史専攻の卒業論文で三・一運動を書いたあとの心境である。他の報告とも重なるが、まずはそこに至るまでの過程を簡単に振り返っておきたい。そこでのキーワードは「疑問」と「痛み」である。

早稲田大学に入学した宮田は、すぐに中国研究会に入会した。当時は「空前の中国ブーム」だったというが、間もなく宮田は中国史の教員への違和感を覚えるようになる。一九五五年頃、東京都立朝鮮人学校が閉鎖されると問題が起こったとき、それへの反対署名を持っていても中国史の教員たちは誰も署名してくれなかった。「朝鮮のことはどうもね…」③と言ってみたり、「君、朝鮮人には気をつけた方がいいよ」⑦と言う者までいた（後者の発言は安藤彦太郎だったらしい[5]）。このような態度を宮田は「左翼大国主義」と呼んで強く批判している。中国に対してはある種の敬意も抱きながら、進歩的なことを語っている人が、朝鮮問題となると急にしぼみはじめる姿を見て、宮田は「中国に対する自己批判が本物なのだろうか」③との疑問を抱くようになった。

そのようなころ、中国研究会での姜徳相の朝鮮人宣言があった（一九五六年ころ）。四年上の先輩だった姜徳相は、当時「神農智」という日本名を名乗っていた。その姜徳相がある日、「これからは本名を名のり、自分の国のことを研究したいと思う」⑦と朝鮮人宣言をおこなった。これを宮田節子は次のように「痛み」とともに受け止めた⑤。

私は姜氏が朝鮮人だと名のりをあげた時、生まれてはじめて自分が日本人である事を、痛みを持って自覚させられた。この事が直接の契機になって私は朝鮮史を志す事になったのである。

この「痛み」は、同情や共感というよりは、日本人としての責任感や罪責感から来るものだったと思われる。そこから宮田は朝鮮史研究を志した。まずは、姜徳相、権寧旭らとともにガリ版刷の『朝鮮歴史資料』[6]を読み合うところからはじめた④。

卒業論文では三・一運動研究をおこなうことにした。指導教員は栗原朋信である。卒業研究の過程で清水泰次（明清研究）から友邦協会を紹介され、そこで一次史料に出会った（詳細は他の二人の報告に譲る）。宮田は三・一運動を主題に卒論を出し、一九五八年三月に卒業した。

ちょうどこのころ、朝鮮史研究の輪とでも言うべきものが関東各地でできつつあった。宮田が回想③④⑥で論及しているものに沿って列挙すれば、次のとおりである[7]。

(1) 東京都立大学旗田巍研究室での『高麗史 食貨志』演習（一九五〇年代半ば～、週一回）

これには旗田巍のほか、金鍾国、朴宗根、朴菖熙、崔吉成、江原正昭、村山正男、宮原兎一、裵秉斗、徐台洙、武田幸男、北村秀人らが参加していた。

(2) 朝鮮近代史料研究会（一九五八年五月～、於・友邦協会、週一回）

詳細は河かおる報告参照。朝鮮史研究者として姜徳相、権寧旭、梶村秀樹、宮田節子、友邦協会側で穂積真六郎、渋谷礼治、近藤釼一、岸謙らが参加していた。これを宮田は「穂積ゼミ」と呼んでいたし、姜徳相は「朝鮮近代史の研究の日本での揺籃の地」と位置づけた[8]。

(3) 李朝実録をよむ会（末松保和、於・学習院大学、月一回）

(4) 資本論研究会（於・金鍾国のアパート、週一回、一九五八年頃～）

上記に比べれば小さく、インフォーマルな集まりである。理論的なことを勉強しようとはじめたもので、メンバーは金鍾国、姜徳相、梶村秀樹、武田幸男、宮田節子らである。「まず夕食を作って、食べる事からはじまる」[9]研究会だったという。ただ、こういうメンバーが集まると『資本論』の読解がなかなかはじまらず、朝鮮の歴史と現状に関わる話題で議論しあうことが中心となっていた。一時期、山辺健太郎をチューターとして呼んだことがあったが、「読書百遍意自ら見ゆ」しか言わず、そのくせ作ったカレーは食べていくし交通費を出せと言ってくるということで、そのうち「クビ」になったという[10]。

こうした流れのなかから朝鮮史研究会が結成されることになる。朝鮮史研究会会報の第一号（一九五九年八月）に、研究会の紹介があり、そのなかでもこの(1)～(3)が列挙されている。一見、朝鮮史研究会とは別にこのような関連研究会があるとただ紹介しているだけに見えるが、そうではない。むしろ、まずこのような複数の研究の輪があって、そこから朝鮮史研究会が生まれたという、そうした由来の紹介なのだと理解すべきものだと思う。

宮田はこのころの自分を振り返って「朝鮮への初恋の季節」と言ったことがある[5]。『朝日新聞』というタイトルを見ても「朝・日（ちょうにち）新聞」に見えてしまったという、「そんな私の一方的な朝鮮への初恋の季節に、朝鮮史研究会が誕生したのである。」

1・2　朝鮮史研究会草創期の諸活動

朝鮮史研究会の草創期と宮田節子については、何よりも宮田自身が朝鮮史研究会五〇周年にあたる二〇〇九年の大会で語り、それが論文化されており[6]、そこに基本的なことが出そろっているため、ここでは補足的な話を中心に論ずるにとどめたい。

朝鮮史研究会は一九五九年一月三一日に発足した。都立大の旗田巍ゼミの提案からはじまり、旗田、末松保和、田中直吉（法政大、近代外交史）、そして青山公亮を世話人に発足した（青山が世話人に入っている資料とそうでない資料がある）。張斗植がつくっていた雑誌『鶏林』第三号（一九五九年）に、尹学準が「ルポ・朝鮮史研究会」と題して設立時の様子を簡単に報告している（図1）。設立当初は、歴史学研究会東洋史部会の一研究会という位置づけだった。

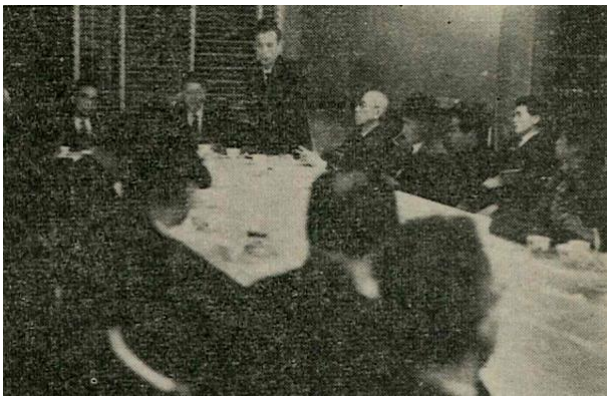


図1　朝鮮史研究会結成時の様子

(備考) 出典は『鶏林』第3号（1959年）。立って挨拶をしているのが旗田巍。その右が青山公亮、一人おいて山辺健太郎。旗田の左が田中直吉、末松保和。

初期には役員も置いていなかったとのことだが、朝鮮史研究会報の第一号（一九五九年八月）の編集は村山正男と裵秉斗が当たった。その後、幹事体制がはじまり、今に至っているが、宮田節子によれば、初期には

日本人二名、在日朝鮮人二名の四人体制だった。会報から名を拾えば次のとおりである。

徐台洙、朴宗根、宮田節子、武田幸男（会報二号＝一九六二・二、三号＝一九六二・五）

徐台洙、朴宗根、宮田節子、江原正昭（会報五号＝一九六三・二、六号＝一九六三・七、七号＝一九六三・一一）

江原正昭、北村秀人、姜徳相、楠原利治（会報七号→第一回大会＝一九六三・一一）

宮田の回想によれば、徐台洙、朴宗根、宮田節子とあと一人の幹事が武田→江原→楠原と何人か変わったとのことだが①⑥、会報を見るかぎり、少し事情が異なる。会報第七号によれば、一九六三年一一月の朝鮮史研究会第一回大会に際して、役員改選がおこなわれた。

幹事には、出来るだけ多勢の会員がじゅんぐりになって貰い、各自の会としての自覚を強めるのが、当研究会のたてまえなので、四人の幹事のうち徐台洙・宮田節子・朴宗根の三人は退任し、江原正昭は留任することになった。なお、新幹事には北村秀人・姜徳相・楠原利治の三人が内定した。

実際、会報第八号（一九六四年五月）、第九号（一九六四年九月）にはそのとおりになっている。宮田の記憶が間違っている可能性もあるし、会報の記述が全て実態と同一であるとは限らず、このように総会で決めながらも、宮田が幹事として活動していた可能性もある。

宮田の回想によれば、この幹事体制は一九六〇年代半ばに大きく変わった（以下の引用は文献①によるが⑥にも同じような内容がある）。

この夏、朴慶植・李進熙が幹事朴宗根、姜徳相、楠原利治、宮田節子に研究会は日本人が主体となって運営すべきで、在日朝鮮人は準会員となるべきだと提案。激しい論争となる。宮田は研究会は世界で唯一南北の研究者と日本人研究者が全く対等の立場で自由に研究できる場であることを強調絶対反対する。しかし朴慶植・李進熙もゆずらず、自分達の意見がとう（ママ）らない場合、総連系研究者は脱会するという。そこで妥協がはかられ、幹事は妥協した責任を取って辞職。この時から朝鮮人幹事は後に李成市が幹事になるまで不在。

宮田はこれを一九六六年と記憶しているが、会報と照らし合わせると、これは一九六五年のできごとではないかと推察される。というのも、会報第一〇号には、第三回大会（一九六五年一二月）の総会で次のように幹事会が再編されたことが報告されているからである。

従来の幹事に当る常任幹事のほか、幹事会が拡大され、有井智徳・*加藤マユミ・*梶村秀樹・楠原利治・*桜井浩・旗田巍・宮田節子・宮原兎一・村山正雄（ご病気のため今回は辞退）が選任されました。

このように、在日朝鮮人の幹事がいなくなり、日本人だけで構成されているが、会報ではその理由は説明されていない。その理由が、宮田の述べたような事情なのではないかと思われる。

この時期の朝鮮史研究会についての重要なトピックとしては、日韓会談・日韓条約反対声明がある。このあとの日本朝鮮研究所でも述べる日韓会談反対運動に対し、朝鮮史研究会でも行動が提起された。しかしながら、「北も南も対等の場で研究できるのは、世界でただ一つ、わが研究会あるのみ」との観点から、韓国からの留学生にも配慮し、研究会としてではなく「有志」の声明となった④⑥。この「最近の日本と朝鮮の関係についての声明」と題された声明については、朝鮮史研究会内部の座談会で旗田巍が「声明文はどこにも残されていない」と述べ、宮田がその発言を引用しながら声明文を『朝鮮史研究会論文集』に転載している⑥。しかし当時掲載されていないというのは誤りで、日本朝鮮研究所の『朝鮮研究』四三号（一九六五年九月）に活字で発表されている。しかも、宮田が転載した一九六五年八月三日付けの声明では三六名の「発起人」

だけが載っているが[6]、この『朝鮮研究』掲載版には一九六五年九月六日付けで一七九名の「署名参加朝鮮研究者」が載っている（そのうち代表者は今西春秋、四方博、旗田巍、三上次男の四名）。

宮田節子は貴重な語り部だったし、基本的な論述においては正確だと思うが、後輩たるわれわれは、その語りに全てを依存すべきではなく、自ら資料に直接当たりながら再構成していく必要がある。

最後に大会について簡潔に述べておきたい。この時期に宮田が関わった大会は次のとおりである。

第一回（一九六三・一一、於・明治大学）
第二回（一九六四・一一、於・明治大学）「日朝関係の再検討」
第三回（一九六五・一二、於・明治大学）「歴史教育における朝鮮問題」
第四回（一九六六・一一、於・明治大学）「朝鮮社会の歴史的発展」
第五回（一九六七・一一、於・立命館大学）「日朝関係の史的再検討」
第六回（一九六八・一一、於・東京都立大学）「「明治百年」と朝鮮」

このうち第六回は宮田が大会実行委員長をつとめた。ただ、ここでは第四回大会に注目しておきたい。宮田は第四回大会について『朝鮮研究』に寄稿している[11]。第二回「日朝関係の再検討」、三回「歴史教育における朝鮮問題」の大会テーマに表れているように、戦後の朝鮮史研究は「まず自分自身を含む日本人の朝鮮観を問題にすることから出発」した。それは、他律的な停滞史観や、日本が朝鮮の近代化に寄与したといった議論などの「支配者の思想」を否定するためには必要な作業だった。それを踏まえて、次にすべきことは他律的でも停滞的でもない「朝鮮史の内在的発展の究明」だった。近代史の叙述も、朝鮮を「侵略の対象」とするだけなら他律史観の新しい粧いにすぎない。そこで第四回大会のテーマを「朝鮮社会の歴史的発展」と設定した。この新たな探究に際しては、南北朝鮮の研究成果から学ぶことが不可欠である。ようやく朝鮮史研究がここにたどり着いた。そのように、宮田は当時位置づけていた。この姿勢は、次に述べる日本朝鮮研究所への取り組みとも深く関わっている。

2　日本朝鮮研究所

2・1　設立初期の活動

日本朝鮮研究所は、民間の研究所として、一九六一年三月に設立準備会が設けられた[12]。旗振り役は、訪朝記『三八度線の北』（新日本出版社、一九五九年）で既に有名になっていた寺尾五郎で、ジャーナリストの藤島宇内とともに半常勤で準備に当たった。八月には、一二名の世話人が集まり、趣意書・所則・事業・財政計画を審議し、一一月一一日、日本橋精養軒で設立総会を開催した。この日はクーデターで執権して間もない朴正熙が来日した日でもあり、緊張感のなかで設立総会が開かれた。理事長に古屋貞雄、副理事長に四方博、鈴木一雄、旗田巍、専務理事として寺尾五郎、研究・編集責任に藤島宇内が当たった。

日本朝鮮研究所の「日本」には、単に設立場所が日本であるということではなく、日本人の責任において、日本人の立場性においておこなう朝鮮研究という意味が込められていた。その設立趣意書には、「いまだに少なからぬ日本国民の朝鮮観は、誤解と偏見にみちたままである」、「今こそ、過去の誤れる統治政策に由来する偏見を清算し、日本人の立場からの朝鮮研究を組織的に開始することが必要」との文言がある。また、所則第三条「本研究所は、日本人の手による、日本人の立場での朝鮮研究を目的とする」と書かれていた。これは、当時の状況からすると意味のある設定だった。というのも、当時既に日朝協会といった団体もあったが、寺尾五郎らの評価からすると、朝鮮総聯がお膳立てをしてそこに日本人の「人士」たちが乗っかるという運動にしかなっていなかった。そうではなく、日本人がしっかりと反省のうえに立って、自らの意志でおこなう朝鮮研究が必要だと、そのような意味を込めて「日本」の二字

を冠した研究所が出帆したのである。

宮田節子や梶村秀樹は、準備会の時期から朝研に参加していた[13]。二人は、研究所という名の何かができるらしいという話を聞いて、準備会に参加した。ところが、「研究所というからには、研究をするのだろうと思って参加したのだが、研究所は実質的に運動体だった」という。そのようにして関わるようになった二人だが、その回想によれば朝研の重要な方向付けには、二人の意見も反映されているという。宮田は次のように語る。

> 当時の日朝友好運動は在日朝鮮人のお膳立ての上にのった、自前の運動ではなかった。その様な姿勢ではいつまでたっても自分達の運動にはならない。自分の頭で考え、自分の足で歩き、身ゼニを切って仕事をする。その事を梶さん〔＝梶村秀樹〕も私も強く主張していたので、設立総会でこの方針が通った時はうれしかった。

おそらく寺尾五郎らも同様の思いだったからこそ、この方針が通ったのだろう。なお、宮田の回想によれば、「日本朝鮮研究所」と「日本」を付けることも宮田が同じ趣旨から強く主張した結果だったという④。

> だから、非常に若くて生意気だったんですけれども、絶対に「日本・朝鮮研究所」じゃなきゃいけないっていうのを強く主張しました。このとき、私、非常によく覚えてるのは、すぐに竹内好さんが今の私に賛成してくれたっていうことだけは、すごくよく。〔中略〕そのとき、「いや、そういうふうなことは非常に問題が民族主義的になる」とかっていうんで反対もあって、一応どういうふうにするかということは、幹事会預かりみたいな形になって、そのときは正式には決まらなかったように思うんです。だけど、結局は「日本・朝鮮研究所」になったときには、そういうふうな経緯があったわけです。

このようにしてはじまった朝研で、宮田が初期より一貫して取り組んだのは連続シンポジウム「日本における朝鮮研究の蓄積をいかに継承す

表１　シンポジウム「日本における朝鮮研究の蓄積をいかに継承するか」

回	主題	年	号	報告者	司会	出席者
1	明治期の歴史学を中心として	1962	5･6	旗田巍	安藤彦太郎	上原専禄, 幼方直吉, 宮田節子
2	朝鮮人の日本認識について：主として植民地時代を中心に	1962	7･8	金達寿	安藤彦太郎	幼方直吉, 遠山方雄, 宮田節子
3	日本文学にあらわれた朝鮮観	1962	11	中野重治 朴春日	安藤彦太郎	幼方直吉, 小沢有作, 後藤直, 四方博, 旗田巍, 藤島宇内, 宮田節子
4	「京城帝大」における社会経済史研究	1962	12	四方博	安藤彦太郎	上原専禄, 幼方直吉, 旗田巍, 宮田節子
5	朝鮮総督府の調査事業について	1963	13	善生永助	安藤彦太郎	小沢有作, 旗田巍, 宮田節子
6	朝鮮史編修会の事業を中心に	1963	14	末松保和	旗田巍	幼方直吉, 宮田節子, 武田幸男
7	日本の朝鮮語研究について	1963	22	河野六郎	旗田巍	宮田節子
8	アジア社会経済史研究	1963	23	森谷克己	旗田巍	宮田節子, 渡部学, 宮原兎一, 村山正雄
9	明治以後の朝鮮教育研究について	1964	26･27	渡部学	小沢有作	阿部洋, 幼方直吉, 海老原治善, 新島淳良, 旗田巍, 朴尚得, 宮田節子
10	総括討論	1964	30	－	宮田節子	旗田巍, 幼方直吉, 渡部学, 小沢有作
11	朝鮮の美術史研究について	1965	44	中吉功	宮田節子	旗田巍, 大坪静仁
12	朝鮮の考古学研究	1968	71	三上次男	宮田節子	渡部学, 後藤直
13	日本と朝鮮（そのまとめと展望）	1968	80	－	宮田節子	旗田巍, 安藤彦太郎, 渡部学, 幼方直吉, 梶村秀樹

(備考)「号」は『朝鮮研究月報』および『朝鮮研究』の掲載号。「出席者」は報告者・司会以外の参加者で、その並び順は掲載誌の表記に従っている。

るか」だった。朝研は一九六二年から一九六八年にかけて、計一三回のシンポジウムを開催した（表1）。これは、歴史学だけではなく、文学、社会経済史、朝鮮語、教育、美術史、考古学など、さまざまな分野の戦前の蓄積を検証するシンポジウムだった。「いかに継承するか」というタイトルだけでは「継承」が強調されているように見えてしまうが、批判的に検証したうえで、どのように継承するかを考えるというのがその趣旨である。一三回全ての回に参加したのは宮田節子のみであり、第一〇回以降は司会を引き受けた。

その思いと位置づけについて、宮田は当時次のように述べている[14]。

戦後の朝鮮研究出発点は、戦前の研究を否定することにはじまった。日本が朝鮮を植民地支配していた時は、朝鮮人には自国の歴史を研究する自由が全くなかったし、日本人研究者も日本の植民地支配を肯定する限界内でしか研究することが出来なかった。したがって戦後の特に若い研究者達が、その否定を自己の出発点としたことは当然である。〔改行〕しかし研究の進展にしたがって、戦前の研究の中にも汲み取るべき多くの成果があること、また真に否定し、のり越えるためには何よりも否定すべき対象を十分に知らなければならないことが認識されはじめた。

なぜ一分野ではなく、さまざまな分野で検討するのかという点については、次のように述べていた[15]。

しかしそれらの〔戦後の〕批判は、戦前の研究を学説的に整理し、体系的に批判を加えるまでにはいたらず、むしろ各自の研究テーマに関するもののみに限られていた。したがって自分の関心ある分野の研究に対しては激しい批判を加えながら他の分野では戦前の研究に安易に依拠するという矛盾が、一つの論文の中でさえ見出される事もあった。

このように、この作業は単なる「先行研究の整理」ではない。学問の植民地主義を総体として乗り越えようとするための試みだった。

シンポジウムのなかでは宮田自身もさまざまな発言をしているが、日本人としての責任や受け止めという意味で、その特色とも思えるものについて挙げてみたい。まず第二回シンポジウムでは、文学者の金達寿を呼んだ。金達寿は、祖国朝鮮が発展したら日本人の朝鮮観もよくなるという旨の発言をした。それに対して、宮田は次のように言った。

基本的に日本人の朝鮮観の変革は、朝鮮人の祖国の発展によるといわれたさっきの意見は朝鮮人の立場としては非常に正しいと思いますが、日本人としてはそれをああそうですかというだけでは余り情けないと思います。日本人の朝鮮観の変化は日本の変革の問題と不可欠の関係にあると思います。そのために朝鮮史を勉強しはじめたんです。

朝鮮の発展があってもなくても、日本人の偏見は日本の問題として克服しなければならないという立場を宮田は貫いた。宮田は、かつて資本論研究会の際に、金鍾国とも同じようなやりとりをしており[16]、宮田なりの一貫した立場性の表明だったといえよう。

中野重治、朴春日が登場した第三回では、宮田は「友好」について持論を語った。

中野先生がお出しになった問題は日本が圧迫民族だったということからきていると思います。それが被圧迫民族になっても意識の方は余り変っていない。そういう中で朴さんも「日本プロレタリア文学に表れた朝鮮人像」をかかれて、日本人との友好の証しを求めようとされたのだと思いますが、私たち日本人としていえばむしろ例外的にそういう人もあったでしょうけれども、例外じゃない非友好の歴史というものを重大なポイントとして問題にしなきゃならないと思うんです。」

日朝友好のためにも、「非友好」の歴史をしっかり検証しなければならな

いのだという論理であり、これはこのあと述べる日韓会談反対運動でも一貫して主張されることである。

2・2　日韓会談反対運動と植民地支配責任論

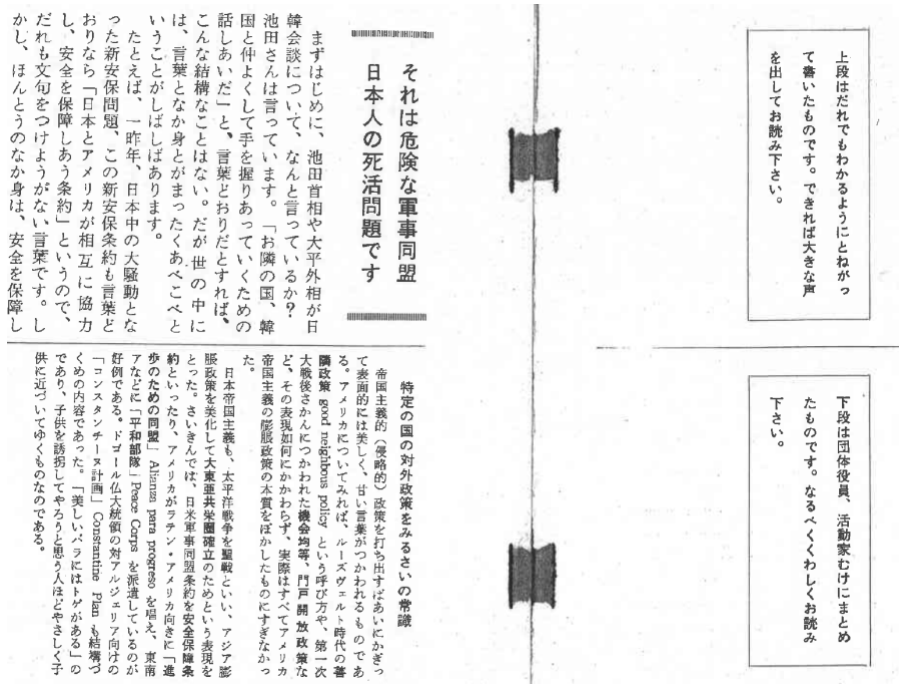
朝研が単なる研究団体ではなく「実質的に運動体だった」というのは、そこが「断続的に進展していた日韓会談に対する反対運動の拠点」[17]だったからである。たとえば、朝研は日韓会談反対運動に関連して講師を派遣したが、一九六三年一月中旬から三月だけで、寺尾五郎一九回、畑田重夫一六回、野口肇九回、梶村秀樹四回、印南広志四回、藤島宇内三回、小沢有作二回といった調子だった[18]。

また、朝研は、独自のパンフレットや冊子を発行した（表2）。こうしたパンフレット類は、一般の書籍流通ルートを通して販売していなかったが、日韓会談反対運動のなかで、万単位で売れたことは特筆に値する。これらのパンフレットには「朝研方式」とも呼ばれる特徴があった。それは上段と下段に分けて組まれていたことである（図2）。「上段はだれ

表2　日韓会談反対運動に際して日本朝鮮研究所が発行したパンフレット

通称	編著者名義	タイトル	発行年月	販売数
赤パンフ	寺尾五郎・野口肇・畑田重夫(編)	『私たちの生活と日韓会談』	1962年12	7万
青パンフ	寺尾五郎・川越敬三・畑田重夫(執筆)	『日本の将来と日韓会談：ポラリス段階での日韓会談の諸問題』	1963年8月	1万
連帯	安藤彦太郎・寺尾五郎／宮田節子・吉岡吉典	『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』	1964年6月	1万3千
黄パンフ	寺尾五郎他(編)	『アジアの平和と日韓条約』	1965年10	5万
漁業	寺尾五郎・佐藤勝巳(共著)	『日本の漁業と日韓条約』	1965年12	あまり売れず

(備考) 販売数は佐藤勝巳『わが体験的朝鮮問題』による


上段はだれでもわかるようにとねがって書いたものです。できれば大きな声を出してお読み下さい。

下段は団体役員、活動家むけにまとめたものです。なるべくくわしくお読み下さい。

それは危険な軍事同盟
日本人の死活問題です

まずはじめに、池田首相や大平外相が日韓会談について、なんと言っているか？池田さんは言っています。「お隣の国、韓国と仲よくして手を握りあっていくための話しあいだ」と、言葉どおりだとすれば、こんな結構なことはない。だが世の中には、言葉となか身とがまったくあべこべということがしばしばあります。

たとえば、一昨年、日本中の大騒動となった新安保問題、この新安保条約も言葉どおりなら「日本とアメリカが相互に協力し、安全を保障しあう条約」というので、だれも文句をつけようがない言葉です。しかし、ほんとうのなか身は、安全を保障し

特定の国の対外政策をみるさいの常識

帝国主義的（侵略的）政策を打ち出すばあいにかぎって表面的には美しく、甘い言葉がつかわれるものである。アメリカについてみれば、ルーズヴェルト時代の善隣政策 good neighbous policy という呼び方や、第一次大戦後さかんにつかわれた機会均等、門戸開放政策など、その表現如何にかかわらず、実際はすべてアメリカ帝国主義の膨脹政策の本質をぼかしたものにすぎなかった。

日本帝国主義も、太平洋戦争を聖戦といい、アジア膨脹政策を美化して大東亜共栄圏確立のためという表現をとった。さいきんでは、日米軍事同盟条約を安全保障条約といったり、アメリカがラテン・アメリカ向きに「進歩のための同盟」Alianza para progreso を唱え、東南アなどに「平和部隊」Peace Corps を派遣しているのが好例である。ドゴール仏大統領の対アルジェリア向けの「コンスタンチーヌ計画」Constantine Plan も結構づくめの内容であった。「美しいバラにはトゲがある」のであり、子供を誘拐してやろうと思う人ほどやさしく子供に近づいてゆくものなのである。

図2　日本朝鮮研究所パンフレットのページ

(出典)寺尾五郎ほか『私たちの生活と日韓会談』(日本朝鮮研究所、1962年)、本文冒頭ページ。

でもわかるようにとねがって書いたものです。できれば大きな声を出してお読みください」とあり、「下段は団体役員、活動家むけにまとめたものです。なるべくくわしくお読みください」と記されている。上段は、多くの場合、寺尾五郎の講演をテープ起こししたものだった。寺尾の講演は聴衆を引きつけるものがあったとは当時よく言われたことだが、冗談も交えながら、必要とされる知識を端的に、分かりやすく伝える点で定評があった。そして下段には注に相当するものが入っており、より詳しい知識を必要とする人々向けのものだった。この注の作成にあたって、宮田や梶村ら、若手の朝鮮（史）研究者が重要な役割を果たした。

では、宮田らが単なる下働きの役回りだったかというと、必ずしもそういうことではない。特に重要なのは植民地支配責任論を朝研の日韓会談反対運動の論点に入れたことである。宮田は次のように語っている[④]。

このとき寺尾さんの話の最大の欠点は、日韓会談反対闘争で、日・韓・台、日本、韓国、台湾の軍事同盟の完成っていうふうな、日韓台軍事同盟っていうことを反対運動の主眼にしてたんです。それで、私と梶村さんなんかはやはり、特に植民地支配の歴史なんかをやってますから、「そうじゃなくて植民地支配の清算、植民地支配の責任の問題を入れてかなきゃいけない」というのが、私と梶村さんの意見だったんです。

ちょうどこのころ、一九六二年一二月二三日に朝鮮民主主義人民共和国が日本政府に対して植民地支配への賠償を求めるとともに、そうした論点を盛り込んだ声明を発表していた。これも受け止めながら、朝研の「赤パンフ」（一九六二年一二月。冊子の表紙の色が赤だったためにそのように呼ばれる）では明確でなかった植民地支配責任論が「青パンフ」（一九六三年八月）では盛り込まれることになった。

では、旧日本帝国主義への批判は、日本国民によって十分にやられてきたか？これはきわめて不十分です。中国に対する日本の「戦争責任」の問題はある程度糾明されましたが、しかし、これとてもまだ不十分、いわんや、朝鮮に対する「植民地支配の責任」の問題などは手もつけられておりません。この不十分さが、朝鮮に対する無関心と偏見と蔑視を広くはびこらせている最も大きな素因であるといえます。

これは、ある意味で当時の朝研の独自の立場を代表するようなくだりである。

このような植民地支配責任論を、単に原則論として述べているだけでは足りなかった。新たな朝鮮史像、特に日本政府や保守派が堅持してきたような朝鮮史像に対抗する、批判的な朝鮮近代史の体系的知識が必要となった。その役割を若手研究者たちにふったのは寺尾五郎だった[④]。

しかし、天に向かってそのこと〔朝研が植民地支配責任の問題を提起しなければならないと宮田らが主張したこと〕は唾を吐いたような形になりまして、「それだったらば、お前たち、一応研究者と称する者が、日本が朝鮮に来て何をやったかを、自分たちが暴露していくべきじゃないか」っていうふうなことを寺尾さんに言われて。それで、ろくに勉強もしないのに植民地支配についての講演なんかに引っ張り出されたり、「概説書を書け」と言うんです。この注程度のことでしたら何とかできるわけですけども、概説書を書くっていうのは大変なことなんです。〔中略〕寺尾さんに、「いや、概説は書けない」と言うと、「じゃあ、いつまで待ったら書けるのか」と。「君たちが満足するような概説書が書ける頃にはもう反対闘争は終わってる。戦いというのは、タイミングが必要なんだ」というふうなことを散々言われまして。

こうした寺尾の問題提起を受けて、まず日本朝鮮研究所が出したのは『朝鮮近代史の手引』（一九六六年）だった。これはタイトルどおり朝鮮近代

史研究入門とでもいうべきもので、概説書といえるものではなかった。当時、朝鮮史研究会も日韓会談反対運動の産物として『朝鮮史入門』（太平出版社、一九六六年）を出しているが、これも研究入門と位置づけられるものである。日本朝鮮研究所がようやく概説書と呼べるものを出したのは、一九六八年の渡部学編『朝鮮近代史』（勁草書房）だった。まさにミネルバのフクロウは黄昏に飛び立つというべきか、寺尾の予言どおりというべきか、朝鮮近代史の概説書が出るころには既に日韓闘争は終わっていた。

そのようななかで朝鮮近代史の概説書の役割を果たしたのが、日本朝鮮研究所が一九六四年六月に出した『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』だった。その構成を掲げているとおり（表3）、日本の朝鮮侵略史、日・朝・中三国人民連帯の闘いの歴史、戦後の日朝関係の諸問題、そして日朝友好運動の意義と役割との四部構成となっている。下段がさまざまな用語の説明となっているが、朝鮮近現代史を理解するための百科事典的なものになっている。これが日韓闘争のなかで一万部以上売れたことは、こうした知識こそが当時必要とされていたことを物語っている。

この本の表紙に共著者として掲げられているのは安藤彦太郎、寺尾五郎、宮田節子、吉岡吉典の四名である。しかしこの四名だけがこの本を書いたわけではない。幼方直吉、小沢有作、梶村秀樹、木元賢輔、楠原利治、渡部学も執筆協力にあたっていたが、「歴史学的にかなり重要な意見の差異」があったために、四名が責任を負うことになったという[19]。

重要なのは、この冊子の骨格に植民地主義論が据えられたことである。日本人の朝鮮への無関心・偏見は「朝鮮植民地支配の結果であり残りかすである」、日朝友好運動とは植民地主義という「非友好」に反対する運動である、といった考え方がそうである。これが当時「朝研理論」とも呼ばれた立場性の設定である。

宮田は次のように述べている。「宮田の感想ではこの頃が研究所の最盛期であったように思う」[20]。逆にいえば、このあと朝研は苦難の道を歩むことになる[20]。

表3　『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』の構成

	上段	下段
第一講	日本の朝鮮侵略史	李完用／幸徳事件／「日韓併合」条約／朝鮮総督府／笞の刑／憲兵／愛国啓蒙運動／一進会／言論弾圧／第一次教育令／土地調査事業／特高／東洋拓殖株式会社／警察官増員／朝鮮産米増殖／捨て子・高利貸／「農業改良」／米騒動と朝鮮米／工業化政策／兵站／大陸兵站基地化政策／皇国臣民の誓詞／在日朝鮮人渡航史／強制連行について／関東大震災下の朝鮮人虐殺事件／戒厳司令部／米騒動／初等国史第六年
第二講	日・朝・中三国人民連帯の闘いの歴史	「日韓併合」までの近代日朝関係史年表／樽井藤吉／「脱亜論」／金玉均／孫文／日韓併合を批判する目／柳宗悦／私立学校と書堂／三・一運動／「文化政治」／独立の機運／間島／五・四運動／朝鮮共産党／朝・ソ連合パルチザン／朝・中連合パルチザン／琿春事件／シベリア出兵／最初の日朝共同行動／評議会と中国の五・三〇事件／元山ゼネスト／光州学生事件／祖国光復会の十大綱領／朝鮮民族戦線行動綱領／満州国／三大規律八項注意／満州移民／馬賊／満鉄／満鉄内のたたかい／「満州国」の民族差別／万宝山事件／「満州」の党組織／間島暴動／指導者としての金日成／長征／祖国光復会／中国側の資料・中国東北における金日成指導下の朝鮮人民の抗日闘争への参加／八路軍／関東軍／日本人解放連盟／戦前の反植民地闘争の概括／日本人反戦兵士／日・朝・中三国労働団体の共同声明
第三講	戦後日朝関係の諸問題	日米開戦の原因／中華人民共和国の成立／アジアにおけるアメリカのつまずき／アメリカのアジア政策における日・朝・中／アジアの戦争／日本最初の米軍軍事委員会裁判／在日朝鮮人の教育問題／日中友好運動／中国研究所／アジア・アフリカ研究所／日・朝・中の文化学術交流／学術文化交流促進に関する共同声明
第四講	日朝友好運動の意義と役割	

2・3　日韓条約締結後

東アジアで拡大した日韓会談反対の声にもかかわらず、一九六五年、日韓条約は締結された。これ以降、日本朝鮮研究所は三つの契機を経て縮小を余儀なくされる。そして宮田節子も一九七〇年には朝研を離れることになる。以下、そのプロセスを確認しておきたい。

(1)『朝鮮文化史』の出版

一つめは『朝鮮文化史』の翻訳出版事業である[21]。原本となったのは、朝鮮科学院の歴史研究所が総力を挙げて刊行した『朝鮮文化史』（初版一九六三年、第二版一九六五年）で、一九六四年に朝研関係者一〇名が訪朝したときに社会科学院から初版を寄贈されたものである。朝研では、「単に日本の侵略を暴露するだけではなくて、朝鮮自身が素晴らしいとかなんか口で言ってるよりも、朝鮮の文化そのものを紹介するほうがいいんじゃないか」[④]という観点から同書の翻訳に着手することになった。

なぜ本の刊行が、その後の朝研を揺るがすような大事業となってしまったのか。それはこの本の日本語版を「限定豪華美術本」として出版したことによる。B4判、上・下二巻本で定価を二四〇〇〇円と設定し、二〇〇〇部発行することになった。特に力を入れたのは写真で、単に印刷された原本から影印するのではなく、「豪華美術本」とするために、共和国で再撮影したり、日本・韓国でも撮影・入手したり、原色版を京都の便利堂という専門会社で印刷したりと、かなり手の込んだ作業をおこなった。これを進めるために、研究所は新宿に移転し、事務局体制としても研究所の事務局長を佐藤勝巳が文化史を木元賢輔が担うことになった[②]。さらに、研究所外郭団体として株式会社亜東社を立ち上げた。翻訳も日本人（渡部学、大村益夫、梶井陟ら）がおこなって、一九六五年六月までに初稿が成った。

当時の「『朝鮮文化史』予約募集の要領」を見ると、「これだけは必ず言っておくべし」として、「内容は、空前絶後、最高のもの」「今後一〇〇年間は、これが定本となる」「朝鮮文化のエンサイクロペディアである」「日本における最高の紙・最高の印刷・最高の造本による豪華本である」と売り文句が書かれている。実際、できあがったものを見ると（一九六六年七月刊行）、ずっしりと迫力のある本で、中身も確かに「エンサイクロペディア」と言えるような内容がたっぷり盛り込まれている。

なお、『朝鮮文化史』刊行にあたっての宮田節子の役割は、まず渡部学、梶村秀樹とともにおこなった訳注の作成だった[22]。また、活版印刷部分については朝鮮新報社でおこなったが、ふだん用いている普通紙ではないアート紙に印刷するため、乾きにくく、そこに粉をまくような作業もやったという[④]。さらに、足りない資金を集めてまわるといったこともおこなった。

ところが、この身の丈に合わない大出版事業のせいで、朝研は多額の借金を負ってしまった。宮田の知るだけでその額は七〇〇万円にのぼる[④]。これが朝研の財政を圧迫することになった。

(2)日本共産党の寺尾批判と朝研理論批判

そうしたなかで、一九六六年から六七年にかけて、朝研の看板ともいえる寺尾五郎が日本共産党に批判され、その後、研究所から去るというできごとが起きた。その背景には、日本共産党と新左翼との対立、中国での文化大革命の展開などがあった。公然と寺尾批判が展開されたのは『赤旗』一九六七年一月五日の新春座談会である。そこで寺尾の主張は「日帝自立論に道をひらく議論」だと批判された。あくまでも米帝国主義を「主敵」と捉えていた日本共産党は、日本が既に帝国主義国家になっているという類いの主張は、新左翼と同じ「日帝自立論」だとして批判していた。それが寺尾による日本の責任論への批判として現れたのである。そして、この寺尾批判の矛先は、一九六七年二月二四～二五日の『赤旗』では、『連帯の歴史と理論』にまで及ぶことになった[23]。

そこで槍玉に挙げられたのは、第四講（ここは上下段に分かれていな

い）の論点、すなわち「朝研理論」の中核に当たる部分だった。日本共産党は、米帝という日朝人民の「共通の敵」との闘いを重視する視点から、日本人の朝鮮蔑視思想の克服を重視した朝研を批判した（私は左翼排外主義と言いたくなってしまう）。もともとこの箇所が朝研内で議論になったことがなかったにもかかわらず、共産党の批判を受け、座談会「日朝友好運動の意義と役割をめぐって」が組まれ、第四講が集中討議された[24]。宮田節子の司会により、執筆責任者の一人であったはずの吉岡吉典が清水克己とともにこの第四講を批判し、執筆者でもなかった佐藤勝巳がその内容を擁護するという、奇妙な議論（＝論理的には奇妙で、セクト的にのみ理解可能な議論）が展開された。

ちょうどこの年（一九六七年）の二月一二日、朝研の総会で事務局を縮小し、淡路町に移転することになった。寺尾もこの頃に脱会した。宮田の回想によれば、その後、「多くの所員は研究所と距離を置き、やがて顔を出さなくなる。残ったのは政党と関係のない研究者が多かった」という②。少数による運営委員会体制に変わり、宮田は財政と編集の両方の担当となった④。

私の日本朝鮮研究に対する活動、寺尾さんなんかいなくなってからの思い出っていうのはお金のこと。そういう中で、私が財政担当の次に、今度は編集、発行にまでなったんです。

そして、このような体制で起きたのが、次で述べる部落差別発言事件だった。

(3) 部落差別発言問題

月刊誌を出し続けるのは簡単なことではない。当時の朝研の資料を見ていると、「埋め草」という表現が幾度も出てくる[25]。足りない誌面を埋めるために入れる記事などのことだが、そのような「埋め草」として、シンポジウム「日本における朝鮮研究の蓄積をいかに継承するか」は都合のよいものだった④。

シンポジウムっていうのは割合にこういった雑誌にするのに、埋めるのに都合が良かったっていうこともあって、最初はもっと早くやめるつもりだったんですが、「もっとやれ、もっとやれ」っていうことで十何回ぐらいやって。最後に、総括シンポジウムをやったんです。

そして、シンポジウムの第一三回「日本と朝鮮（そのまとめと展望）」で問題の発言は起こった。以下の発言が『朝鮮研究』第八〇号（一九六八年一二月）に掲載されたのである（今日の研究者の教訓のために、あえて関連箇所を引用する[26]）。

宮田　〔中略〕日本人にはとりわけ、朝鮮の独自性をみとめない思想があるのですから。

旗田　それはあると思いますね。多少話がずれるかもしれませんけれど、朝鮮史の研究は、日本の歴史学の中で行われているわけです。日本歴史学全体の動きというか、関連というか、それと共に進んでいっているわけです。しかし私自身を含めて反省しますと、朝鮮史研究のあり方は特殊なんですね、朝鮮史研究というのは、なにか、日本の歴史全体の中でも、特殊部落（ママ）的なものになっている、これはあまりいいことではない、従来の歴研大会をみましても、朝鮮史は決して主流にならず、いわば素通りされてしまう、これは一体どうしたことであろうか、単に研究者が少ないとか、人材が少ないというだけなのか、研究の視野に問題があるのか、ということを感じるのですが、朝鮮史は独自に歩んでいる、日本の歴史学全体の動きから見ますと、かなりかけはなれている、それはそれ、これはこれというような歩み方をしているような感じがする。

宮田　朝鮮が問題にされるときは、方法論的に朝鮮が欲しいというのでなくて、いれないと朝鮮研究者がうるさいから。極端にいっ

てしまえばそういうことがある。（笑い声しきり）

ここで旗田巍は、レトリックの一つとして差別語を使ってしまっている。この表現にする必要が全くない、むしろ別のふさわしい表現が山ほどある箇所に、人を殺してしまうほどの差別表現が使用されてしまっている。しかも、そのことに対して現場で批判的指摘もなく、「笑い声」まであげながら、掲載にまでいたってしまったということは、個人の発言にとどまらない組織の問題と言わざるをえない。実際、刊行から間もなく、この発言は各方面から批判されることになった。

次号の『朝鮮研究』第八一号（一九六九年一月）には、旗田、宮田、編集部一同による「おわび」が掲載された。しかし、それで事がおさまったわけではなく、七月一二日には、神戸より来訪した四名と研究所一〇名による長時間（午後三～一二時）の話し合いと糾弾がおこなわれた。これを受けた措置が次のとおりである[27]。

一、本誌一九六八年一二月号シンポジウム出席者及び運営委員は、本件に関連し、何を考えたか、自分の考えを逐次本誌に発表する。

二、上記一二月号は読者のみなさんに御返品をお願いする（具体的措置については追ってお知らせします）。

三、提起された問題に照らし、運営委員会は、本誌に発表された諸論文などの検討を行なう。あわせ勁草書房発行の『シンポジウム・日本と朝鮮』の全面検討を早急に行ない、本誌を通じ発表する。

一九六九年七月二八日

日本朝鮮研究所　運営委員会　井上学、小沢有作、梶井陟、梶村秀樹、佐藤勝巳、鈴木秀子、角田玲子、樋口雄一、宮田節子、村松武司

その約束どおり、宮田節子は「差別発言問題と私の反省」を『朝鮮研究』第八七号（一九六九年七月）に掲載した。

私は今混乱している。何をしても、どこにいても、あの青年達の鋭い目が私をみつめている。あの血をはくような声が私を問いつめる。〔中略〕私は朝鮮について、自分の手は汚れている。自分も支配者の一員なのだという「痛み」から出発したつもりでいた。そうしゃべりもし、書きもして来た。しかし私は「自分の手が汚れている」という事の意味を、どこまで深刻に問いつめていたのか。その事実の重みをどこまで見極めていたのだろう。私は「自分の手が汚れている」という事を口にすることによって、あたかも「目覚めた少数者」でもあるかのように思い上っていたのだろう。〔中略〕私はおそらくこれから筆をとる時、いつもこの彼らの言葉が耳の底から聞えて来ることだろう。〔中略〕もっともっとぼろを出し、恥をかく勇気をもちたい。まだまだきれいごとすぎると思っている。

日本人であることの「痛み」から朝鮮史の研究を志したはずだったのに、差別に加担してしまったことへの反省、それをどんな自己批判のことばにしても、書いたその場でそれが不十分であると感じられてしまうということが、率直に述べられている。

このころの宮田は、精神的にも身体的にもかなり限界に近づいていたように思われる。宮田は次のように回想している[4]。

もうその頃になりますと、一段と雑誌は売れなくなるし、ラーメン屋の二階にもいられなくなって、ついには〔事務所も〕佐藤〔勝巳〕さんの家の玄関、二畳かなんかの玄関に。ちょうど私も差別糾弾を受けてたころ、妊娠してたんです。つわりと糾弾で、私もちょっとたいへんだったわけですけど。一九七〇年の三月に長男を出産しまして、大体、私の日本朝鮮研究所における活躍…、活躍っていうか、それは一九七〇年をもって終わって……

宮田節子の『朝鮮研究』編集代表人は一九六九年八月号までで終わり、佐藤勝巳にバトンタッチした。一九七〇年一月には事務所もたたみ、佐藤勝巳邸へ移ることになった。こうして、宮田節子の日本朝鮮研究所で

の活動は幕を下ろした。

おわりに

以上、一九五〇年代後半の「朝鮮への初恋の季節」にはじまり、傷を負いながら、それまでの活動に区切りをつけることになった一九七〇年までの宮田節子の歩みを追ってきた。以上をふまえて、最後にあらためて朝鮮史研究者・宮田節子の重要な研究スタンスをまとめてみたい。

この作業を通じて、やはり日本人としての「痛み」、単に知識としてだけではなくある意味で身体化された責任感覚とでもいうべきものからはじまる朝鮮史研究、これが宮田節子を突き動かしてきたものだと考える。それが、中国革命を支持して内在的理解を深めようとする中国研究者や、人民の解放を夢見る左翼でさえも抱え込んでしまった朝鮮蔑視を鋭く批判し、克服していこうという姿勢にもつながった。そのために宮田は、周りの志を共有する研究者や活動家らとともに、まず日本人の朝鮮認識の批判的検証を進めていった。

そうした姿勢のもと、宮田は三・一運動を中心とした朝鮮独立運動の研究からはじめ、さらに日本の朝鮮植民地支配政策の解明をおこなっていった。そこには、史料のある日本、植民地支配政策担当者が引き揚げてきている日本でこそおこなうべき研究がある、という使命感があったと考えられる。その横で展開されていたのが日韓会談反対運動であり、宮田らは、階級闘争や東西陣営論が運動の主流の論点であったところに、植民地支配責任の追及という課題を加えるのに貢献していた。そこに史料があるから研究するのではなく、そこに日本人の責任として追求すべき課題があるからこそ、激動の情況にコミットしながら朝鮮史研究を進めていった。

ただ、そのような信念を実行に移す際の宮田節子の姿は、決して悲壮な面持ちではなかった。朝研のシンポジウムでも、元朝鮮総督府高官たちや若手研究者が集う近代朝鮮史料研究会でも、さまざまな場において、宮田は、聴く人であり、語る人であり、その場をまとめる人であった。現代であれば「コミュニケーション能力」とでも呼んだかもしれないが、横で見ていた姜徳相が「人をうまくまとめる天才」[28]と言うほどの立廻りぶりで、さまざまな場をまとめていった。

それは、宮田が自身を決して職業的研究者としては位置づけなかったこととも関連していると思う。宮田は次のように語っている⑦。

> 私は一度も朝鮮研究で食べたことはありません。〔中略〕そういう普通の日本人が朝鮮に向かい合ってどうなるか。そういった生活全部をくるめて『母が子に語る朝鮮近代史』のようなやさしく読めるものを書きたかったのですが……、そのためにも普通の市民でいたかったのです。

職業的研究者としてではなく、宮田は「普通」の生活者として朝鮮史にコミットすることをモットーとしていた。その語りには既にいくつもの批判が込められていると私は思う。日本の朝鮮植民地政策を論ずるにしても、観念的で思弁的で知識人にしか分からないようなことばではなく、「普通」の日本人がその理不尽さを理解でき、自らの問題として朝鮮史に向き合えるようなことばで表現できるようになるまで、宮田は史料を読み込み、元総督府高官の言い分を聞いた。頭だけを回して研究するのではなく、足を動かし、手を動かし、多くの人々と対話しながら、研究を進めた。「〇〇大学教授」ではなく、朝鮮史研究者・宮田節子として語り、ものを書いた。宮田自身は、あえて「女性」という立場性を強調して語る方ではなかったように思うが、生活的な感覚から乖離した男性研究者たちへの批判も宮田の姿勢にはあった。そのような（男性）知識人批判を含む植民地主義批判としての朝鮮史研究のスタンスは、アカデミックな業績主義の圧力にさらされ、ともすると問題意識をおきざりにしてしまう今日の情況においてこそ、あらためて学ぶべきものである。

1 この講演は、私が編集した『２００３年度 東京大学コリア・コロキュアム講演記録』（東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室編集・発行、二〇〇四年）に収録されている。

2 宮田節子は自らを含む世代の研究者を、戦後朝鮮（史）研究の「第一世代」と呼んでいる③④。一九三二年生まれの姜徳相、一九三三年生まれの大村益夫、一九三四年生まれの武田幸男、一九三五年生まれの宮田節子、梶村秀樹、一九三六年生まれの北村秀人、菅野裕臣らのことを指している。

3 宮田節子「８・１５と朝鮮とわたし」『朝鮮研究』三一、一九六四年八月。なお、二〇二四年六月の追悼集会の報告は、三名が連携しながらも別々に準備したため重複もある。特に１・１の部分は河かおる氏の報告と重なる。合わせてお読みいただきたい。

4 宮田節子「三・一運動について」『朝鮮近代史料研究集成』三、一九六〇年、四頁。この一文は河かおる報告に全文が掲載されている。

5 庵逧由香・宮本正明による宮田節子インタビュー（二〇〇九年三月）記録より。

6 朴慶植編で栄光社から一九五四年に発行された冊子と思われる。

7 ここに挙げているのは宮田節子が回想などで論及している範囲での朝鮮史研究のグループである。これらに先行する最大の動きが在日朝鮮人運動における歴史研究である。朴慶植、姜在彦らによる近現代史を中心とした通史『朝鮮の歴史』（三一書房、一九五七年）などは、そのひとつの成果である。朝鮮総聯の結成（一九五五年）、朝鮮研究所の活動（一九五六～五七）、帰国運動の開始（一九五八年）、帰国事業の開始（一九五九年末～）など、激動のなかで朝鮮史研究が展開されていた。『朝鮮史研究会会報』第一号（一九五九年八月）で紹介されている関東の研究会に、「高麗史食貨志をよむ会」「李朝実録をよむ会」「朝鮮史料研究会」に加え、「在日朝鮮科協歴史部会」（朝鮮会館、月一回）が挙げられているのは、その流れを汲んでいる。姜徳相によれば、同部会ができたのは朝鮮近代史料研究会ができた少し後のことで、金鐘鳴が中心となって、朴慶植、李進熙、徐台洙、朴宗根、呉在斗、金己大、権寧旭、金鍾国、琴秉洞、姜徳相らが参加した（姜徳相聞き書き刊行委員会編『時務の研究者 姜徳相』三一書房、二〇二一年、一三七頁）。

8 前掲『時務の研究者 姜徳相』一〇五～一〇六頁。

9 宮田節子「共和国に帰った金さん」『季刊三千里』一八、一九七九年。

10 宮田節子「山健さん」『山辺健太郎 回想と遺文』みすず書房、一九八〇年。

11 宮田節子「朝鮮史研究への先駆的問題提起」『朝鮮研究』五九、一九六七年二月。

12 詳細は拙稿「日韓会談反対運動と植民地支配責任論：日本朝鮮研究所の植民地主義論を中心に」『思想』二〇一〇年一月を参照。また、井上學・樋口雄一編『日本朝鮮研究所初期資料』全三巻、緑陰書房、二〇一七年も参照。

13 宮田節子「梶さんと出逢ったころ」『梶村秀樹著作集・別巻 回想と遺文』明石書店、一九九〇年。

14 宮田節子「研究活動レポート２ 連続シンポジウム「日本における朝鮮研究の蓄積をどう継承するか」の構想」『所内報』三、一九六三年。

15 宮田節子「シンポジウム「日本における朝鮮研究の蓄積をいかに継承するか」」『朝鮮研究』三四、一九六四年一一月。

16 金鍾国が「いくら日本人の朝鮮観の変革だとか、植民地支配の責任なんていっても、日本人はちっとも、変わりゃしないと思うよ。そんな事より一番大事なのは、我々朝鮮人が統一された立派な祖国を作る事だ。日本人が馬鹿にしようにも馬鹿に出来ないすごい国を作ればいいのだ」と言うのに対し、宮田が「勿論朝鮮人としては、金さんのおっしゃる通りだろうけど、じゃあ日本人はその時まで何もしないでいろというわけじゃないでしょう。日本人は日本人としてやる事がある」と答えた。釈然としない風の金鍾国について、「そこには絶望に近いまでの、きびしい日本人に対する批判がこめられていた」と宮田は理解していた（前掲「共和国に帰った金さん」）。

17 宮田・前掲「梶さんと出逢ったころ」。

18 『所内報』三、一九六三年。

19 「「日朝友好運動の意義と役割」についての討論経過」『朝鮮研究』七六、一九六八年八月。ただし、のちに問題になる第四講はこの時点では所内で全く問題になっていなかった。

20 参考までに、日韓会談反対運動で必要な知識を大衆に提供するという点では、「連載 朝鮮人」『日本読書新聞』（一九六三年九月～一九六四年一一月）も注目される。宮田節子は一九六三年一一～一二月にかけて「日韓併合」「三一運動」「文化政治」「定平農民運動」「皇国臣民化運動」の執筆を担当した。これはのちに『ドキュメント朝鮮人：日本現代史の暗い影』（日本読書新聞出版部、一九六五年六月）として単行本化された。

21 朝鮮文化史刊行会『文化史刊行ニュース』一（一九六六年二月）、二（一九六六年三月）、三（一九六六年五月）などによる。

22 日本朝鮮研究所『朝鮮文化史 下』朝鮮文化史刊行会、一九六六年、八頁。

23 宮本忠人「寺尾五郎氏の「民族関係」論がゆきついたところ」上・下『赤旗』一九六七年二月二四～二五日。

24 『朝鮮研究』六八、一九六七年一二月。

25 前掲『日本朝鮮研究所初期資料』第二巻には、一九六七～六九年の朝研内部の貴重な「運営委員会資料」が掲載されているが、残念ながら資料作成年の推定が誤っているとおぼしき箇所が多数見受けられる（したがって同資料集第三巻末尾の「日本朝鮮研究所のあゆみ 一九六一～一九六九年」の最後の三年も修正が必要である）。まず部落差別発言問題が言及されていれば『朝鮮研究』八〇号（一九六八年一二月）以降（すなわち一九六九年）と判断される。また『朝鮮研究』の目次・内容や運営担当からも特定を推定することが可能である。これを踏まえると次のように変更すべきである。

【「1968年」に入れられている資料】最初の「第1回運営委員会で決ったこと 2月28日」から「別紙」まで（二一九～二二四頁）は一九六七年の資料である。「第9回運営委員会の決定 7月9日」から「研究所再建案 梶村秀樹」（二二五～二五八頁）は一九六九年の資料である。

【「1969年」に入れられている資料】「第4回運営委員会議題 4月12日」から「[別紙]拡大編集会議資料」まで（二六九～二八八頁）、「第11回運営委員会検討資料 7月26日」から最後の「第18回運営委員会決定 10月9日」まで（二九八～三二二頁）は、全て一九六七年の資料である。

今後、同資料集を利用する場合は、以上の点に留意されたい。

26 前掲『日本朝鮮研究所初期資料』第一巻に転載されている。

27 「本誌差別発言問題の経過と私たちの反省」『朝鮮研究』八七、一九六九年七月。

28 前掲『時務の研究者 姜徳相』一一〇頁。

◆宮田節子の朝鮮近代史研究

庵逧由香（立命館大学、朝鮮史研究会関西部会幹事）

1　はじめに

立命館大学で教鞭を取っている、庵逧由香と申します。私は東京で大学院修士課程に通っていた時に、早稲田大学の宮田先生の院の授業に、モグリで参加させていただいていました。その時にご一緒していたのが、外村大さん、岡本真希子さん、宮本正明さん、山口公一さん、後藤健一さんなどです。その授業では、私の他にもモグリで他大学から出席していた院生がいましたが、宮田先生には本当にたくさんのことを教えていただきました。今、「宮田先生」とお呼びしていますが、宮田先生は授業では、「どんなに偉い人であっても、研究対象とするならば敬称をつけるべきではない」とおっしゃっていました。ですが、私にとっては実際に「先生」であったので、とりあえずここでは、敬称をつけて呼ばせていただきます。

私は朝鮮近代史の中でも、戦時期の戦争動員を専門としていて、宮田節子先生は私にとっては当時本当に数少ない先達のお一人でした。宮田先生の業績をご紹介するにあたって、その前提となる、近代史研究や戦時期研究の状況について、少しお話しさせていただきます。朝鮮近代史の中でも植民地期の研究は、一九九九〇年代までは日本史を含めて経済史が中心でした。政策史はほとんど研究がなくて、私自身、院生の時には経済史の論文ばかりを読んでいました。それも大変数が少なかったです。南北とも、同じような研究状況でした。例えば韓国では、七〇年代までは植民地期研究は「現代なので研究の対象にならない」と、韓国の著名な農業経済史研究者である金容燮が明言していたくらいです。その近代史研究の中でも、戦時期(一九三七～一九四五年)は、特に研究蓄積が極端に少なく、「研究の空白」だった時期が長いです。

宮田先生は早稲田大学の学部時代に朝鮮史研究に入り、明治大学で大学院に入りました。その後はずっと非常勤講師として教えながら研究を続け、「在野の研究者」として活躍されています。朝鮮史分野では、山辺健太郎や朴慶植など、在野研究者は多かったと思います。

宮田先生の研究は、そうした中で非常に貴重な存在でした。早くから戦時期に対する関心を持ち、このように記しています。「・・・特にこの数年間〔一九八四年当時〕は、あたかも磁石が必ず極北を指すように、本書に収録したこの時期〔戦時期〕、このテーマが、私の関心をひきつけて放さなかった。時には他のテーマで、原稿や報告を依頼されたこともあったが、どうしても心がここから離れなかったのである」（『朝鮮民衆と「皇民化」政策』「まえがき」一頁）。

一九九〇年代当時は、日本の朝鮮近代史研究では、朝鮮語ができなくても研究ができる状況が残っていました。宮田先生も、それほど朝鮮語ができたわけではありませんでした。その理由について宮田先生本人は、次のように話していました。「関連論文が読める程度で良いと思っていた」「〔一九六四年ごろ〕そこで私は、先生方〔ここでは在日朝鮮人の研究者〕が〔韓国に〕行かれる前は、絶対に行きませんと言った。だから会話や語学が苦手だった。韓国に留学するつもりもなかった」（二〇〇九年九月十三日インタビュー記録）。一九八〇年代の民主化までは、分断と軍事独裁政権を否定・批判する意味で、韓国を訪れることが憚られていた時代でした。

今日の報告では、研究上の関心や問題意識の変遷を中心に、宮田先生の近代史研究を整理したいと思います。宮田先生の朝鮮への思い、日本の朝鮮差別への憤り、日本社会に対する問題意識などは、河かおる、板垣竜太原稿にもあると思いますので、ここでは、学術論文として執筆された論文を対象とし、研究者として、研究対象の関心はどのように変遷していったのか、それはどのような朝鮮史（戦時期）に対する認識から

きたのか、という点について、その変遷を時系列で整理したいと思います。(以下、研究史紹介の部分は、文語体で記載します。またここからは敬称はなしとします)

2　三・一運動研究、抗日運動研究

宮田節子の経歴については、配布資料や河かおる・板垣竜太原稿を参照されたい。宮田は早稲田大学(学部)の卒業論文のテーマを「三・一運動」に設定し、執筆した。宮田は友邦協会で史料調査や研究会をする中で、阪谷芳郎文書に出会う。そのことを、以下のように語っている。「阪谷文書がきたない風呂敷に包まれてころがっていた。本当にそれをみた時の感激は今も忘れない。」「資料を通いながら読んでいるうちに、イメージが沸いてきて、夏休みが終わる頃には三〇〇枚くらいの原稿になっていた」(二〇〇九年インタビュー記録)。

①　(一九六〇)「三・一運動について」(『朝鮮近代史料研究集成』第三号、朝鮮近代史研究会)

この論文は、卒業論文を公刊したものである。おそらく、最初の公刊された論文と推察され、八十頁の大作でもある。「はじめに」では、宮田の敗戦時(小学校四年生)の朝鮮体験、朝鮮人に対する怒りの思い出が書かれている。そうした経験をもとに、「植民地を持った事によって、日本は、日本人は、いかに変質していったか」「私にとっては―変質の残滓を浴びていると思われる日本人として―その事がより重要であり、おそらくは一生の課題なのです」(四頁)と、問題意識について書いている。この言葉通り、宮田はこの点を「一生の課題」としてきた。

この論文では、三・一運動の原因を①経済史的、②政治史的、③民族独立運動史的観点から分析した。後に宮田が書いた研究動向紹介の文章では、この論文の自己評価を書いている。そこでは、山辺健太郎の関連論文と宮田論文(一九六〇)をあげて、「〔三・一〕運動の実体については、かなり詳細に研究されている。しかし三・一運動の経済的背景、地方における運動、特に海外における様々な朝鮮人組織との関連、運動の性格規定など、一層研究が深められなければならないだろう」(一九六六「朝鮮近代史研究の動向」一七五・一七六頁)。

②　(一九六三)「三・一運動の実態とその現代的意義」(『歴史評論』No.一五七)

この論文では、一九六〇年の論文の一部を抜粋・整理して掲載している。その意図については、「日本の弾圧の実態により多くの紙数をさいた」(七六頁)と説明している。「はじめに」では、「日韓会談」反対運動の中でさえ植民地支配の責任という観点が脱落していることを痛烈に批判した。それどころか「一般の日本人の中では、日本が朝鮮を植民地として支配したという歴史的事実すら、公然とは通用しないのが実情である」(六六頁)と批判している。

また、この論文から、「同化政策」への関心が見られ始める。特に宮田は「植民地支配の責任にこだわり」を強く提起しており、「日本が植民地を持ったという事実が、日本人をここまでゆがめてしまっているのである。それは日本の朝鮮支配が「同化政策」と呼ばれるもので、朝鮮人の民族性を完全に抹殺し、朝鮮人を亜日本人にすることを、その根本方針としたためと思われる」(六六頁)と記している。この点は、一九六〇年の論文にはない視点であった。この頃から、「同化政策」を研究テーマとして明確に打ち出しはじめたにように思われる。

一九六〇年代には上記論文の他に、「資料紹介　三・一運動研究における阪谷文書の意義」(『駿台史學(明治大学史学地理学会)』一四号、一九六四年)といった研究状況の紹介や、阪谷文書の資料一覧および主な内容を紹介する、資料紹介の文も発表している。また、一九六九年には三・一運動以外の抗日運動を扱った論文、「朝鮮の植民地化と反帝国主義運動」『(岩波講座世界歴史 第二三　近代一〇　帝国主義時代Ⅱ』岩波書店)

も発表している。この論文では、反日義兵闘争（乙未義兵闘争が中心）を、愛国啓蒙運動と一連のつながりで分析し、三・一運動への展望を示した。

3　朝鮮近代史研究の課題に対する認識

宮田節子は常に、朝鮮近代史研究を強い問題意識をもって、自らの研究テーマとして課してきた。そのことは、「朝鮮近代史研究の動向」（『駿台史學（明治大学史学地理学会）』一九号、一九六六年）で、明確に提示されている。例えば、戦後の朝鮮近代史研究については、「江華島条約以来の日本の朝鮮に対する侵略と植民地支配の責任をどう考えるか等、一日本人としての思想そのものを問われる問題を内に含んでいる」（一六三頁）とし、日本人として植民地支配責任を前提として研究に向かう「義務」や心構えについて述べている。また、「開国」から日清戦争までの南北朝鮮での歴史研究については、「朝鮮の解放は朝鮮人研究者にとって、単に自国の歴史を研究する客観的条件が回復したのみでなく、研究者が朝鮮人としての民族的主体性を確立しようとする自己変革の内的要求に支えられ、その研究成果はめざましいものがある」と評価した。特に、当時の日本の朝鮮研究の動向も踏まえ、「北朝鮮」[2]の研究に注目していた。六〇年代には資本主義萌芽論が注目を集めていたが、これらの研究が朝鮮では、自国の歴史の社会発展の合法則性を究明することに力点があることを強調している。「李朝末期の封建社会の解体の中から、資本主義的生産関係の要素乃至萌芽が内在的に発展し始めていたということを、科学院歴史研究室を中心に組織的・体系的に取り組んで」いる、としている（一六六頁）。

4　「農村振興運動」と「朝鮮農地令」研究（朝鮮の一九三〇年代農政研究）

宮田は、一九六〇年代には、朝鮮近代史研究における「日本人の責務」としての「植民地支配責任」を説く一方で、植民地研究の実証研究の少なさも、課題として提起し始める。それを自らの課題として書いた論文テーマが「農村振興運動」と「朝鮮農地令」であった。

①　（一九六五）「一九三〇年代日帝下朝鮮における「農村振興運動」の展開」（『歴史学研究』二九七号）

この論文で宮田は、朝鮮近代史における「初歩的な実証研究」の必要性を認識しつつ、当時の日本近代史で依然として大きな研究テーマの一つだった日本ファシズムの問題と関連させ、「農村振興運動」について分析している。日本史研究分野を中心とする日本ファシズム研究では、早くから植民地問題が重要な課題として提起されていたが、宮田も同様の認識を持っていたのである。

この論文の冒頭で宮田は、「私は一九三〇年代の日本帝国主義の朝鮮支配政策の転換を、日本ファシズムの植民地における展開という視角から分析することによって、はじめてこの時期の支配政策の諸側面を、全面的かつ有機的に把握することが可能であり・・〔中略〕・日本ファシズムの本質そのものを、その兇暴な侵略の全構造を解明することが出来るのではないかと考える」（一八頁）と書いている。

また、朝鮮近代史の研究蓄積の少なさについても以下のように言及している。「しかし朝鮮近代史は全くの未開拓地であり・・・朝鮮近代史研究の今日の要請は、『ほとんど真の意味では未知である個別事実のごく初歩的な実証研究』（『』内は、梶村秀樹論文を引用）のつみ重ねの段階である。」一八頁）。梶村秀樹の言を引用したこうした主張は、以後、多くの論文で言及しつづけている。本論文の目的も、「私は本稿において、「農村振興運動」の全体を概観するためのごく初歩的な実証研究を意図した」（一八頁）ことであるとした。

宮田はこの論文で農村振興運動を、立案の三つの要因（①大陸兵站基

地」という「特殊な任務」②経済恐慌による朝鮮農村の窮乏、③小作争議多発による農業危機）と、三つの特質（①春窮退治・借金退治・借金予防、②個々の農家が対象、③「物心一如」の運動として展開（「内鮮融和」））を通じて分析している。

② （一九七三）「朝鮮における「農村振興運動」：一九三〇年代日本ファシズムの朝鮮における展開」（『季刊現代史』二号）

この論文では、日本ファシズムと植民地朝鮮との関わりが、一九六五年の論文よりも明確に示されている。「日本ファシズムの持つ特質が、朝鮮において一層鮮明にあらわれたのではないかと思われる」などである。このように、日本ファシズムの展開における植民地の重要性は、日本史分野も含めて、当時は近代史研究者の間で一定程度共有されていた認識でもあった。一方で、朝鮮史の立場を強く打ち出して、「日帝下においても、朝鮮史の主役は朝鮮人であり、朝鮮総督府の政策さえも、朝鮮の内部矛盾によって規定されていたのである」（五三頁）とも指摘している。

またこの論文でも、「日本が朝鮮の近代をゆがめた、まさにそのことによって、自らも致命的な変質を受けたのではないだろうか。・・・・しかも自らが加害者であることに気づかぬ程、その変質は根深いのである」（五三頁）という、当初からの問題意識を継続させている。また、一九六五年論文からの変化や追加された点としては、宇垣一成の朝鮮統治思想に関する分析、当時の朝鮮農村の現状分析、運動の実態に関わり具体的な個別事例の分析、思想としての「心田開発」への注目と分析、などが挙げられる。この論文では、より実証的に分析が深められた。また、宇垣一成に対する関心も、この論文が嚆矢となっている。

③ （一九七四）「「朝鮮農地令」―その虚像と実像」（『季刊現代史』一二号）

本論文は、「農村振興運動」と同様、当時日本では極めて高い評価が与えられていた「朝鮮農地令」の実証研究を試みたものである。宮田の目的は、「植民地政策が成功裏に行われていた」という日本人の偏見・思い込みを実証的に打ち砕くねらいがあった。「かつての植民地支配当事者の評価が、戦後に朝鮮近代史の研究を志した者にも、かなりの影響を与えていたことは否定できない事実である」「これらは、いかに戦前の評価が、何ら事実の追求が行われないままに、戦後になってもそのまま引きつがれていたかの具体例」（三四頁）でもあった、とした。

宮田は論文の中で、自分自身も「農地令」に対して同様の認識を持っていたことを明かしている。そのため、「改めて自分の中にある「農地令」に対するばく然たる印象を洗い直す必要を痛感」（三四頁）したと言う。「このような研究状況をふまえて、本稿はごく初歩的な実証研究に力点をおき、制定当時から現在に至るまで「進歩的」という虚像につつまれている「農地令」の本質の究明を意図した。」（三四頁）とその執筆目的を明示した。また、制定過程に至る朝鮮農政、地主の反対運動の経緯とその意義、農地令の分析を通じて、地主寄りの内容であった点を指摘している。

5　皇国臣民化政策研究

宮田節子の最もよく知られた著書に、一九八五年に刊行された『朝鮮民衆と「皇民化」政策』（未来社）がある。これは、七〇年代からの既発表論文や新稿をまとめたものであるが、これらの論文から宮田の本格的な「戦時期研究」が始まったと言っても過言ではない。ここでは、書籍ではなく、初出の論文それぞれについて、「皇民化政策」の個別テーマ別に整理してみたい。

5・1　朝鮮人に対する志願兵制度

① （一九七九）「朝鮮における志願兵制度の展開とその意義」（旗田巍先生古稀記念会編『朝鮮歴史論集 下』）（書籍（一九八五）では、ほ

ぼそのまま収録）

本論文は、一九八五年刊の書籍には、ほぼそのまま収録されている。ここでは「皇民化政策」としての朝鮮人志願兵制度に注目し、これについて以下のようにまとめている。「志願兵制度は、一九三七年の日中戦争の展開とともに、すでに早くから朝鮮人を『兵員資源』として渇望していた朝鮮軍の主導の下に制定、展開された。即ち朝鮮人の強靭な民族性に対する不安と焦燥にかられた朝鮮軍は、従来総督府が行なって来たような皇民化政策では、朝鮮に徴兵制を施行することは、『百年河清を待つに等しい』という危機感から、自ら皇民化運動の中核たるべき使命をになって登場して来たのである。それ故当初は志願兵制度を施行することによって、直接そこに『兵員資源』を求めるというよりはむしろ、朝鮮人全体に対する皇民化政策の牽引力たらしめることを意図した。そうすることによってのみ、志願兵制度が朝鮮に『安心して兵役法』を施行するための、真の前提となり得ると考えたのである」（七八頁）。

またこの論文で宮田は、重要な分析視角の提示を行っている。「しかしこのような皇民化政策の朝鮮人の内面に食い入る深まりと日常生活の細部に及ぶ広がりは、同時に朝鮮人の抵抗がより内面的なものに、より日常的なものになって来たことを意味する。それは一見同化と見えるものの中に抵抗を含むという複雑で屈折した様相を帯ざるを得なかったのである」（七九頁）。ここで提示された「矛盾したものを内包した政策」であるという分析視角は、その後の政策分析にも、つどつど見られている。この分析視角は、後の研究者にも大きな影響を及ぼしている。

5・2「内鮮一体」論

① （一九八二）「「内鮮一体」の構造：日中戦下朝鮮支配政策についての一考察」（『歴史学研究』五〇三号）（書籍（一九八五）では、ほぼそのまま収録）

宮田が、三・一運動などの研究初期から関心を持ち始めた「内鮮一体」に関する実証的な分析である。ここでは、「内鮮一体」を植民地支配の基本方針であったと指摘している。また提唱者である南次郎自身の定義によれば、それは「半島人をして忠実なる皇国臣民たらしむる」ことであったと明らかにした。

宮田によると、「内鮮一体」は、体系を持たない政治スローガンだが、単純であるゆえ、さまざまな立場の人々を呑み込むことを可能にした。宮田はさらに、以下のような点を明らかにした。まず「内鮮一体」論には「２つ」あり、①同化の論理としての「内鮮一体」論（日本人側）と、②「差別からの脱出」の論理としての「内鮮一体論」（朝鮮人側）があったことを指摘し、同じ「内鮮一体」論の中に、全く二律背反する論理が包摂されようとしたことを明らかにしている。また、「内鮮一体」は、「日中戦争から太平洋戦争にかけての時期の、朝鮮支配の『最高統治目標』であったばかりでなく、一九一〇年の『日韓併合』以来の日本の朝鮮支配の基本方針であった『同化政策』の持つ本質を集中的に体現している」（一頁）とも指摘している。

5・3　朝鮮人に対する徴兵制

① （一九八二）「皇民化政策と民族抵抗：朝鮮における徴兵制度の展開を中心にして」（鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗 四 一九三一年から一九四五年まで』日本評論社）

この論文は、書籍(一九八五)収録時には、題目を「徴兵制度の展開 ― 太平洋戦争段階における皇民化政策」に変更している。また、「はじめに」「おわりに」の内容をかなり変更している。一九八二年の論文は複数筆者によるテーマ書籍に収録されたものであり、収録書籍全体のテーマに合わせて執筆していたためと思われる。一九八五年の宮田の単著に収録された論文の「はじめに」では、徴兵制を見る視角を新たに整理して提

示しているが、以下の通りである。①志願兵制度制定過程では、徴兵制の施行は少なくとも二～三〇年後と指摘された、②徴兵制度に向けての皇民化政策の展開（＝徴兵制実施）にこそ、この時期の皇民化政策の本質が凝縮されていると考える、③徴兵制施行で朝鮮の青年に無差別に銃を持たせるためには、彼らの「無意識の構造」まで皇民化しなければならない。

そして戦時期における朝鮮人の「抵抗の在り方」についても、非常に重要な指摘をしている。「このような皇民化政策の極限状況の中では、朝鮮人の抵抗はたんに表面に現れた闘争や運動だけでなく、朝鮮人が朝鮮人であり続けることそれ自体が、あるいは朝鮮人を朝鮮人たらしめている基層文化そのものが、あるいは民衆の日常生活の営みそのものが、皇民化政策を阻む最も大きな要素となって来たのではないだろうか。そのような民族矛盾のあり方をも具体的に検討したい」（九六頁）。また、後に批判の対象となるが、朝鮮での徴兵制の実施は、朝鮮に総督府当局にさえ「驚愕の念」を持って受け取られた、と分析した。

5・4　朝鮮民衆の日中戦争観

①　（一九八五）「朝鮮民衆の日中戦争観―「流言蜚語」を通して―」（一九八五『朝鮮民衆と「皇民化」政策』収録）

この論文では、当時のラジオ・新聞などマスコミの普及率の低さを分析し、一般の朝鮮人の情報伝達方法として当時は一般的かつ重要だったと考えられる「流言蜚語」という名の民衆相互の口コミに注目した。「流言飛語」は当時、朝鮮総督府傘下の機関（警察、裁判所など）が収集しており、当時の社会情勢や朝鮮人の認識・不満の把握に利用されていた。ここで宮田は、「流言蜚語」に現れた、戦争と旱害、戦争の実態についての把握、日本の敗戦願望、総督府政策への非協力などを分析し、朝鮮民衆がかなり正確に当時の情勢を認識していたと明らかにした。

5・5　「創氏改名」研究

①　（一九九〇）「「創氏改名」について―上下―」『歴史評論』

一九八二年にいわゆる第一次「教科書問題」が起こったときの文部省（当時）見解に対し、『歴史評論』にて宮田は簡単な反論を掲載している（一九八二「三・一運動、強制連行、創氏改名」『歴史評論』三九一）。それがきっかけで、宮田は「創氏改名」に関する事実を明らかにする必要性を痛感したという。二回に分けて掲載されたこの論文では、創氏改名の総督府の政策意図、実施過程、朝鮮人の批判や反対などを分析した。その際に、創氏改名と徴兵制実施との関係に注目している。「総督府の創氏改名政策の制定・実施の真の狙いは、「徴兵制の施行と深い関連を持っていた」（一〇九頁）、「したがって朝鮮における徴兵制の施行とは、単なる制度の施行のみでなく、皇民化政策の究極の目標としての象徴的な意味を持っていたのではないかと思う」（一〇九頁）。

また、それまでの論文では出されていなかった新たな問題意識として、「日中戦下の朝鮮で展開された一連の皇民化政策は、今や従来のような並列的、概説的な理解から一歩進めて、各政策の相互関連、構造的把握をする時期に来ていると思う」「その際何よりも「皇国臣民」とは何かというその内実が問われなければならないだろう。」（一〇九頁）というように、「皇民化政策の構造」の解明という点が強調されている。

②　（一九九二）共著『創氏改名』（宮田節子・金英達・梁泰昊）

同書で宮田は、「創氏改名の時代」、「創氏改名の実施過程」を担当している。大衆向けにわかりやすく解説している内容で、共著者らとの鼎談も掲載されている。

5・6　「皇民化政策」の構造

①　（一九九一）「皇民化政策の構造」（『朝鮮史研究会論文集』二九）

宮田は、上記1～5の研究を経て、それら政策の有機的関連について整理しており、「皇民化政策」に関する集大成的な論考ともいえるものである。特に一九九〇「創氏改名について」での自らの問題提起を受けて書かれたと思われる。

この論文で宮田は、「皇国臣民」の人間像を、南次郎総督の懐刀とされ政策推進の要となった塩原時三郎の思想や行動を通じて分析している。まずは「日本の朝鮮支配政策の基本は、同化政策であり、それは時代を下るにしたがい一層強化され、ついに日中戦争以後は、その極限化である「内鮮一体」が提唱され、その実現のために、様々な皇民化政策が展開されるに至った」（四一頁）と整理した。そして、「皇民化政策の三本の柱」として、志願兵制度、第三次朝鮮教育令の改正、創氏改名を挙げている。その上で、「内鮮一体」とは、朝鮮総督府にとっては「半島人をして忠良なる皇国臣民たらしめる」（南次郎）ことであり、朝鮮人を皇国臣民たらしめる全ての政策が、皇国臣民化政策と総称である、と定義した。

また、「皇国臣民」を造語した塩原時三郎学務局長に注目し、その思想から、「皇国臣民」とは「天皇のために笑って国に殉ずる人間」すなわち「皇軍兵士」であった、とまとめている。こうした分析をもとに、「皇民化政策は、徴兵制の実現（それは又窮極の皇民化された朝鮮人の象徴）をめざして、このような有機的関連をもって展開されたのである」（五五頁）とした。

ただし、全体の論旨としては、軍部の「朝鮮人の徴兵制に対する強い関心」から、兵員資源としての朝鮮人への渇望となり、それが朝鮮人に対する皇民化政策の強化につながった、としている。また「皇民化政策の具体的な達成の一つは、徴兵制の施行にあった」（五四頁）としており、「象徴としての徴兵制」を強調し、「皇民化政策は、徴兵制の実現（それは又窮極の皇民化された朝鮮人の象徴）をめざして、このような有機的関連をもって展開されたのである」（五五頁）としている。つまり、三本柱の政策含め、朝鮮人に対する徴兵制実現に政策が収斂していく流れを提示している。

5・7　批判と論争

宮田の研究に関わり、ここでは二つの批判と論争について、紹介したい。

① 「徴兵制」に関する樋口雄一による批判

樋口雄一は、著書『戦時下朝鮮の民衆と徴兵』（総和社、二〇〇一年）で、以下のように宮田の見解を批判している。「（宮田は）総督府は徴兵の事実を事前に知らず、総督府の意思を超えて決定されたものであったと説明している。・・・しかし、以下の理由で朝鮮総督府は知らなかったわけではない。①準備調査と極秘にではあるが総督府として対応、事前に同意・実行。②天皇の英断に対して「驚愕」する必要。③日本軍の朝鮮人徴兵検討は関係者の間では公然の事実」（二九頁）であった。また、「徴兵準備については軍の独走のみではなく軍と総督府組織の協力体制の中で推進準備され、基本的な方向づけが行われていた。少なくとも総督府が予告無く、突然の発表であるとしたのは徴兵発表の時期に付いて、或いは日程について知らなかったかもしれないという程度にすぎない。総督府の意向を無視して徴兵の発表が行われたのではなく、合意とそれなりの準備が行われていたと言えよう」（三〇頁）。これに対する宮田の反論は、管見の限りでは、文章となったものは見当たらなかった。

② 「創氏改名」に関する水野直樹との論争

宮田・水野の論争は、朝鮮史研究会例会で行われた永島広紀の水野直樹『創氏改名』（岩波新書、二〇〇八年）の書評（二〇〇九年二月関東部会例会）での、宮田節子の「長い発言」からはじまっている。この例会には著者の水野も参加していたとみられるが、のちに『朝鮮史研究会会

報』一七七号（二〇〇九年九月発行）では、宮田節子、水野直樹の両名が「投稿」する形で、誌面討論が行われた。

まず、宮田節子「投稿　水野直樹氏への質問」で宮田は、水野の「創氏改名」研究に対し、「創氏改名の真の狙い」を、「朝鮮人を「血族中心主義」から脱却させて「天皇を中心とする国体」の概念、「皇室中心主義」をうえつけること」としている点に疑問を表明している。その根拠資料が『キング』と中央朝鮮協会での講演であることも批判した。そして、「私は創氏改名は徴兵制と関連があったと思っている」とし、その根拠については、南次郎総督自身がそう発言している点を挙げた。朝鮮と台湾との違いについても、「徴兵制とは関係ないという文脈の中での〔水野氏の〕発言があった」（一六頁）ことを指摘した。

これに対して水野は、「投稿　拙著『創氏改名』に対する永島・宮田両氏の批判に答える」の中で、以下のように回答している。「拙著に対する宮田氏の批判は、創氏改名を徴兵制との関連でとらえていないという点にある。・・・・宮田氏が創氏改名を徴兵制との関連で把握すべきだと主張されるのは、どのようなことを意味しているのであろうか」「明確でない」（二二頁）。そして、「総督府当局の創氏改名政策が徴兵制実施を第一の目的にしていたと考えることは、それを示す資料がないだけでなく、徴兵制の条件整備の問題を考慮に入れると現実的でもないといわねばならない」（二三頁）。またさらには、徴兵制実施決定後にその条件整備として行った戸籍整備では、創氏改名による名前の書き改めが逆に手続きを面倒にしたことも言われていると指摘した。その上で、「創氏改名を徴兵制との関連でとらえるべきだとするなら、そのような理解に立たなければ明らかにし得ない問題、あるいは見逃してしまう重大な問題が何であるかを示す必要があるが、宮田氏の文章ではそれが示されていないと思われる。むしろ逆に徴兵制との関連を強調することによって、創氏改名をめぐる他の諸問題が軽く扱われることになるのではないだろうか」（二三・二四頁）と反論した。

この論争自体は、ここで終わっているように思われる。しかし、創氏改名と徴兵制との関係をめぐっての議論での水野の反論は、皇民化政策研究全般に対しても言えることではないかと考えられる。上記で見てきたように、宮田の「皇民化政策論」は、政策の３つの柱を軸に、すべての政策が「徴兵制に収斂していく」ことが描かれている。宮田の研究を引き継ぐ立場にある研究者として、筆者は個人的には、皇民化政策が収斂していった先は、徴兵制ではなく、朝鮮における総動員体制の構築にあった、と考えている。全ての戦時期の政策が、「目的」「象徴」としてであっても、宮田のまとめたように「徴兵制に収斂していった」のかについては、今後検討されるべき課題であると言える。

６　宮田節子が朝鮮近代史研究で目指したもの

上記では、宮田の主な研究をテーマ別に紹介した。ここに含まれない研究業績は、通史の執筆、史料集の編纂と「解説」など、いくつもあるが、ここでは省略する。以下では、筆者なりの宮田節子の朝鮮近代史研究評をまとめてみたい。

①　朝鮮近代史、特に戦時期研究のパイオニア

宮田節子は、研究蓄積の少ない朝鮮近代史、さらにほとんどなかった戦時期研究で多くの重要な成果を出してきた。宮田本人にはその自負もあり、より積極的に戦時期研究にも取り組んでいったのであろう。宮田によって提起された「皇民化政策」という枠組みや、その政策が「矛盾を内包しながら策定・展開した」という研究視角は、その後の植民地研究で、現在に至るまで、日本・韓国で大きな影響を与えている。これだけ明確にその構造を描き出した研究は、今後の戦時期研究にとっても、大きな礎石となる研究成果であると言える。

②　「使命」としての朝鮮近代史研究

宮田は早くから「日本人として朝鮮近代史を研究する必要性」「日本人が朝鮮近代史を理解する必要性」を痛烈に自覚し、その実践として、朝鮮近代史研究を行ってきたという側面もある。それは具体的には、植民地支配責任として自らの研究への取り組みを「使命」であると考えてきたであろうし、この点は、実証研究が少ない当時の現状の中で、「先行研究のない課題」への取り組みを率先して行ってきた研究業績からもうかがわれる。

③ 史料・聞き取り・交流を通じての豊富な朝鮮近代史のイメージ

しかし一方で宮田の研究は、収奪や支配性のみを強調して結論づけるだけのものではなく、当時の歴史イメージが見えてくるような実証性も持ち合わせていた。それは、宮田が学生時代からの在日朝鮮人研究者との深い交流や、朝鮮近代史料研究会での多くの総督府政策担当者らへの聞き取りや議論、そしてそこに保存されていた膨大な史料の読解、朝鮮史研究会例会、朝鮮学会など諸学会出席などを通じて形成された、植民地朝鮮の具体的かつ豊富なイメージが研究の土台になっているからこそ、だと考える。

④ 「人」「民衆」を中心とする研究視角

宮田は、「私は、日本の支配思想の研究をしても、その後ろにいる朝鮮人の顔が見えるような論文を書きたいというのが唯一の願いであった。具体的な民衆を思い浮かべなら、研究を行うべき」（二〇〇九年インタビュー記録）と語っている。宮田の研究テーマは、常に農民や一般の「民衆」を対象とした政策を対象としていたことからも、そのことが伺える。また民衆を思い浮かべながら研究を行ってきたからこそ、政策分析がより実証性をもって描かれていたのであろう。

⑤ 「皇民化政策」への関心の奥底

宮田はなぜ、皇民化政策が「矛盾を内包する」、それが「同化と差別の複雑な混ざり合い」である、という極めて鋭い、優れた分析が可能だったのか？筆者は、以下の文章を見たとき、その理由が初めて理解できた気がした。それは、一九八五年の『皇民化政策と朝鮮民衆』の「はじめに」で書かれた内容である。「私がこの問題にひきつけられて来た、真意は、『生きた資料』＝在日朝鮮人の友人たち」がいたから、としつつ、「この友人たちとの出逢いによって、私は朝鮮に関心を持つようになった。・・・彼らはほとんど、この『皇民化時代』に人間形成を行っている」「昼間は『民族の主体性』を弁じながら、一度、酒が入ると『軍歌』しか歌えない友人達。何かの折に、つと口をついで出て来る『教育勅語』、『戦陣訓』、歴代天皇の名・・・・。このような友人達との、三十年近いつき合いを通して、私は彼らをそこまで『皇民化』した、その時代のことを知りたいと思うようになった。彼らのことをもっと理解したい。出来ることなら、彼らの心のひだにまで入って行ってみたいという私の切なる願いの一端が、つまりこれらの論文なのである」（同上書、三頁）。

朝鮮近代史、特に植民地期研究では正直、研究者含め、鄭泰憲のいう「原始的収奪論」、つまり、植民地支配政策は日本が一方的に収奪し、その下で朝鮮人民衆は収奪対象の被害者という面のみを強調する見方が、存在してきた。今でこそ、支配・被支配の関係性を多面的に捉えようとする研究は、一般的になりつつある。しかし宮田の研究がでた八〇年代は、韓国では近代史の実証研究がようやく始まり、民族解放運動史に研究の総力が注がれていた時期で、まだこうした視点は受け入れにくいものだった。

しかし宮田は研究の最初から、皇民化政策の、ひいては日本の植民地支配政策の最大の矛盾は、それを受けた人々の内面に、その矛盾が刻まれてしまったことであることを見ていた。そして、このことが、宮田の皇民化政策研究の、原点になっている。

⑥ 朝鮮史研究全体の発展を願う情熱、後進の研究者への愛情

宮田節子は特に、若手研究者には、自分が収集した貴重な資料や論文

を、惜しげなく、自ら進んで提供していた。若手研究者に会うと、必ず関心分野を聞いて、「そのテーマならね、こんな資料があるのよ！」と、嬉しそうに話しかけている姿を、今でもよく覚えている。九〇年代終わりごろまでは、今のようにインターネットもそれほど普及しておらず、史料は必ず自分の足でコピーを取りにいかねば手に入らない時代であった。そうした中で、朝鮮史研究は、研究分野全体に愛情を持ち、後進を育てようという意識が全体として非常に高い分野ではある。他の分野では、史料を一人で抱え込もうとする研究者も少なくない。宮田節子は特に、積極的に後進の育成に関わろうとしていた。これこそ、私たちが今後も、積極的に受け継いでいかなければいけない遺産の一つだと思う。

[1] 二〇〇九年九月一三日、庵逧由香・宮本正明による自宅インタビュー記録。本インタビューは民族問題研究所の委託事業により実施され、公表された報告書は韓国語のみ。記録は日本語版報告書(未公開)による。以下、「二〇〇九年インタビュー記録」とする。

[2] ここで「北朝鮮」は、現在の日本で使用されている用語とは異なり、当時一般的に朝鮮史研究者が使用していた「南朝鮮」「北朝鮮」という「地域名称」を前提に使われている。

寄せられた思い出

宮田さんは、とにかく敬愛する大先輩です。お亡くなりになる前にしばらくお会いすることがなくて、残念でなりません。

一九九四年、一九九五年に大阪外国語大学で宮田先生の集中講義を受講しました。内容はご著書『朝鮮民衆と「皇民化」政策』でのご研究をより具体的に解説するものでした。今にして思えば、その集中講義で感銘を受けたことが、研究に進む原動力となっている気がします。

大学二年で早稲田大学の「東洋史特論」を受講したことが、人生を変えました。初回の『朝鮮近代史を学ぶということは、日本近代史を裏側から見るということである」という言葉にノックアウトされ、不真面目な学生でしたがこれだけは皆勤で取り憑かれたようにノートを取り、休学して韓国に語学留学まで行ってしまいました。非常勤ながら卒論主査としてもお世話になり、卒論の内容は不出来だったものの、大きな期待の言葉もかけて頂きました。今も朝鮮半島研究の端くれにいる者として、当時の先生の期待に応えられているか自問する日々です。

一九八四年、教育学部生でありながら、第一文学部での「朝鮮史特論」の講義を受講しました。大学四年ということもあり、あまり真面目な学生ではありませんでしたが、講義後、質問に行ったら喜んでいただき、近くの喫茶店でコーヒーをごちそうになりました。

朝鮮史研究会幹事（関西部会）、朝鮮学会常任幹事及編輯委員の長森です。宮田先生には一九五〇年代からの朝鮮学会会員、その後は常任幹事及編輯委員、顧問として、六十年以上の間、学会の発展に多大なご尽力とご貢献をいただきました。朝鮮学会創設者である天理教二代真柱中山正善先生、京城から引き揚げてこられた往年の大家たち、一九六〇年代初頭に来日された李丙燾先生をはじめとする韓国の碩学たちとの思い出話を臨場感たっぷりにお話しいただいたことを鮮明に思い出します。一九九七年の第四八回朝鮮学会大会で公開講演をされたのは、宮田先生が朝鮮史研究会会長をおつとめのときでした。先生はいつも若い研究者の将来を考え、励まし続けてくださいました。あらためて感謝を申し上げるとともに、次世代につないでいくことの大切さを再認識しています。

宮田先生が最後に月例会に参加された日のことを、昨日のように覚えています。その日、先生は遅れて例会会場にお越しになったのですが、来る途中転倒されたようで手に血が滲んでいました。一秒でも早く会場に着きたいという一心だったのだと思います。私は受付をしていたのですが、手や服に血がついている先生を見ていられなくて、ウェットティッシュで拭いて差し上げたりしました。宮田先生は何度も「ありがとう」「ありがとう」と仰っていました。その様子が心配でもあったので、糟谷先生と例会終了後、宮田先生を駅まで送りました。本郷から下り坂を歩いて駅まで向かったので、私が先生を一生懸命支えて歩き、千代田線に乗って帰る宮田先生をお見送りしたのが、最後になるとは思いもしませんでした。女性で朝鮮史をそれも植民地期を研究されてきた宮田先生が切り開いてきた道があるから、今の私があるのだと思います。宮田先生に心から感謝の気持ちを伝え、私も次につながる道を切り開いていきたいです。

周りの研究者より先生のことをお聞きしました。

研究会に参加すると、若かった私にも丁寧に対応して頂きました。著

名な先生なのに、と当時は感激でした。

他大から私のような者も笑顔でゼミに加えていただき、とても嬉しかったことをいまでもよく思い出します。

約四十年前、学習院大学の学部・大学院在学中、朝鮮史研究会会員でした。宮田先生が学習院に出講された東洋史特殊講義も受講しましたし、朝鮮史研究会の関東部会例会や大会、夏季合宿等、さまざまにご指導いただいたことを懐かしく思い出します。一番の思い出は、姜徳相先生の新宿のお店に連れて行っていただき皆様とわいわいいろんな議論を重ねたことでしょうか。旗田巍先生、梶村秀樹先生、宮田節子先生ら朝鮮史研究会で教えを受けたことは研究活動から離れた後も今日に至るまで私のアイデンティティの根幹にあるものと思っています。それにしても時が過ぎ去るのは早いものだと思うこの頃です。

何時だったか、韓国でご一緒させていただいたことがありました。あれは確か韓国で「民族独立記念館」が開館した年ではなかったかと思います。その独立記念館の設立の中心となった愼鏞廈氏に話が及んで、宮田さんが次のようにおっしゃったことを覚えてます。つまり「愼鏞廈氏は“総督府が朝鮮土地調査事業実施時に自己申告制を採用したので無学文盲の農民は申告できず土地を取られた”というのよ。」と。宮田さんはそれは違うと言いたかったように思います。　その後、宮嶋博史氏や李栄薫氏などによってこの“無学文盲”による土地収奪説は否定されていますが、そもそも愼鏞廈氏のこの発想に対して宮田さんは「農民蔑視」のひびきを感じたのではないでしょうか。そのへんは敏感な先生だったと思います。

修論を朝鮮史研究会例会で報告した際にいただいた評、ご指摘が非常に温かみのあるものだったことが印象深いです。

はじめて朝鮮史研究会関東部会例会で発表した折に、多くのアドバイスをいただいたことをよく覚えています。学習院東文研助教の折には朝鮮総督府関係者録音記録プロジェクトで大変お世話になりました。

大学院の時に、早稲田のゼミに参加させていただいていました。姜徳相先生の日本人名の名刺を見せていただいたことがありました。

大会などでお目にかかるたび、いつも優しい笑顔で励ましの言葉をかけてくださいました。若い研究者への気さくな心配りを忘れないお姿は、私たちの手本でもありました。改めて心よりお礼申し上げるとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

私は全くの若手で、宮田先生とはお会いしたこともありません。しかしながら、修論や博論で先行研究を集める中で、宮田先生のご研究を参考に、またいかに乗り越えるかを自問自答しながら研究を進めてきました。友邦協会への聞き取りデータも少しだけ博士論文に活用させていただきまして、「あのような集まり」が「あの当時」に行われていたこと自体がいくつもの点で驚きだったことが今でも鮮明に思い出されます。

私の人生は、宮田先生の素晴らしい「東洋史特論」の授業を受講した時から始まりました。先生には感謝しかありません。

初めての例会発表は、ド緊張していてほとんど覚えていませんが、宮田先生にコメントいただいたことだけは鮮明です。これからの研究人生

でも、ずっと大切にしていきます。

早稲田大学でお世話になりました。大教室での情熱的な講義が印象に残っています。

二十年以上前の大学院生のころ「内鮮結婚と植民地統治」というテーマを研究していると宮田先生にお話したところ、「そんな〈春画的〉なアプローチでは全体像はみえないわよ」というインパクトのあるダメ出しがあり、そういうことなら、ご自宅にお招きくださり関連資料を見せてくださいました。短いやりとりだったのですが、それ以来、自分のもつ知見を後進に伝え積極的に共有していく姿勢、研究を通じて植民地責任と向き合っていくこと、など、宮田先生の歴史実践の大きさと深さについてずっと考えています。

私が朝鮮史研究会の幹事を務めていた頃、院生らの労をねぎらうために、幹事会にパンなどを持ってきて配っていたことが思い出されます。日本朝鮮研究所に関する話を聞くために、ご自宅に伺ったこともあり、現代朝鮮史研究の黎明期の話を聞かせていただきました。とくに日本の朝鮮史研究における植民史観克服のために、多大な貢献をされた方です。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

若い頃、研究会に出ると声をかけていただきました（高麗大学校の姜萬吉先生に留学時代お世話になった関係で）

大学入学後、初めて履修した科目が宮田先生の「朝鮮史概論」でした。日本史ではなくアジア史を勉強しようと考える切っ掛けを与えられた授業でした。

関東・関西合同　宮田節子さん追悼特別企画
宮田節子さんと朝鮮史研究

◎日　時　二〇二四年六月一五日（土）
◎会　場　学習院大学目白キャンパス
　　中央教育研究棟三〇二教室（東京都豊島区）
　　ハイブリッド開催
◎主　催　朝鮮史研究会
◎共　催　学習院大学東洋文化研究所

開会の挨拶
吉田　光男　氏

◇第一部
宮田節子さんと朝鮮史研究
河　かおる　氏
朝鮮史料研究会と宮田節子
板垣　竜太　氏
草創期の朝鮮史研究会・日本朝鮮研究所と宮田節子
庵逧　由香　氏
宮田節子の朝鮮近代史研究

◇第二部
宮田節子さんの思い出
李　成市　氏
北村　秀人　氏
李　熒娘　氏

閉会の挨拶
安部　清哉　氏

関東・関西部会合同　宮田節子さん追悼企画

宮田節子さんと朝鮮史研究

■日時　2024年 6 月 15 日(土)14:00～17:30

■会場　学習院大学・中央教育研究棟302教室　ハイブリッド開催

第1部　宮田節子さんと朝鮮史研究

庵逧由香氏、板垣竜太氏、河かおる氏

第2部　宮田節子さんの思い出

李成市氏、北村秀人氏、李熒娘氏ほか

主催　朝鮮史研究会　共催　学習院大学東洋文化研究所